破滅の剣がリリカルに・・・・

みーさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

破滅の剣がリリカルに・・・・

【Ｎコード】

Ｎ８１６３Ｎ

【作者名】

みーさん

【あらすじ】

歪む視界の中、振り下ろされる凶刃。死は目の前まで迫っていた。そんな中聞こえてくる男の声。「では、あきらめるのかね？」

水星（メルクリウス）を名乗る男から力を託され、主人公は何をするのか。それは作者も決めかねます。

本作はＤｉｅｓ　Ｉｒａｅに準ずる力を持った主人公（オリ主）がリリカルなのはの世界に乱入し、あれこれする話です。

初投稿の上、初心者なので誤字脱字、途中で書き方などが変わる

こともあるかもしれませんがよろしくお願いします。

改訂版です。

プロローグ1　オワリ（前書き）

設定を考え直した改訂版です。改訂前より良くなっているといいのですが。

プロローグ1　オワリ

僕は一般的な家庭に生まれた・・・・と思っていた。そう言われたので、そう思っていた。

父親はサラリーマンで母親は主婦。二人とも普通レベルの高校を出て、父親は普通の知名度の会社に入社、母親は普通の知名度の主婦になった。

両親が三十歳くらいのときに僕は生まれ、普通の一軒家で育つ。外面は何ともない普通の家庭だ・・・・・・外から見ているだけなら。

父親は重度の劣等感持ちだった。口癖は「俺だって努力すりゃ大学くらいいけたんだ！」。

母親は癇癪持ち。タバコの煙が舞っていることにキレ、ビールの缶が転がっていることにキレ、僕がソファにすわっていることにキレル。

僕が泣いていると周りの大人たちは言った。「親が怒るのはあなたの事が心配だからよ」。僕はそれを信じてみようと思った。

だけど僕も親のことが心配だったので注意してみようと思った。

・・・・ナグラレタ。

その日から殴られ続けた。

頭を撲られると、気持ち悪くなる。それまで考えていたことが頭の中で滲んで消えていく。

気がつくといつも殴られはじめた所とは違う場所に居た。廊下だったり、トイレだったり、庭だったり。とにかく冷たかった・・・・何もかもが。

そして今日。今日はとにかく父親も母親も機嫌が悪かった。

「クソ、クソクソクソクソ！！！」
父親は帰ってくるなりゴミ箱を蹴り飛ばした。中に入っていたゴミが散乱し、羽虫が飛ぶ。
「クソクソクソォ！！！あの豚ヤロォオ！！！イツモイツモオレをコケにしやがって！！！」
そう言ってカバンを壁に投げつけ、両手で机を叩く。
そして震わせていた肩を止めて僕を見た。
「・・・・・何見てやガル」
父親は醜い皺の入った顔のまま僕によってくる。
そしてそのまま僕のお腹を蹴り飛ばした。
「イツモイツモイツモイツモ！！！オレに口答えしやがって！！！」
殴られる殴られる殴られる。
頭がユラユラ揺れて、水面に二色の絵の具をたらして少しずつかき混ぜたようなグチャグチャで気持ち悪い感覚が来る。

愛って何？家族って何！人って何？

ここは一般家庭。そう。僕は一般家庭にいるはずだ。
家族は幸せを運んでくれる。家族は助け合って、お互いを癒しあう。

キモチワルイキモチワルイキモチワルイキモチワルイ

一般家庭の子供は皆こうしてキモチワルイの？クルシイの？

――――ゴロゴロゴロ・・・・

何かが転がる音がする。

気がつくと、僕はビール瓶の中に埋もれていた。

「ったく！！てめぇが女ならまだ使い道があったってのによぉ！！！」

父親が近寄ってくる。その手には鈍く輝く包丁。それが、僕に向かって振り下ろされた。

イタイ

さっきの言葉に関係しているのだろう。刺された股間が焼けるようだ。

そして父親は僕の首を掴み、再び包丁を振り上げている。

イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ

再び同じ場所に包丁がふってくる。肉が削げ落ちるおぞましい感覚が僕を支配する。

イタイ

一瞬、父親のぎらついた目と視線が遭う。欲と不満と劣等感に狂った目。

「ク・・・・ククク、フ、フフ・・ククク・・」

僕の口から笑いが漏れる。何も楽しくないのに。嬉しくないのに。

僕の心の奥から湧き上がってきたのは今まで感いなかったどこか爆発に近い感情。怒りであり、憎しみであり、悲しみであり、嘆きであり、興奮。昔テレビで見た猟奇殺人映画の犯人のような濁った嗤い。

死ネ死ネ死ネ死ネ死ネ

心の底から死ね。
命の大切さを、目を血走らせて語る現代。僕もそう思っていた。その僕が始めて「命とか消えろよ」と思う。
「ククククク、ハーハハハハハ！！！！アーハッハッハッハッハ！！！！！」
僕は歓喜する。初めての感情に。僕自身から流れ出る呪詛に。これが真に僕の求めていたものだと。

死ネ

歓喜が止まらない。魂の、その奥の奥まで溜まった呪詛が溢れに溢れて気持ちイイ。
父親が三度包丁を振り上げる。僕はその父親に向けて一言。
「シネ」
そう言う。
だが言うだけなのだ。無駄だ。子供の力じゃ馬乗りになっている目の前の男を振り払えない。
包丁が僕の顔にせまる。

理不尽だ理不尽だ理不尽だ理不尽だ

怒りが僕の頭の中で弾けて、殺意以外のナニモノでもない爆発的な指向性が僕を満たす。
不愉快だ。あぁ不愉快だ。何もできない自分が何物にも代え難く不愉快だ。

「では・・・・あきらめるのかね？」

男の声が頭に響く。
僕自身も目の前の包丁も動かなくなって、男の声だけが聞こえる。
「死はそこまで迫っている。見えるだろう？その振り下ろされる凶刃こそが、君の死だ。君にはそれから逃れるすべはない。だが、君は諦めているわけではない。いや、諦めることができない」
（そうだ。僕は目の前の理不尽が納得できない。死を前にしても、死を嘆けない。目の前のモノを破壊したくてしょうがない）
「そうだ。君はなにも悲しんでいない。嘆いていない。そんな感情はここで砕けた。今の君は真の苦痛の果てにたどりついた。誇るといいだろうよ。そこまで逝ってまだ理性が残っていることに」
男がクツクツと哂う。何がそんなに面白い・・・・。
「いや、失礼。面白いわけではない。うれしいのだよ。君が、周りの人間の言うことをただ信じた純朴な君がこんなにも早く、的確に感情の裏側を理解した。本来ならあり得ないことだ。だが、それは君が生きた環境と、何より君の資質だろう。それが、面白い」
（どうでもいい。そう、どうでもいい。あなたが僕をどう思おう

と、今の僕はそんな言葉しか返せない。目の前の死に、牙を向けたい）

「まったく、君はかつての私の友人の好みにぴったり合う。無論、私の好みにもね。

君は堕ちた。だが君の魂は輝きを失わない。それどころか全てを拒絶して漆黒に光っているよ。私も目を背けそうなほどの美しさだ」

男は恍惚に言う。僕にはこの男が理解できなかった。

この男は僕が今まで会ってきたあらゆる人間と違う。

何を望んでいるのか分からず、何を目指しているのか分からず、この場で何をしたいかさえ分からない。

「君は力が欲しいのだろう？」

男は今までの漂うような声色とはうって変わって、硬質な声で言う。

（あぁ。欲しい）

それは僕の切実な想い。「破滅」というものに恋焦がれている。魂が熱を持つのだ。

「その願い、聞き届けるのも一興。何より君のような存在がここで消得てしまうのが、私は我慢ならない」

時が止まった世界の中、自分の中に蠢く物がある。それは線であり、円であり、文字であり、模様である。それが全身に廻って、「自分」というモノが変質していくのを感じる。

次の瞬間――――

ドクン！！

――――と、何かひときわ大きな力が僕の中で脈打つのを感じた。

それは剣だった。

刀身も、つばも、柄も、鞘や飾り帯にいたるまですべてが漆黒で塗り粒さた剣だ。その表面に氷青色（アイスブルー）の何か魔術的な模様が奔り、聖も邪も、暖かさも冷たさも感じさせない無。ある種の「破滅」がそこに再現されている。

「さあ、行くがいい。目の前の死を破壊しろ。あの男の様な暗愚が、君のような絶対を穢していいものか。それを教えてくるといい」

男の声が段々と遠ざかっていく。

それとともに世界がゆっくりと動き出す。父親の口からはじけた唾は地に落ち、凶刃は僕に迫る。

だが、それが僕に当たってどうなると、さっきまでの危機感はなかった。

――――ギンッ！！

と、僕とぶつかった包丁が音を出す。僕には傷一つつかない。

父親の手から離れた包丁がカツンと木の床に落ちる。

父親は驚愕して僕を見、僕は今までとは違う、熱さと鋭利さを持った視線で父親の眼を見る。

・・・・不快だ。

僕の中の剣は今にも暴れ出しそうに騒いでいる。

それに意思はない。この剣はただの力の塊だ。聖も邪もなく、守護のためでも殺戮のためにも存在していない。だから言うなれば「力」。ただ「破壊」「破滅」「消去」。そういう全方位に爆発する指向性。

僕はそれを父親へ方向づけて開放する。

――――バシュ！

父親は脳天から真っ二つに両断される。
だがそれだけでは終わらない。僕は何閃も何閃も執拗に放ち、父親を、もう父親と判別できなくなるまで細かく裂く。
バラバラと残骸が床に落ちる。その中でゴロゴロと、眼球が転がった。
僕はすぐに十字に切断する。これで父親と分からなくなった。

――――ガタン！

音のした方を振り向くと、母親が腰を抜かしている。
僕は足元に落ちている包丁を手に取り、そのまま母親に向かって歩き出す。
「ヒッ！！！」
母親は逃げようとするが、腰に力が入らずその場でじたばたしている。
「ゆ・・ゆうちゃん、ゆる、して・・？」
母親から僕の名前が漏れる。何もかもが不快だ。その声も、臭いも、存在も。
母親は涙を流し、失禁し、必死で足を動かしている。
「・・・・死ネヨ・・・・・」
僕は包丁を振り上げる。
「あ・・あ、あぁぁ・・・・」
そしてそのまま振り下ろした。

――――ゴトン

と、額に包丁の突き立った母親の頭が床に落ちる。
僕は無言で母親の頭を踏み砕く。そして五体は父親と同じでバラバラに。

視界は未だ歪んでいて、なんだか眠い。今まで数えるのも億劫なくらいに感じてきた感覚。
僕はそのまま意識を手放した。

今日は僕の七歳の誕生日。僕は初めて、「嬉しい」に似たある種の達成感を持った。

プロローグ1　オワリ（後書き）

投稿後、いきなりの書き直し。迷惑をかけています。
頑張っていくので、よろしくお願いします。

プロローグ2　水星（前書き）

プロローグ2はほとんど書き直しました。内容はあまり変わってないのに。

プロローグ2　水星

天地という言葉は、単に上下関係を表すものなのだろうか。
そうだとするなら今の僕は地面に横たわっている。
しかし、それが世界への畏怖を込めた単語であったとするなら、今、僕が接している面は本当に地面と言えるのだろうか。

そんなことを考えた。
僕の体重を支えている面は暖かくない。だからといって冷たくもない。表面には凹凸がないのに適度な摩擦が存在し、何よりまったく見えないのが地面という言葉を僕の認識から奪っているようだった。
ただ、正しくは全てが見えないと言える。天も地もただ暗い。目に映るのはただ単に黒。これでは僕のいる空間の大きさも満足につかめない。
しかし真っ暗であるはずの黒い世界で、僕は黒くなかった。自分自身発光しているわけでもないのに、理想的な光量のもとにいるように手足が見える。

その世界に一人、男が漂っている。
上半身しかその男にはなく、透き通って後ろの黒が見える。
その男がうっすらと笑みを湛えた唇を開く。

「ごきげんよう＊＊＊君。ここの寝心地はどうだったかね？悪くはないと思うのだが」

僕の家で、時間の止まった世界で語りかけてきた声で男が聞く。
わけの分からない光景だ。暗さ以外の何もない空間に、半透明で、その上身体の大半を失った男が浮かんでいる。

まぁ、意味不明といえば、僕の家で起こった出来事。あれはいったい・・・・。
「その様子だと。案外悪くはないようだ。聡い君ならもう分かっているだろう？こうして私と君が話すのはこれが二回目だということが」
「あぁ。僕は貴方に力をもらった。あれは、剣だった」
「おや、実物を見たわけでもなく、もう既に己が身に宿す聖遺物のカタチが分かるのだね。いやはや。我が息子以上の逸材か」
そうして男は目を細めてクツクツと哂う。
「何故、僕に剣を？」
「それは君にとって重大なことかね？」
・・・・別に必要な事じゃない。僕は、力があればそれでいい。それで壊したい物を壊せれば僕は満足なんだと、あの凶刃の下で思い知った。
「だが、気になるのだね。
理由に関しては、私が君に興味を持った。それが全てだよ。世界も人も、単調でつまらない。しかし、時として君の様な興味深い存在が生まれる。「黄金の破壊公」然り、「サン・マロの宝石」然り。
私はそれに魅力を感じ、愛おしく思う」
男は、「それが私の欲なのだよ」といって締めくくった。
欲か。誰しもが持っているものだと思う。今の僕にももちろんある。もっともそれは際限なく撒き散らしてはならないものだが。
「美しさには二種類のものがある。それは善悪のように正反対ながらも、同じ感情を与えてくれる。
一つは、あるいは野山、海。そして美麗な装飾。世界を彩るものだ。
もう一つは、圧倒的破壊、狂気、人々の嘆き。人を魔敵に誘うものだ。
君は後者だね」
嘆き・・か。僕は、父親に殴られている時も、母親に耳を引かれ

て引きづり回されているときも、特に悲しくなかった。
ただ辛かった。苦しかった。あれが、嘆きなのだろう。
「あぁ、私が興味を持ったことが全てといったが、一応の理由はほかにもあったか。私自身、君の中の聖遺物の処分に困っていたという理由が」

＊＊＊＊＊＊

男はメルクリウスと名乗った。
どうもすでに死んでいる人間で、今僕と話しているのは消えきれていない残滓にすぎないらしい。
メルクリウスは僕の身に刻んだエイヴィヒカイトという秘術や、聖遺物と呼ばれるものの存在について語った。

聖遺物とは一般に聖人が生涯長く持ち続けた道具だったり、多くの信仰を集める際具の類らしいのだが、戦場で多くの血を吸い、呪詛が固まった品もそれに入るそうだ。
僕に渡した聖遺物は、「破滅の聖剣（Ｅｘｃａｌｉｂｅｒ）」。本家本元の守護の剣、エクスカリバーの類似品らしい。
剣、鞘、飾り帯の三つからなる複合聖遺物で、それぞれが破壊、守護、拘束の能力、もしくは役割を持つ。
自分すら殺す力を持つ、ある計画の保険として湖の妖精を筆頭とする異能の存在に作らせた、「力」の塊だそうだ。

すでに三週間くらいたっているだろうか。真っ暗なので今一時間の感覚が分からないが、そんな感じである。
僕は今、メルクリウスから聖遺物の扱いと、エイヴィヒカイトの知識について学んでいる。何でも、「君という絶対は、やはり超越者でなければ」らしい。
世界理論とでも言うべきそれは、一介の小学生である僕には荷が重い。
有無を言えないスパルタで、何とか「基礎理論」を習得。でも「特殊理論」はその数十兆倍の量があるらしい。そちらは、消滅までの限られた時間で教えるのには無理があるということで保留となった。
だが、「特殊理論」の一つ、「解析」は覚えさせられた。数式や物体知識さえあれば、あらゆるものの理解が可能という利便性に優れた魔導だ。
聖遺物の方は、先日第三の位階、創造位階までたどり着いた。実戦が皆無なので進み方が遅いのが彼には不満らしい。

この三週間でメルクリウスの体は一層薄くなった。初めて相対した時の、まだ強かった生命感が今では見る影もない。
そして、メルクリウスの身体にノイズの様なものが奔る。
「おや、名残惜しいが、ここまでのようだね」
この三週間で分かっていたことだが、メルクリウスは自分の死を受け入れている。この死を回避することなど無粋と言いたげだ。そんなに満たされた死なのだろうか。
メルクリウスは過去をあまり語らない。何とか垣間見れたのは戦いの参考にと見せられた、十三人の騎士たちの戦争をメルクリウスが誘導したということくらいだろう。
「君に全てを伝えられなかったのは心苦しいが、それ相応の準備段階は既に終わっている。その聖遺物と「解析」があれば、いずれは私を超えられるかもしれない。私も、全知全能というわけではな

いからね」
メルクリウスにとって僕という存在はどんな位置づけだったのだろうか。
弟子というにはお互い信頼が足りず、友人というにはお互いを知れていない。だが知り合いというにはおかしな引力で引かれているような、そんな感じ。
「私が維持しなくなったこの世界は、すぐに形を失うだろう。君の、真の意味での始まりはそこからだ。どの世界へ行き着くのかは私には分からないが、私は君が君らしくあることを望んでいるよ」
穏やかな笑みを湛え、メルクリウスの薄い身体が崩れていく。今、彼は何を思い出しているのだろう。
死んでいく人間は走馬灯を見るという。少なくとも彼が見ているとすれば、満ち足りたひと時なのだろう。
死・・・まだ僕には分からないな。
そして口元が消え、眼が消え、メルクリウスはこの世から消え去った。今、僕は暗い世界にただ一人。

そして、主を失くした世界が軋みをあげる。音もなく、熱もなく、捻れ、斬れ、崩れていく。
僕の体に負荷がかかる。世界が崩れているのだから当然かもしれないが。
最後に、バリン！と、砕ける感触が身に響き、僕は「外」に放り出された。

プロローグ2　水星（後書き）

遊戯王タッグフォース5を買いました。

クロウ「あぁ？何だって？十六夜が何かトゲトゲしているみたい？あぁ、そりゃ…」

ジャック「よくぞ見抜いた、十六夜のエースモンスターはブラック・ローズ・ドラゴンだ」

さすがジャック！

作者はジャックが5D's キャラで一番好きです

第一話　管理局、初戦（前書き）

今回の話は手直し程度で済みました。

この作品ではエイヴィヒカイト＝何でも魔術という位置づけ。作中でメルクリウスの法術についての描写が少なかったので・・・・。

第一話　管理局、初戦

うぅ・・・・む？

「あ、起きた起きた！」

僕の意識は覚醒した。そこは白を基調とした病室と思われる空間で、頭から猫の耳を生やした二人の女の人が僕を覗き込んでいた。

「大丈夫？何が起きたか話せる？」

髪の長いほうの猫耳の女の人が僕に聞く。

何が起きた？それは僕も分からないんだけど。ここは何処だろうか。少なくともあのメルクリウスの空間でないことは確かだ。

僕は左に窓があり、外の様子を窺えることに気づく。

・・・・・・そこは近未来の世界だった。船が宙に浮き、そこかしこがＬＥＤのような硬質の輝きを放っている。

「・・・・・・・・」

「どうしたの？」

「いや、ＳＦ小説の世界みたいだなって思って・・・・」

僕はそう返した。

「ＳＦ？ここは現実だよ～」

今度は髪の短いほうの女の人が言う。まぁ、僕がみているこの光景はこの世界での確かな日常なのだろう。

僕は異世界に来てしまった。僕がもといた世界から黒い世界に行ったときと同じように。

「あ！そうそう！自己紹介しないといけないんじゃない？」

「そうね。でもクロノ君ももうすぐ戻ってくるだろうし、リンディさんも一緒って言ってたから、合流した後にしよう」

髪の長い女の人が短い方に言葉を返す。

さて・・・・僕はこれからどうなることやら。

それからすぐに二人、大人の女の人と、その子供であろう男の子がやってきた。たぶんこの二人がクロノ君とリンディさんだ。
「あ、起きたんだね。良かった」
黒い髪の男の子が僕にそう言う。
「では、話を聞かせてもらえますか？」
黄緑色という現実離れした色の髪をポニーテールにした女の人が尋ねてきた。
「そんなことより自己紹介でしょ」
猫耳で髪の短い女の人の提案により、自己紹介が始まることとなった。

「えー、コホン。さっきはいきなり失礼しました。私はリンディ＝ハラオウン。管理局に勤めています」
始めに黄緑色の髪の女の人が咳払いをして自己紹介を始めた。
管理局？たぶんここのことなんだろうけど・・・・何だか不審な団体に聞こえるな。管理って。
「僕はクロノ＝ハラオウンだ。母さ・・リンディ提督の息子だ。クロノと呼んでくれ」
「私はリーゼアリア。よろしく」
猫耳で、髪の長いほうの女の人はリーゼアリアというらしい。
「私はリーゼロッテ。よろしくね！」
髪が短く（あくまで対比の問題）、どちらかといえば元気な方がリーゼロッテというらしい。
「で、君は誰なのかな」
リンディさんが少し身を乗り出して聞いてくる。

何と説明したものかな・・・・実際どんな状況か、分かってないのは僕も同じだし、話せるところは話してしまってもいいかもしれない。流石に聖遺物とかエイヴィヒカイトの詳細（特にエイヴィヒカイトの秘奥に関すること）は抜かざるを得ないけど。

「僕は澪、茜火　澪といいます。どうしてここにいるのかは・・分かりません。普通に暮らしていたはずなんですが」

名前については偽名だ。本当の名前はここで捨てる。この世界には僕の名前はない。どう名乗ろうと、それが僕の名前になる。

「じゃあ次、魔法、というものに聞き覚えは？」

何でそんな質問するんだろうリンディさんは。まぁ、この世界には魔法が当然のものをして存在しているということなのかも。

「それはどういうものをいうんですか？」

「あー、クロノ。見せてあげなさい」

そんなに簡単に魔法を見せてもいいのかな・・・・。あぁでもこの世界で魔法が日常的なものなら、結局同じことという考えかな。

「分かりました」

クロノは懐からカードのようなものを取り出す。

「起動」

そう言うとカードが光って、次の瞬間には杖になっていた。

推察するに、カードは「起動」の言葉と共に魔導の力によって圧縮削減されていた質量を開放し、その機構を組み替え、杖となった。杖にはクロノ本人の魔力が満ちている。「解析」を発動すれば何かわかったのかもしれないが、この状況でのそれは自殺行為だろう。僕は身元不明者という扱いだろうし。

「スフィア形成」

クロノのその言葉と共に足元に魔法の・・・・制御陣だなあれは、が浮かび挙がり、手元に水色の光る玉がうまれる。

エイヴィヒカイトで発達した五感でも熱量をとくに感じない。どうやら光を発するだけの飛び回る玉のようだ。

クロノが杖を動かすと、光る玉も飛び回る。

「こんな感じなんだけど」
リンディさんがクロノを指して言う。
「まぁ、同じようなことは出来ますけど」
「やってみてくれるかしら。あ、デバイスは必要かしら？」
デバイス・・あの杖のことだな。
「いえ、特には・・」
僕はそう言って手の平を宙に向ける。そしてエイヴィヒカイトの制御陣を形成する。
エイヴィヒカイトとは、単なる魔術ではない。かつて地球に存在した、錬金術、ルーン、ケルト魔術、星辰術など、ありとあらゆる魔術の集大成、その頂点に立つべき魔導だ。
よってその制御陣も雑多な魔術体系の混ざった複雑怪奇なものとなる。まぁ、今回は魔力で光る玉を作るだけなのでそんな難しいものにはならないが、さっきのクロノの魔法のように円と四角と文字だけということにはならない。
僕の手の平に、円と三角と幾何学模様でできたエイヴィヒカイトの式が展開される。
「え・・？」
「なにこれ・・・・」
リンディさんとリーゼアリアさんは僕の出した魔方陣に驚く。
僕の手の平の上の魔方陣、その上に魔力で出来た光る玉が生まれ、宙を自在に飛ぶ。
「なっ！デバイスなしで魔法を！？」
クロノはデバイスと呼ばれる機械を介さずに魔法を使ったことに驚いている。
「僕にはデバイス・・っていう物の方が理解できないんですが。まぁ、魔法の補助具といったところなんでしょうが」
「えぇ。そうよ。ほとんどの魔導師はデバイスに魔法を組み込んで魔法を使うわ。その方が早いし効率的だし、どんな状況でも一定の効果が得られるから」

リンディさんが答えてくれる。
話から察するに、デバイスという機械に魔導の式を組み込んでおいて、必要に応じてデバイスに引き出してもらう・・というところか。頼りすぎじゃないかな？デバイスを壊されたら何も出来なくなる気がする。
「話しを聞くに・・ここは僕のいた世界とは違うようですね」
「世界が違う・・？」
リンディさんは僕の言葉に疑問符を浮かべた。
「えぇ。僕のいた世界にデバイスと呼ばれようなものはありませんでした。というか、魔法と呼ばれるものも、一般的ではありませんでした。僕も、僕に魔導を教えてくれた人以外見たことがありませんし」
「その人は？」
「もう、いませんよ」
その言葉に僕以外の四人の顔が固まる。
「まぁ、しょうがないですよ。一種の寿命みたいなものでしたし」
「そ・・そう。それで、世界が違うということだったけど、あなたは次元漂流者ということでいいのかしら？」
また知らない単語が・・・・。
「次元漂流者ってなんですか？」
リンディさんがすかさず説明する。どうも次元漂流者というのは魔法の事故や次元の歪みに撒き込まれ、もといた世界にもどれなくなってしまった人たちのことをいうらしい。
「まぁ、その認識ならそうですね。僕のもといた世界にどう戻ったらいいかなんてことは知りません」
「そう。じゃあ君の身柄は私たちが保護することになるけど、いいかしら？」
「それはありがたいですね。今の僕は右も左も分からない状況ですし。あぁ、それから僕が目を覚ますまでのことを教えてくれませんか？」

「あ、それは私が説明するよ！でもお腹空いてきたし食堂行かない？」

リーゼロッテさんの提案で僕たちは食堂に移動した。料理はどれも名前が分からないものばかりだったが、出てきたものは地球の料理とそれほど変わらないものばかりだった。

どうも僕は、リーゼロッテさんとリーゼアリアさんがクロノに訓練をつけているところに空から降ってきたらしい。

気を失っていたので慌てて医務室に運んだそうだ。

それから少し説明を受けた。

ここは管理局本局で、ミッドチルダという世界・・この場合星かな？から多くの魔導師が勤務しているということ、デバイスというものの存在意義、管理局がどういう組織なのかとか、まぁ、そんなところか。

あと、僕は魔力が結構すごいらしい。こちらの基準でＳ－ランク相当の力（勝手に魔力を測られたことに少し憤った）があり、この歳でこの魔力は規格外だとか。

もっとも、今は放出魔力をエイヴィヒカイトで制御している。それが無ければ全世界基準で規格外な数値が出たかもしれない。これはメルクリウスがしておくと過ごし易い（魔力温存のためにも、無駄な戦火を招かないためという意味でも）ということだったので真似した。

また、そんな魔力を子供を放っておくと何者かに悪用されかねないので、被保護者か、もしくは養子という形で保護したいんだそうだ。

どうもこの管理局という組織にも暗部はあるようで、管理局の保護を受けるのは止めておいた方がいいとのこと。僕も組織に保護を

頼むことはしたくない。特に正義とか、人である以上簡単に語れない美辞麗句を掲げる団体には。
「すごく綺麗な髪だねぇ」
ハンバーグみたいな料理を口に運んでいると、リーゼロッテさんが話しかけてきた。
僕の髪は濃紺色だ。切ったことが無いので伸び続け、腰の位置まで毛さきがきている。
「そういえばさっきの魔力球もただ光ってるだけじゃなくて、透き通って煌めく感じだったねぇ。うらやましいなぁ」
ちなみに眼は透き通るようなアイスブルー。僕自身の魔力色と同じ色だ。
「そういえば、デバイスって僕でも使えるんですかね。機械とかには疎いんですけど」
気になっていることを聞いてみる。
「う～ん。使えるんじゃないかな。デバイス使うのに機械の知識なんていらないし、さっきの魔力制御を見るに魔法の腕は完全に私たちを超えてるから」
「なっ！」
クロノが悔しそうにこちらを睨んでくる。
「こーらっ！年下の子をそんなに睨まないの」
そしてリーゼアリアさんにチョップを入れられている。
「じゃあ使ってみる？」
リーゼロッテさんは目の前の光景を無視してそう言う。
「はい。できれば」

昼食を終え、訓練場というところに移動した。そして先が「し」みたいな形になった杖を渡された。

僕の横にはリーゼアリアさんがいる。リーゼロッテさんはクロノの訓練ということで違うブロックの方に行ってしまった。リンディさんは艦長としての仕事があるということで自分の次元航行艦に帰って行った。

「その杖にはさっきクロノ君が使ってた魔法が入れてあるから。私が指示に従って使ってね。まずは　「「ＭＤセットアップ」って言ってみて」

「はい。ＭＤセットアップ」

そう言うと杖が一瞬氷青色に輝き、「ｓｅｔ　ｕｐ」と杖から声が聞こえてきた。

「よし！一発で起動！さすがだねぇ！じゃあそのまま「ライトスフィア」って言って」

「ライトスフィア」

僕がそう唱えると杖が一瞬光って、バチッと僕の手との間で火花が散ってカランと地面に落ちた。

「え！？何で！？制御は完ぺきだったのに・・・・」

これはたぶん僕の体に刻まれたエイヴィヒカイトとの干渉だな。雑多な魔術要素が内在しているだけに、このミッドチルダ式という魔法に部分的にだけど拒絶反応を起こしてしまう。

僕が既存のデバイスを使うのは無理だな、使うならエイヴィヒカイトを使った魔法をデバイスに組み込んで使うか、エイヴィヒカイトとミッドチルダ式の緩衝術式を研究するか、そのどちらかだろう。まぁ、前者の方が簡単で効果も高い。使えるのが僕だけになってしまうが。

「僕固有の術式と拒絶反応を起こしたみたいです」

「そんなばかな・・デバイスに入っている魔法を使っただけなのに」

「僕の場合は特別なんですよ。身体にも術の処理をかけてありますし。」

リーゼロッテさんはひとまず納得したようだ。

僕らはリーゼアリアさんとクロノと合流するため、別ブロックに移った。

「何でこうなったんだろう・・・・」
僕は今、訓練場でクロノ君と向かい合っている。
「あはは・・ごめんね。クロノ君がどうしてもっていうから・・」
まぁ、分かる気がする。子供にとって、自分が相手より強いということを証明するのは大切なことなのだ。現代では多くの人間がそのまま何も考えずに大人になっていくので性質が悪いのだが。
「さあ、いくぞ！澪！」
クロノはさっきも持っていた黒い杖を構えている。特注品かもしれない。
クロノは僕に三つの魔力弾を放ってくる。事前に説明を受けたとおり非殺傷設定で物理破壊能力は限界まで削減されているようだが、直接喰らったら魔力ダメージで意識が飛ぶな。
僕は手を前に掲げ、障壁を展開する。僕の中の剣の鞘の特性を発現させ。
クロノの魔力弾は僕の障壁に当たった瞬間停止する。僕の障壁はクロノの三つの魔力弾を中心に水面の波紋の様にアイスブルーに煌めく。
ややあって、クロノの魔力弾は破壊された。
「な、なんだ！今の魔法は！」
クロノは叫ぶ。
「僕固有（本当は聖遺物の鞘の活動）の結界だよ」
僕は応えて腕を振る。聖遺物「剣」の活動位階。それを乗せて。
活動位階・・聖遺物の性質を発現させる位階。僕の聖遺物は剣であり、槍だ。その効果は斬撃と突き、次点で殴打といったくらいか。

ちなみに、飾り帯の能力は今の位階では使えない。飾り帯の能力が使えるようになるのは第二の位階、聖遺物の形を成す、形成位階以降だ。飾り帯の「拘束」能力の発現には、物理的な接触が必要だからね。

一応、使用魔力の制限内だし、非殺傷となるように刃はつぶしてある。

不可視のはずなのだが、クロノは何かを感じ取ったのかＳ２Ｕを左に掲げ、障壁を張る。斬撃が障壁に当たり、砕ける。

活動位階の不可視能力は魔導師に対して無効か。魔力を日常的に使っているからか感度が高い。

何より特性を引っ張り出すだけの活動位階は攻撃の密度が薄い。思ったような攻撃力が得られない。

さっきの障壁も、形成位階で使えば拮抗する間もなく弾き飛ばしていたところだ。

「く・・・・」

「あー、今のを防ぐとはね・・まぁ、いいか。一応奥の手だけど、いつかは分かることだし・・・・」

「何を言っている！」

「形成・・・・破滅の聖剣（Ｅｘｃａｌｉｂｅｒ）」

聖遺物を形成位階に引き上げる。それとともに僕の手には黒一色の両刃剣が現れる。刀身１２０ｃｍ、全体では１６０ｃｍに届こうかという長剣だ。七歳児の僕が持つと洒落にしか思えない。

鞘と帯は形成しない。効果は活動位階の薄いものになってしまうが、鞘の能力は形成しなくとも使えるし、一応クロノの様子見の魔法を防げることはさっき分かっている。何より専用の服を作って掛けられるようにしないと邪魔でしょうがないだろう。

黒い剣の刀身には六つの目の様な模様が瞬きを繰り返している（完全に開いた状態はただの二重丸だが）。それがクロノの恐怖心を刺激したようだ。

この眼は魔力の放出を制御する「絞り」の役割を果たしている。

全ての眼を閉じた状態なら完全に放出される魔力がシャットダウンされるので、一見ただの剣を装えるだろう。もっとも、完全に開いた状態でも放出する魔力の調節は僕自身の裁量でできるため、放出する魔力を完全に消す以外はあまり意味のないものなのだが。

「伸びろ・・」

その言葉とともに全ての眼が閉じ、螺旋状の柄が回転して伸び、一メートルほどの長さで止まる。

こうすることで槍としても使える聖遺物なのだ。本当はもっと長くできるのだが、身長とのバランスを考えるとこれでも長いくらいか。

「スティンガー！」

クロノは五つの魔力弾を撃ってくる。僕はそのうち四つを槍を旋回させて弾き、一つは単に手で弾く。いちいち結界を形成していたら攻められないからだ。

「「え！？」」

それにはリーゼアリア、リーゼロッテも驚いだようだ。

僕はクロノに接近する。魔力制限状態の僕の身体能力は、メルクリウス曰く「一般騎士団並み」。出力としてルサルカ＝シュヴェーゲリンという、黒円卓という団体に所属していた人と同じくらいということだ。

時速百五十キロ（全速では二百キロ以上）を超えてクロノに肉薄する。

クロノは驚いて障壁を張るが、聖遺物はそれを軽く切り捨てる。そして伸ばした柄を旋回させてクロノの意識を奪った。

第一話　管理局、初戦（後書き）

改訂前の話と同じ所まで進んだので、前のページは削除します。

エイヴィヒカイトの活動位階の描写はこれ以後出てこないつもりです。

第二話　トラウマと傷痕（前書き）

ｗｏｒｄは投稿サイトと相性が悪い。ということで無料のテキストエディタをダウンロードしました。
でも僕はブラインドタッチができません。

日曜日は習い事で結構忙しい。そんな中でも前々から書いていた第二話が書きあがったので投稿します。

第二話　トラウマと傷痕

模擬戦？の後、僕はクロノと一緒に医務室に担ぎ込まれた。
どうもこの世界の魔導師の服がデバイスを起動すると変わるのは、あれも防御魔法の一種で魔力、物理共に防御力を持っているらしい。
僕は何の防御もなしにクロノの魔力弾を手の平で受けたと思われたみたいだ。
まぁ、実際はエイヴィヒカイトによって霊的強度を手の平だけ上げたのだ。最もそれがなければ僕の防御力を突破して、非殺傷とはいえ火傷をしたかもしれない。
それを説明したらリーゼロッテさんは「まったく、心配させないでよ〜」と肩から力を抜いた。

あと、もう既に終わったことなのだが聖遺物を使ったのはまずかったんじゃないかと思う。切り札だし、模擬戦はかたくなに断っておけばよかった。
実は僕、魔導師だと言うのに火花一つ起こせません。エイヴィヒカイトの「基礎理論」はあくまで魔力の運用。魔力の変質は「特殊理論」の方だ。
攻撃用の魔法も、今は無属性の魔弾のみ。クロノとの模擬戦のときに使ったあの「鞘」の結界も、様子見の魔法だから受けられたのだ。。あれが高出力のビームみたいな魔法なら易々と破られる。クロノの魔力が僕より低いとしても。
形成位階以上で「鞘」の結界を張ろうとすると、僕の全魔力を消費しても四、五回が限度だ。空間断絶に等しい効果があるが、攻撃や逃走に使う魔力を考えると戦闘中に二、三回使えればいいほうだ。
欲を言えば僕の使えるデバイスが欲しい。そうすれば攻撃も防御

も安定するだろうし。
まずはここミッドチルダの魔法を「解析」し、術式をエイヴィヒカイト用に書き直す。そうすれば拒絶反応は起こらないはずだ。
出来れば剣型がいい。変形って出来るのかな？槍とか欲しいし。

「澪君！！」

「うわっ！」
ビックリした。
リーゼアリアさんがかなり大きな声で僕の名前を呼んだ。
「もう・・さっきから呼んでるのに。無視しないでよ」
あ、僕が気がつかなかっただけみたいだ。
「すみません。考え事をしていたので。で、何ですか？」
「うん。さっき模擬戦もしたし、君の落ちてきたところって土だったからさ、シャワー浴びてきなよ。洗濯しておくし、着替えはこれ使って。それと、シャワー室は向こうのほうに行けば分かるから」
リーゼロッテさんは壁を指差す。まぁ、方向のことを言っているのだろう。
僕はTシャツとジャージを受け取った。よく分からない字が書かれている。ここの言葉は何で日本語と発音が同じなんだろう。
「分かりました。じゃあ行ってきます」

＊＊＊＊＊＊

シャワーを浴びて医務室に戻るとクロノ君は起きていて、リンディさんも来ていた。
「あ、早かったねぇ！」
リーゼロッテさんがいち早く僕に気づく。
「さて、大事な話があるのですが・・いいですか？」
リンディさんが僕の前に進み出て言う。
「はい」
「澪君には大きく分けて二つの選択肢があります。一つはこのまま管理局の孤児院に入ること」
・・・・ぜひとも遠慮したい選択肢だ。さっき管理局員であるリンディさん本人が僕の高い（と言われた）魔力を利用される可能性を示唆した。管理局の管轄ということは、その孤児院の管理人がどのような人物であれ、上の人が僕を連れて行くといったら逆らえないと思う。
「もう一つが、「家族」として――――――」

――――ドクン！！

「家族」。その言葉を聞いたとき、心臓が止まるかと思った。
息が苦しい。眩暈がする。キモチワルイ・・・・
一瞬、バツッ！と視界が切り替わり、何かが見えた。
イタイ・・・・クルシイ・・・・・・・。
ノイズが耳を支配し、三半規管が麻痺していく・・・・。
僕は今立っているのか、天地はどちらなのか、分からなくなっていく。

バツン！バツン！バツン！

視界が拘束で切り替わる。

そして墜ちていく。あの２ＬＤＫの部屋へと。

グニャグニャに歪む視界の中、慌ただしく口を動かし、唾を散らす父親が包丁を振り上げる。

刃物が肉を切り裂くオゾマシイ感覚がよみがえる。

意識が赤く染まる。感覚も感情も冷え、魂が熱くなる。

恐怖と共に更に視界は歪む。

そして再び父親は右手を――――――

「澪！おい澪！！！」

そこは薄暗い２ＬＤＫとはうって変わって真っ白で清潔な部屋だった。

目の前ではクロノが僕の肩を握って必死の形相だ。

「あ・・・・」

僕の口から漏れたのは安堵の息だろうか。

全身に力が入らない。まるで深海から上がってきたよう。

息が吸えない。身体中が水圧で軋んだように動かない。

「ハ、ハ、ハ、ハ」

僕は短く、コンスタントに息を吸い込む。

その間もクロノは僕の身体を支えてくれる。

・・・・・・・・落ち着いてきた。

「すみ・・ません」

僕はそれだけ言う。

「どうしたの？・・だいじょうぶ？」

リンディさんは膝を折り、僕目線の高さを合わせる。

「何があったか、聞いてもいいかな・・」
そしてすごく遠慮がちに聞いてくる。
「・・・・はい」
僕は簡素に返して履いているジャージのズボンに手をかけ、下ろした。
「「ひゃ！」」
リーゼアリアさんとリーゼロッテさんは羞恥からか目を背ける。
もっとも、その方がいいのかもしれないが。
僕がズボンを下ろすと、そこには左脇腹から右太ももにかけての凄惨な傷痕。
そして男が♂（オス）であるための要素がそこにはない。
「「う・・・・」」
クロノとリンディさんは顔を歪ませる。
「それ・・は？」
そこはやはり一日の長があるのだろう。リンディさんは逸早く平静を装い聞いてくる。
リーゼアリアさんとリーゼロッテさんもその頃には僕の身体に奔る傷痕に唖然としている。
「父親に包丁で切られた後です・・」
「「「なっ！！！」」」
リンディさん以外の三人が驚嘆する。
「さっきリンディさんの口から「家族」という単語が出たときにその時のことがよみがえってきて・・・・」
「そう・・・・だったの。じゃあ、私たちの家族になるって言うのは・・・・」
「はい。止めてもらいたいです」
「じゃ・・じゃあ保護責任者として一緒に暮らすのはどうかしら？」

「はい、そっちならなんとか」

結局、「家族」として一緒に住むのも、「保護責任者」として引き取ってもらうのもその実態に変わりはない。

でもどうしてこんなに「家族」という単語を遠ざけることに安堵するのだろうか。

あるいはこれがトラウマ・・というやつなのかもしれない。

第二話　トラウマと傷痕（後書き）

今回の話も暗い・・・・でも次話は楽しくいければいいと思う。

第三話　デバイス製作の為に

軽くジョギングして、体術の動きを確認し、木刀を振る。
このミッドチルダにも一応の剣道場はあるらしいが、魔法技術の発達により廃れ、その実態はほとんどスポーツチャンバラと同じようだ。クロノに剣術を学べるところがないかと聞いたとき、「澪はスポーツが好きなのか？」と返事が返ってきた。
なので、剣術の練習は自己で行うしかない。
ただし、メルクリウスに見せてもらった騎士団の映像で剣の振り方などは覚えているので、あとはそれを踏襲するだけだ。
ただ、決まった型はない。相手を倒せればそれでいい。戦いの中で剣の軌道は臨機応変に。その域に達するまでどれだけかかるのだろうか。
あえて言うなら騎士団流？

軽く汗を流した僕は管理局本局の地図を見ながら歩いている。クロノ、リーゼアリアさん、リーゼロッテさんは訓練があるし、リンディさんは提督なので書類に追われている。
僕は一人、リンディさんに貰った紹介状を持って「無限書庫」というところを目指している。
デバイス製作の為に情報を集めるためだ。
僕は機械に疎いが、それは後でデバイスに「解析」をかけさせてもらえばいいはず。まず、自分一人で出来ることはミッドチルダの魔法がどういう理論で成り立っているかを知ることだ。それをエイヴィヒカイトの動きで再現する。

一際大きな扉を開けて入室する。
そこは「無限書庫」の名のとおり、本に満ちた空間だった。入り口から半円状に広く切り取られた空間の壁には隙間なく本が詰まっており、目の前に続く通路の両側もやはり本ばかり。複雑な構造で全容は分からないが、かなり広い空間を占めていることが分かる。
天井はどのくらい高いのだろうか。目視できない。

幸い受付は入り口のほぼ隣にあった。
「すみません。リンディ提督の紹介できたんですけど」
受付にいる女性は僕の声に気づかず、一心不乱にモニターに向かって指を動かしている。
「あの、すみま「あー！！！！終わんないよーーー！！！！」」
女性はキーボードから手を離し、眼鏡を放り投げ、仰け反って咆哮した。
「ていうか！！管理局の連中は馬鹿ばっかりかーーー！！もっと人まわせ！情報が増えてくだけじゃない！！」

――――ズガン！

と女性はデスクの上の書類の山に拳をお見舞いする。無論、書類はバラバラと散らばっていく。
「・・・・あの、すみません」
女性はビクッと方を振るわせた。そして拳を突き出した状態のまま、首が油を差してない機械のようにぎこちなく旋回し、ようやく僕に気づく。
「・・・・・・・見た？」
「・・・・・はい」
「あ・・あはは・・・・忘れてくれると、うれしい、かな・・」

「・・・・・・・」

とりあえず、お互い自己紹介を済ませた。深緑の髪を結って上げている、眼鏡をかけた知的な（あくまで外観）女性はルネ＝ニクロムというらしい。「ルネさんって呼んでね」と言われた。

どうも彼女はここの司書長らしい。

僕はルネさんにリンディさんからの紹介状を渡す。

「えーと、「無限書庫」の閲覧申請書・・か。閲覧レベルは・・2。うん。了解」

女性は目線を紹介状改め閲覧申請書から僕に移す。

「ここから5ブロックより先に行かなければいいから。好きに見てって頂戴。ひょっとしたら危険な本とかあるかもしれないけど、そうしたら教えてね。いやー、本がやたら多くて整理が進まなくてね」

ルネさんはそう言ってカラカラと笑う。

「司書ちょー」

背後からルネさんを呼ぶ女性の声が聞こえた。

振り返って見えたのは紙束。足が付いているので人がじかに持っているのだろう。その高さは完全に頭のあるだろう高さを超えている。

「何？また来たの！？」

「はいー」

「今日でもう三回目よ！？いったい私たちにどれだけ仕事を回せば気が済むのよ！」

「そんなことわたしに言われてもー」

紙束をもった女性はふらふらした足取りで近寄ってくる。
そして地面に散乱している紙を踏みつけた。
「あ・・・・」
「わきゃあ！！」
女性は甲高い声をあげて、両手を前に突き出しながら倒れた。
持っていた紙束は、あるものは雪崩を起こしたように流れていき、またあるものは四散していく。
もとから結構悲惨な書類の飛び散りようだったのだが、今は筆舌に尽くしがたい散乱度？だ。
「・・・・・・ねぇ、澪君」
「何ですか？」
「片づけ、手伝ってくれない？」
「いいですよ」
僕らその場に居合わせた三人は、ため息をついて書類を集め始めた。

＊＊＊＊＊＊

エイヴィヒカイトによる「解析」。それは何も魔導の要素に限ったものではない。
魔力をもたない物体の情報も得ることができる。もっとも、それ相応の知識がなければ得た情報も理解できないのだが。

もちろん本にも使うことができる。「解析」を使い、脳が直接本の内容を得る。感覚的には速読だが、目で追うのが馬鹿らしくなるくらいその速さは段違いだ。

僕の周りには多数の本が規則正しく並んでいる。表紙をめくられた本のページが次々と流れていく。最後までめくられると閉じられ、本棚に帰っていく。その繰り返し。それがもう二時間続いている。

ミッドチルダという世界の言語、ミッド式魔法の基本構造、魔法の種類、構築の方法。

本当にいろんなジャンルの本が所かまわず置かれているので、正直いらない本も多数ある。それでも一応のほしかった情報を探すことはできたが。

読んだ本の中に数度「ベルカ式」もしくは「近代ベルカ式」という単語が出てきた。

こちらが近接戦闘用の魔法らしい。是非とも情報がほしい。

「澪く～ん！」

そろそろ昼ごろといったところだろうか。ルネさんが僕を呼ぶ声が近づいてくる。

「一緒にお昼ご飯食べに行かな・・・・い？」

振り返ると通路から顔を覗かせたルネさんがいた。何故か固まっているが。あぁ。エイヴィヒカイトがまずかったのかな？

「ちょ！ちょっと一緒に来て！」

ルネさんはそう言うと僕を抱えて走り出した。

＊＊＊＊＊＊

僕が連れてこられたのは管理局の一般人立ち入り禁止区域の・・・・・リンディ・ハラオウン提督の作業室だった。
今僕がどういう状況なのかというと・・・・
「リンディ！この子頂戴！！」
ルネさんに両脇を抱えて持ち上げられ、リンディさんにつき出されているところだ。
「・・・・ルネ、貴女・・ショタ、治ってなかったの？確かに澪君は可愛いと思うけど」
リンディさんが呆れた様子で言う。
ショタ、小さな男の子に異常な（性的）興奮を覚える人（主に女性）のこと。
・・・・まずくないか？僕。
「ちっ！違うわよ！確かに私はショタだけど！今回はちゃんとした仕事の話なんだから！」
「「・・・・・・・・」」
ボロボロと隠された・・というより隠さなければならない内情を吐露するルネさんに、僕とリンディさんは押し黙るしかなかった。

ルネさんは、僕のあの「解析」を見て、ぜひ「無限書庫」の司書に欲しくなったらしい。
人手不足とか言っていたからな。
「ルネ、貴女こんな小さい子をあの万年人手不足で、過労死が出そうな無限書庫で働かせる気？」

「そんな事言われても・・・・本当に猫の手も借りたいんだもん」
なんかルネさんの口調が変わっている。
僕は両脇を抱えられている状態なので分からないが、しょげているのだろう。
「分かったわよ・・。でも、無限書庫で働くかどうかは澪君に聞きなさい」
ルネさんの様子を見かねたのかリンディさんが言う。
ルネさんは僕を下ろして、僕の正面に回った。
「澪くん。無限書庫で働いてみない？何か強引で悪いとは思うし、仕事も大変だけど・・・」
ルネさんはもうしわけなさそうに言った。

「無限書庫」で働く・・か。いいかもしれない。それなら僕のやる気が足りない日でも本に接することになるし、奥の方の、閲覧レベルの高い本にも公的に触れられる。
「分かりました。その話、お請けします」

僕はこうして「無限書庫」で働くことになった。

第三話　デバイス製作の為に（後書き）

まだ、原作に入れていない。次でデバイスが完成し、その次からは原作時期に入る予定です。

第四話　デバイス完成と模擬戦（前書き）

なかなか単語が出てこないこともある。でも何とか完成。

第四話　デバイス完成と模擬戦

「無限書庫」で働き始めて半年。実に長かったが、ついにデバイスが一応の完成をみた。

リンディさんやクロノが管理局でかなりの地位を持っている都合で、高性能のデバイスを解析する機会に恵まれたことと、「無限書庫」の高閲覧レベル下での情報収集が手伝い、かなり高性能のデバイスを仕上げることができた。

インテリジェントデバイス：≪アイリス≫。待機型は曲線をあしらったシルバーアクセサリー。起動すると「破滅の聖剣」と同じサイズの剣になる。

ミッド式の魔法に加え、近接戦闘主体の古代ベルカ式の魔法のノウハウも組み込み、オールラウンドな戦闘が可能。

もっともデバイス本体が完成しただけで、まだ企画段階の魔法もある。

半年間、エイヴィヒカイトをフル稼働した甲斐があって無限書庫の蔵書はかなり整理が進み、管理局上層部から図書館として機能するようにお達しが来た。ルネさんは「これ以上仕事を増やす気かー！！何考えてんだあのブタどもーー！！！」と憤っていたが。

実際、大方の整理が終わった今でも過労死が出そうな忙しさだ。僕もエイヴィヒカイト「魔人錬成」によって得た人外の体力が無ければ、すでに何回過労死していただろうか。

あと、無限書庫はデートスポットとしても人気があるらしい。実際、閲覧用の机でイチャイチャしているカップルもよく見かける。

もっとも彼らの目的は本ではない。

僕の「解析」中に出る魔力が星の様に散らばって、幻想的な光景になっているらしい。近くで見ている僕自身はよく分からないのだが。ついでにルネさんに見つかると追い出される。

有能な人材を遊ばせておく余裕はないらしく、すぐに副司書長に就任した。どうも僕は、管理局では検索魔法のスペシャリストと思われているようだ。
というか、この世界に労働法はないのだろうか。クロノもまだ教導中とはいえ管理局の戦力として働いているというし。

ともあれ、今日は四か月ぶりの休暇にしてデバイスの起動実験の日だ。この日に合わせて訓練室は予約してある。
クロノに相手を探していると言ったら、ガイスさんという教導隊の二等空尉を紹介してくれた。非常に豪快なおっさんである。
自動ドアのが開き、訓練室に入室する。

「ガハハ、来たなボウズ」
筋肉隆々のおっさんが訓練室の中央で手を組んでいる。
「今日はよろしくお願いします」
とりあえず敬語で挨拶。基本だな。
「ん？妙に行儀のいいコゾウだな。もっとフランクでいいぞ」
「あぁ。じゃあそうする」
「それでいい。今日は起動実験とはいえ、模擬戦はするんだろう？遠慮はいらんからな。じゃあ起動してみろ」
「分かった。いくよ、アイリス」
≪了解だ。マスター≫
胸元のシルバーアクセサリーから、凛とした女性の声が響く。
「起動」
≪ｓｅｔ　ｕｐ≫
シルバーアクセサリー・・アイリスは光を放ち始め、僕自身も光に包まれる。
一瞬にして今まで着ていたカッターシャツは肩を覆い隠す程度のボディスーツに、スラックスも丈夫そうな印象の生地の、細身のズボンに変わる。色的にはボディスーツもズボンも黒だ。

濃紺の外套が腰の位置に固定され、同じく濃紺の短い半袖のジャケットが現れる。
これが僕のバリアジャケット。僕はどちらかというと近接戦闘主体のため、ロングコート型が主流の管理局の中では珍しく、動きやすいようにショート丈のジャケットだ。外套は防御力不足を補うために付けた。そのため騎士のような印象となってなんだか恥ずかしい。
僕の手には既に両刃の剣が握られている。サイズも重さも、先端に行くに従ってわずかづつ細くなっていく刀身も、「破滅の聖剣」を完ぺきに再現した。装飾や色は異なっているけど。
「お、なかなかカッコいいじゃねえか」
まぁ、だから恥ずかしくもあるのだけど。
≪そうだ。似合っているぞマスター≫
アイリスは僕の表情を読んだのかそんなことを言う。
「じゃあ模擬戦はじめようぜ！」
「いきなりですか？」
「いいじゃねぇか。俺も楽しみたいんだ。手加減してやるし、どうせ非殺傷だ。動作の確認は模擬戦でもできるだろ？張り切っていこうぜ！」
そう言ってガストさんもデバイスを起動する。ガストさんのデバイスは管理局では一般的な杖型だった。だが、先端に魔力の噴出口が付いている。たぶん、槍としても使うのだろう。
「行くぜ！スティンガー・スナイプ！」
ガストさんはクロノと同じ魔法、スティンガー・スナイプで牽制をしてくる。弾数は三発。クロノのよりは少ないが、込められた魔力から突破力は段違いだということだ分かる。
「ディバイン・ブレード」
≪Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｌａｄｅ≫
アイリスの白銀の刀身が僕のアイスブルーの魔力に包まれる。た

だの剣を強化する魔法だ。僕の戦い方からすると基本だろう。
僕は強化された剣でガイスさんの魔弾を消し飛ばす。
ガイスさんはその間に僕との距離を詰めていた。デバイスの魔力の噴出口からはオレンジ色の魔力刃が煌めいている。
ガイスさんは僕の脇腹めがけてデバイスを逆胴に振り抜いた。
このまま剣で応戦してもいいけど、これはあくまで起動実験だ。ディバイン・ブレードのもうひとつの使い方を試してみよう。
「アイリス！ディバイン・ブレードβ！」
≪Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｌａｄｅ　ｖｅｒ．β≫
剣から離した左手に魔力でできた剣が出現する。それでガイスさんの逆胴を受けた。
もっとも、この剣は魔力刃。デバイスから高純度の魔力が供給されているわけでもなし、高い魔力の前には数合しか耐えられないだろう。単に、手数を増やすための魔法だ。過信は禁物。
「うお！？」
ガイスさんはそう受けに来るとは予想外だったのか、戸惑いの表情を浮かべる。
僕は右手のアイリスを振るうが、予期していたのだろうガストさんに避けられた。
僕は交代するガストさんに左手の魔力刃を投擲する。当たるかと思った瞬間、ガストさんは右方向に加速し、かわした。移動系魔法か。
僕の魔力制限状態の移動速度は「Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ」などの速度増強用の魔法には及ばない。しかし、身体中に刻まれたエイヴィヒカイトによって底上げされた五感が相手を捉える。
背後から迫る風斬音。僕はその場で振り返り、その遠心力を持ってデバイスをガイスさんの魔力刃に叩きつける。
そしてしばしの鍔迫り合いののち、お互いに距離をとった。
「すげえな、ボウズ。ウチの隊に欲しいくらいだぜ。正直ここま

でだとは思ってなかった。クロノの小僧が遠慮するなっていってた意味が分かるぜ」
「まぁ、半年前に戦ったときには勝ってるからね」
「ガハハ、そうか。あいつ負けてたのか。そうだろうな。正直訓練場なんて狭いところでお前さんの剣から逃れるす術はクロノにゃないな」
「今度はこちらから行く・・」
「あぁ、ドンと来いよ」
「アイリス、スプレンダー・バレット」
≪Ｓｐｒｅａｎｄｅｒ　ｂｕｌｌｅｔ≫

――――ダダダダダ！

と、まさに弾幕といっていいほどの魔力弾が放たれる。一発一発の大きさは拳銃の弾程度の大きさだで、命中しても一発で相手を墜とす威力はないが、結界破壊能力を付加し、なおかつ何千発も一気に撃つという理不尽魔法だな。いつか、誘導性能もつけようと思っている。
「ちょっ！おま！これは！！」
ガストさんも焦っている。
それでもガストさんは長年管理局で戦ってきた経験からか、反射的にプロテクションを展開する。
魔力弾がプロテクションにぶつかり、プロテクションは軋む・・が、一発一発の威力の低いスプレンダー・バレットでは魔力をプロテクションに注ぐ速度を上回れないようだ。それでも相手の疲労を誘う効果はあるようだが。
僕はスプレンダー・バレットの数を維持しつつ、動けないガストさんに接近する。
≪Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｌａｄｅ≫
そしてアイリスに魔力を注ぎ、ガストさんのプロテクションに振

り下ろす。
アイリスの刃とプロテクションが拮抗し、火花が散る。プロテクションの軋みはさらに大きくなるが、未だ破れる気配はない。
「アイリス！カートリッジロード！」
≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ≫
剣の刀身の付け根の飾りが先の方に向かって動き、機械的な内部構造が顕わになる。そして、動いた飾りは再び付け根に向かって落とされる。

――――バシュッ！！

という音とともに、アイリスの内部の魔力が増強される。
アイリスの全カートリッジ数は八。しかし、アイリスの第一形態、スラッシュモードは、僕の聖遺物と同じ剣、または槍の形なのだが、その役割としては一撃の破壊力を求めたため、一回のカートリッジロードで二発のカートリッジを消費する。

ガストさんのプロテクションにヒビが入る。
ガストさんはプロテクションの維持のために魔力を込めるが、ヒビはさらに広がっていく。
僕のアイスブルーの魔力光がオレンジの盾を食いつくし、ガストさんは無防備となる。
僕はそのまま、ガストさんにアイリスを突き付けた。

「僕の勝ち・・だね」
アイリスから左右に一つずつ、魔力が空になった薬莢が排出される。
「あぁ。俺の負けだ。まったく、こんなコゾウに負けちまうなんてな。もう一回鍛えなおすか」
「それにしても・・・・どうもこの砕けた喋り方はなれません。

僕とガストさんは年が大きく離れてますし・・」
「フ・・フハハハハハ！まったく、おもしれぇコゾウだ！ま、何かあったら呼べよ。気に入ったからなんかあったら力になるぜ！」

そのあと、僕はアイリスに入力した、ミッドチルダの基本的な魔法を確認し、ガストさんと別れた。

まだ完成していない魔法もあるし、第二形態も考えてはいるが完成はまだだ。早く完全に仕上げないとなぁ。

第四話　デバイス完成と模擬戦（後書き）

次回は原作主役級キャラがやっと出ます。

第五話　フェイトと小説

ここ、管理局本局で過ごし始めて既に一年半が経とうとしている。
僕はここ一年でさらに昇進し、「無限書庫管理責任者」として働いている。まぁ、仕事に違いはないのだが。
最近ルネさんのショタのタガが外れたのか、僕を膝の上に乗せたまま昼食をとるのが日課となっているが、些細な問題と割り切ろう。
そのルネさんは無限書庫の人員不足をどうにかしようと管理局の上層部に日々かけ合っている。しかし生憎と通ったためしはない。
一応、僕が働き始めてから「女性の働きたい職場」というランキングでトップを取り続けているのだが、新年度の採用人数は上から厳重に指示されている。なんて鬼畜なんだ。

偉くなるということはもちろんそれだけ責任が付きまとうということで、「無限書庫副管理人」に昇進したルネさんと定期的に本局の会合に出ているのだが、権力者の会議というのは本当に意味がなく、進みも遅いので辟易する。
なので僕は会議になると、僕が必要な時以外はアイリスをいじっている。

そういえば、アイリスの第二形態も完成した。両籠手型のディフェンスモードだ。聖遺物と組み合わせて使うべく設計した。
この形態の特徴は、防御魔法と結界魔法を高速化する機構を組んだことだ。もちろん、魔法の構築速度だけでなく、防御魔法については強度も上昇する。
それに加え、一年前の模擬戦の段階では調整中だった魔法も一通りの完成をみた。もっとも、スプレンダー・バレットに誘導性能を付け加えるのにはもう少し時間がかかりそうだが。

今日も今日で膨大に回ってくる本や管理局の活動記録を捌き、利用者の要望を聞いている。

――――ｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉ

ふいに携帯端末が鳴った。ディスプレイにはクロノの文字。なんか久しぶりだな。ここ一カ月くらい長期任務に就いていたらしいから。

「はい。何かなクロノ」

僕は「解析」で利用者の希望書籍を探しながら電話に出た。

「最近連絡できなくて悪かったな。管理外世界で大きな事件が起こって、それ以外のことがさっぱり頭から抜けてたんだ」

「それで？僕は今仕事中何だけど？この時間に電話したってことは何かあるんだろう？」

「あぁ。実はその事件で知り合った子を保護していて、将来一緒に暮らすことになりそうだから顔合わせしておこうと思ったんだ。澪の仕事が終わってからだが、そういうことがあると心に留めておいてくれ」

「分かった。じゃあまた今夜な」

僕はそう言って電話を切った。

＊＊＊＊＊＊

そして、仕事を終え、帰宅。もっとも、他の司書たちは基本残業がある。僕はエイヴィヒカイトの「解析」があるし、まだ子供ということで五時の帰宅が義務付けられている。ルネさんが上層部と交渉したらしいが・・・・。

「ただいま」

そう言って靴を脱ぎ、リビングへ。

そこにはリンディさんとクロノ以外に一人、金髪の少女が座っていた。

「お帰り澪。今日もお疲れ様」

クロノがソファに座ったまま振り返って言う。

「あぁ、正直勘弁してほしい仕事量だね。僕は残業免除だからいいけど、ルネさんたちは冗談じゃなさそうだったな」

「あぁ。あそこはそうだろうな。

っと、この話はここまでいいだろう。それよりフェイトの紹介をしなければ」

そう言ってクロノは金髪の少女、フェイトの方を向く。

僕も自然と視線がそっちを向き、少女と目が合う。少女は恥ずかしいのか、いきなり挙動不審になり横を向いたまま「フェ・・フェイト・テスタロッサ、です」とだけ言った。

「僕は茜火澪。よろしく」

「は・・はい。よろしく、お願いします」

「さて、自己紹介も済んだことだし、ちょっといいか？」

クロノが僕をリビングから連れ出す。自己紹介といっても名前しか言ってないのだが、いいのだろうか。

連れてこられたのはクロノの部屋。何度入っても簡素な部屋だと思う。

「実はな・・・・・」

クロノからフェイトという少女について、説明を受けた。
どうも彼女は母親に命令され、ロストロギアを集めていたらしい。それでクロノたち管理局とぶつかることになったのだが、そこでいろいろな事実が発覚する。
フェイトがプロジェクトFによって創られたクローンであるということ。フェイトの母、プレシア・テスタロッサの過去。事件の発端など、内情が明るみになっていくにつれ、彼女は傷ついていった。
そして最後は実の母親の死。それが心に何の傷をもたらすのか、僕には分からないが世間一般では悲劇とされていることだよな。
その上、自分の意志ではないとはいえロストロギアを集めていた彼女は今、事件の重要参考人兼犯人候補として事実上はハラオウン家に拘束されている状況らしい。
ロストロギアを集めるイコール何で罪になるのかははっきり言って理解できず、結局「あぁ、またあの馬鹿たちの独りよがりか」と結論ずけた。

「そこで澪にはフェイトの弁護人になってほしい」
クロノはそう締めくくった。
「・・・・何で？」
そう。僕は別に弁護士でもないし、そういう経験があるわけでもない。
「本当は僕や母さんができればいいんだが、僕と母さんは管理局の武装局員だから、その権限がないんだ。もちろん。証拠の整理や陳述文の作成は手伝うが・・・・」
「・・・・はぁ・・。まぁ、いいよ。僕も一応管理局ではそれな

りの地位にいるわけだし適任かもね」
「ありがとう。感謝する」
そしてこの後、ＰＴ事件の詳細資料を読み、この日は寝た。

＊＊＊＊＊＊

そして次の日、クロノとリンディさんは管理局へ事件の報告に出向。僕は昨日に引き続き無限書庫で仕事。
フェイトは管理局の監察下なので、何者かの監視がつかなければいけない。第三者に頼むならある程度自由に行動できるが、僕が監視をするなら無限書庫に連れて行くことになるし。まぁ、どちらの場合だったとしても暴れないように魔力封印の錠はつけなければならないが。

クロノとリンディさんは朝早くから上に報告を上げに本局の中枢に行ってしまった。今、僕とフェイトは二人で食事を取っているわけだが・・・・。
「「・・・・・・・・」」
生憎と会話はない。お互い名前しか知らない間柄だし、積極的に喋るような性格もしていない。まぁ、聞くべき事だけ聞いておくか。
「フェイト」
「ふぇっ！な・・なにかな？」
フェイトはビクッと肩を揺らしてオドオドし始めた。まぁ、母親

が死んだ直後という状況だししょうがないのかもしれない。
「今日はクロノもリンディさんも本局に出向しているし、僕もこの後仕事だ。フェイトには監視がつかなければならないわけだけど、僕がその役を引き受けるか、それとも第三者に頼むか・・どちらがいい？」
どっちもお断りしたい状況だろうけどね。
「え・・と、じゃあ、お願いしていいかな」
「僕が監視する場合、無限書庫に来てもらうけど・・いいの？」
「う・・うん。いいよ」
僕とフェイトはお互い無言で朝食をとる。最後まで会話は無かった。

「うわ～・・・・」
フェイトは無限書庫に入った瞬間、上を向いて放心した。まぁ、この蔵書の数は普通じゃあり得ないだろう。
「すごいね澪君」
フェイトは口をポカンと開けたままこちらを振り向いて言った。
「あぁ。この数の書籍を管理するのは大変だよ。あ、今日は一日ここに居ないといけないわけだけど、何か読みたい本があったら言ってよ」
「え・・でも仕事の邪魔じゃ・・」
「かんちょー」
フェイトの声を遮る間延びした声。無限書庫に始めてきたとき、盛大に書類をばら撒いてしまった女性だ。名前はジェリー・マーキソン。

余談だが、僕は基本「館長」と呼ばれている。
「あ、ジェリーさんおはようございます」
「この書類ですけど、サインをお願いできますか？」
「分かりました。これは・・あぁ、いつもの蔵書の管理手続きね」
僕は胸ポケットに刺していたボールペンでサインの欄に自分の名前を書いた。
「ありがとうございました。今日もがんばりましょうね。かんちょー」
そう言ってジェリーさんは去っていく。僕はフェイトに振り返って・・・・
「って、どうしたの？フェイト」
フェイトは僕の方を向いて固まっていた。
「え？いや・・すごいなって思って」
「何が？」
「あ・・その、私と同じくらいの年なのにしっかりしてて、それにさっき館長って・・・」
「あぁ、それは・・僕は特殊な魔法を持っていてね。それが本の管理に都合がいいからこの地位にいるだけさ。実質無限書庫の管理は副管理責任者のルネさんっていう人がしきってるよ」
居場所がないようにオドオドし続けるフェイトを引っ張って、僕は仕事場に向かうことにする。

初めて僕が無限書庫に入った時、ここは図書館として動いていなかった。ただ、書物や書類を置いておくだけの空間。それがここだったわけだ。
だが今は蔵書の整理が進み、人が本を閲覧、または借りに来る図書館としての仕事も追加された。なので、仕事を分化し、結果とし

てデスクワークをする部屋が作られた。
僕の仕事はもっぱら今だ整理の進んでいない閲覧レベル５のロストロギア関係の専門書とそれにまつわる調査資料の整理、そして閲覧、貸出の希望があった書物の取り出しである。
でも、日課としてルネさん率いる無限書庫の管理組に毎朝挨拶しているのだ。
今の管理組の仕事は端末に本の情報を打ち込むことだ。これがまだ完ぺきではないので僕の検索魔法で探さなければならない読書が多いということだが。
上層部から本の簡単な紹介まで書けと命令されているので作業がさらに大変になっている。

「おはようございます。ルネさん」
ルネさんはコーヒーを飲みながら「う～」と頭を抱えている。それ以外の人たちはデスクに頭を沈めてダウン。きっと昨日も残業が終わらなかったのだろう。
「う～。おはよう・・澪君。今みんな起こすからちょっと待って・・・・」
ルネさんはコーヒーを机に置き、僕に抱きつきながら端末にある唯一オレンジという不可解な色のボタンを押す。フェイトは何だか「ひゃわっ！！」と顔を赤くしているが・・・・毎日こんな感じだよ？
すると部屋中に「Ｂｌｉｅｖｅ　Ｙｏｕ」という、ここの人たちにアンケートを取って決まった音楽が流れ、職員たちが無言でムクリと起き上がる。毎日見ているが、未だに慣れない。ゾンビみたいだし・・・・。フェイトもなんだか顔色が悪い。
起き上った職員たち（全員女性。無限書庫は武装局員重視の男性に不人気）が僕に殺到する。
ルネさんは僕を離し、他の職員が僕に抱きつく。ここに来るまでこういうことはされたことがなかったのだが、非常に落ち着く。

それに、僕から何のエネルギーが出ているのか知らないが、みるみるうちに職員たちの顔色が良くなっていくので、動きにくいということは黙っていよう。そういえば、無限書庫に入った女性はショタに目醒めるという噂があった。あれは意外に嘘でもないらしい。

職員の皆は「澪君またね～」といって仕事に戻っていった。いつもなら僕もここで閲覧レベル5の区域に行くのだが、今日はフェイトがいる。

「で、澪君。この子は誰？澪君の彼女かな？」

そのことはルネさんも気になっていたようで、僕に尋ねる。フェイトは「えぇ！！？」と驚愕しているが、まぁ、ここは放っておこう。

「違いますよ。この子は少し前クロノとリンディさんが関わった事件が発端で連れてきた子で、フェイトといいます。今は管理局の監察下なので、僕に監視という名目で付いてきてもらったんです。今日は一日ここにいることになります」

僕のその言葉にフェイトは少し落ちこみ、ルネさんはそれを見て「あらあら」と言っているが、事実を言っただけだよ？

「まぁ、話は分かったわ。でも、彼女に閲覧レベル2以上の蔵書は見せちゃだめよ」

「それは分かってます。特にレベル3のあたりに多い管理局の活動報告書は見せられませんね」

「そうね。あれは・・・・ね」

僕はフェイトの手を引いて無限書庫の仕事部屋を出た。

僕はフェイトの手を引いて本棚でできた道を進んでいる。フェイ

トは基本無言だ。足元を見ながらただついてくる。
「そういえばフェイトは何か読みたい本とかある？」
フェイトは昨日からどうも手持無沙汰といった感じだ。デバイスは取り上げられているし、一人、アルフという使い魔がいるらしいが、狼をもとに創られた彼女は肉体の基礎能力が人間とは比べ物にならず、危険ということで拘束されているらしい。
「え・・・・？」
「僕は仕事があるけど、フェイトは正直暇だよ？レベル５の本はフェイトは見ちゃだめだし、この辺で何か本を選んで持っていった方がいいんじゃないかな」
「え・・と、私は別に・・・・」
「う～ん。じゃあ僕が女性に人気の小説を見つくろっておくから、暇だったら読みなよ」
僕は「解析」でレベル１にある本を探し、浮遊させて持ってくる。
そして今度こそレベル５の区域に向かった。

＊＊＊＊＊

レベル５の区域は、まだ整理が終わっていない。一応、見える範囲の本棚には本がおさまっているが、上の方はスカスカで、床にも本が高く積み上げられている状態だ。少し前は足の踏み場がないというか、動きようがない状況だったのでこれでも片付いた方だが。
僕は持ち込んだ机と椅子にフェイトを案内し、座らせ、手荷物と持ってきた本を置く。

「今日もよろしくね、アイリス」
そう言うと首に掛けられたシルバーアクセサリーが光り、美麗な女性の声が響く。
≪あぁ。しかしマスターももの好きだな。こんな仕事、他に任せておけばいいだろうに≫
「あ・・それ」
フェイトが初めて明確に興味を示す。彼女も魔導士だからな。
「あぁ。僕のデバイス。名前は≪アイリス≫。そういえばフェイトも魔導士何だよね」
「うん」
「アイリスは基本戦闘用に作ったんだけど・・今はもっぱら読書管理に使ってばっかりで・・本当は十全に機能を使ってやりたいところなんだけどね」
≪あぁ。本当にそうだぞ？マスター。フェイト。私は我がマスター茜火澪の剣にして魔導の器、アイリス。よろしくたのむぞ≫
何故かは知らないが、フェイトの眼が爛々と？いやギラギラと輝き始めた。
「澪。模擬戦しよう？」
・・・・この子はバトルマニアなのだろうか。

しばらく僕の仕事を見ていたフェイトだが、つまらなくなったのか僕の持ってきた本を熱心に読んでいる。時折くねくね身をよじっているたり、ニヤニヤしてこちらを覗っているいるところがなんとも不安だが、まぁ、いいだろう。とりあえず、今月のランキングで女性に人気の高かった本なのだが、どんな内容なのだろうか。小説はジャンルが既に分かれてたから「解析」はかけていない。題名には特に変わったところはないんだけどな。

僕は「解析」によって内容を直接頭に叩き込んでいき、ジャンルを分化。題名としまった棚を≪アイリス≫に記録する。別にリアルタイムで情報を送ることもないし、後でルネさんの端末に送っておけばいいだろう。

そして今日の仕事ももうすぐ終わりだ。最近は一日中「解析」を続けても頭が痛くならないな。もう少し速度をあげてもいいかもしれない。

筆箱と書類を一枚、カバンから引っ張り出し、今日の活動報告をつける。これはルネさんから義務付けられていることであり、何処にこの書類が行くのかは分からないが、「意味があるのか」と聞いてみたところ、「意味はないけど止めないで！」と言われた。これも非常に不安だ。書類が絵日記形式なところも。

「フェイト。今日はもうこれで終わり。帰るよ」

「ひゃわっ！！」

と顔を真っ赤にして食い入るように本を凝視していたフェイトはビクッと肩を震わせ、すごい勢いでこちらを向いた。

「今日の勤務時間はもう終わったから、帰ろうと思うんだけど」

「う・・うん」

「じゃあとりあえずその本を返してだね・・・・」

そう言うとフェイトは若干涙目になって上目遣いにこちらを見上げた。あの本、そんなに良かったのだろうか。

「その本そんなに良かった？借りてく？」

そう言うとフェイトはブンブンと顔を縦に振る。

「じゃあ手続きするから入り口付近まで戻らないとね」

でもその前に絵日記風の活動報告をデスクワーク用の部屋にいるルネさんに渡す。
僕が浮かせて持っていくといったのに、断固として抱え込んだ本を放さないフェイトにルネさんは何かを耳打ちしていた。その瞬間、フェイトはみるみるうちに赤くなっ身を小さくしていったのだが・・・・一体なんなんだ？

その後、入り口の貸し出し口で名義をフェイト、監察中なので保証人を僕という形で五冊、本を借りた。
保証人。うん。嫌な言葉だ。

本を両手で抱え続けるフェイトにカバンを買い、その中に本を入れて持つように言ったのだが、今度は本の入ったカバンを抱えだした。一体彼女は何をしたいんだろうな。

第五話　フェイトと小説（後書き）

いきなり無印は終わっています。あくまで主人公は司書なので。

第六話　新種ストーカー　（感想にあったのでフェイトの心情を軽く追加）（前

長らく期間が空いてしまい、申し訳ありません。

第六話　新種ストーカー　（感想にあったのでフェイトの心情を軽く追加）

半年が過ぎ、フェイトの裁判の日が迫ってきた。
あれからフェイトは毎日僕の後をついて無限書庫に顔を出している。クロノやリンディさんが休みの日でさえそうであり、毎日僕と一緒にいると言うことは周りから見られる機会も多くなるということで、浮いた噂が立ち続けているのだが、フェイトはそれでいいのだろうか。

フェイトにはメールでやり取りをしている友人がいるらしく、その友人のいる世界が第９３管理外世界「地球」ということを聞き、大いに驚いたが、冷静に考えると地球にそこまで関心はなかった。
その友人に送るビデオレターには僕も参加している。それで高町なのは、月村すずか、アリサ・バニングスの三人とは、友人と言うには距離があるが見知った人と言う感じにはなったのではなかろうか。

ところでそのフェイトなのだが、最近気がつくと僕の背後にいる。実際今もお茶を飲むために冷蔵庫を開けているのだが、フェイトは僕の買ってあげたワンショルダーのバッグを抱えて満面のＥ☆ＭＩ・・・・となんか変な電波受信した。
それにしても何だ？背後依存症か？人の背後をとるのが快感でたまらないとか。
やけに楽しそうなので振り払うのも抵抗があるし、どうしたらいいんだ。

まぁ、何にしても今日は久々の休暇である。フェイトのお付きは同じく休暇のクロノにでも任せて今日は買い物にでも行こうかな。何か気晴らしにでもなる物、見つけれたらいいな。

僕は出かける前に、とりあえずトイレに向かう。
すると、フェイトも当然といった感じについてくる。このままだとトイレの中にまで入ってきそうだ。
「フェイト。僕、今からトイレ」
用件を簡潔に伝えると、僕と同じくトイレに入りそうになっているフェイトは自分が何をしようとしていたか理解し、真っ赤になる。
「っ～～～～！！」
フェイトはリボンでくくった髪を振り乱して去っていく。まぁ、階段の影から監視し続けているが・・・・。

僕はとりあえずトイレに入る。そして溜め息をついた。
「はぁ～。不味い傾向だよな・・・・どう見たって僕に依存しすぎ。何でなんだろ？特に何かしたというわけでもないし、優しくした覚えもない」
正直疲れる。四六時中背後に付かれるというのは精神的にきつい。何とかならないかなぁ、ならないんだろうなぁ。
彼女は親を失って、傷心中だ。そんな中、依存している僕から突き放されたら・・・・・・何か刺される情景しか思い浮かばないぞ？

僕は手を洗ってトイレから出る。するとやはり階段の陰からフェイトは走って寄ってくる。
何を言うわけにもいかず、僕はリビングに戻る。もちろんフェイトもついてくる。あー、僕ってこんなにお人よしだったっけ？

リビングにはお茶に砂糖を大量投入するリンディさんと、新聞を読んでいるクロノがいた。僕はクロノに近づいて話しかける。

「クロノ。僕は今日久しぶりの休暇だから買い物にでも行こうと思ってるんだけど、フェイトのことお願いしていい？」
ーーーードサ・・
と何かが落ちる音がした。
後ろからしたので振り返ってみると、フェイトがこの世の終わりみたいな顔で放心し、床の上に落ちたワンショルダーからは本が散乱している。
「え・・あ、と思ったけど、良かったらフェイトも一緒にどう？」
そう言うとフェイトは再び満面の笑みに戻る。
「大変だな、澪」
クロノがコーヒーを飲みながら言う。
「じゃあクロノも一緒に行く？」
「い！？いいいいや、遠慮しておこう！そう！今日は一日中ここでのんびりするつもりだ！買いたいものもないしな！そう！ないんだ！」
いや、あるだろうクロノ。今日はクロノが毎月楽しみにしてる雑誌、月間ステップの発売日だぞ？
最近、クロノとリンディさんはフェイトを恐れている。まぁ、日ごろから満面の笑みでいる人間は不気味だけどさ。
「そうか？残念だな。じゃあ行ってくる」
「あ、あぁ！楽しんでこい」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝

フェイトは澪の後ろについて歩いていた。目の前で彼の長い紺の髪がゆらゆら揺れる。
まず、地球に行ってジュエルシードを回収していたことだ。次になのはと出会って、母さんが・・死んで、それで管理局に来た。今

のフェイトは拘束されている・・・という立場である。立場、というのは、フェイト自身に何も不自由がないからだ。フェイトは拘束という名目でハラオウン一家、そして澪の庇護の元、その安全を確保されている。

　この家の人はみんな優しい、とフェイトは思う。リンディさんは言葉そのまま優しいし、クロノは不器用だけど気遣いがうまい。澪は特に積極的にかかわってくるわけではないが、いつもそばにいてくれる。監視という名目があるのだから近くにいないわけにはいかないのだろうが、それを抜きにしてもさりげなく近くにいてくれる存在というのはフェイトにとってありがたかった。

　澪はフェイトの言葉に、自分の意思で答えてくれた。彼は夢と現の境界で生きているとフェイトは思う。澪はフェイトの母親の死を否定することも軽蔑する事もなかった。ただ事実を受け止め、しかししっかりと言葉の上に希望を残していく。その澪のスタンスのおかげでフェイトはこの半年、気が楽だったと心底思う。

　そしていつの間にか、フェイトは澪の背中ばかり追ってしまっている。近くにいてくれると安心する。

　澪はこうして歩いているとき、あまりフェイトの方をふりかえらない。しかし、本当にたまに、フェイトの方を振り返ってついてきているか確認する。そのとき澪は少しだけ笑うのだが、その顔を見るのがフェイトは好きだった。

　フェイトは自分が依存していることに気づいている。だが、澪が来るものを全く拒まないことと、半年も続いているこの生活のせいで彼から離れるのはもうしばらく・・いや結構、先になりそうだった。

　そしてカフェテリアの前を通り過ぎたとき澪は足を止め、半身になってフェイトの方を向いた。そしてフェイトを確認すると少しだけ目元を緩めた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そうして僕は管理局本局のショッピングモールに来た。もちろんフェイトを引き連れて。

フェイトは基本無一文だ。一応、犯罪者として捕まっているわけだし、仕事をしているわけでもない。とは言っても僕やクロノ、リンディさんがいるのだから何か気晴らしになるものを買ってもいいと思うのだが、遠慮しているのかフェイトはそれをしない。せいぜい「無限書庫」で本を借りるくらいだ。今、背負っているワンショルダーには一度に借りられる限界の十冊の小説が入っている。

「フェイトは何か買いたいものある？」

「え？何にもないよ？」

フェイトは明らかに挙動不審になり、目線は明らかに書店の方角へ向かっている。

本か。クロノの欲しいであろう月間ステップも売っているだろうし、寄るか。買う前にクロノに確認は取っておこう。クロノも買っているなら無駄になってしまうし。

「じゃあ本屋にでも行く？」

そう言うとフェイトはワタワタと手を胸の前で動かし、うつむいてコクッと首肯した。

本屋につくと、フェイトは奥の小説コーナーに入っていった。そこで、クロノに念話を入れることにした。

「アイリス。念話をクロノにつなげてくれ」

≪了解、マスター≫

首もとのシルバーアクセサリーが輝き、音声がクロノのデバイス

と接続される。
（クロノ）
（うわっ！！？）
（どうかした？）
（澪か。急になんだ？）
（今、ショッピングモールの書店にいるんだけどさ、月間ステップ、いる？）
（あ、あぁ、そういうことか。できればお願いしていいか？）
（了解。じゃあフェイトを追うから念輪切るよ）
（あぁ。その前に、昼はどうするんだ？帰ってこないなら母さんに行っておくけど）
（そうだね・・昼も近いし、どこか近場で食べようと思う）
（分かった。母さんに伝えておく）
そして今度こそ念話を切った。僕はとりあえずフェイトを追って小説コーナーに向かった。

正直、最新刊であろうと発売と同時に「無限書庫」に入るのだから、あそこに通う限り、よほど欲しい本でもない限り本屋を利用する必要はない。
フェイトは並んでいる本をとっかえ引っ返して、あーでもないこーでもないと考えているみたいだ。
僕が来たことに気づいたのか、フェイトはこちらに走ってくる。
「ねぇ澪。ここにある新刊って無限書庫にあるかな？」
「あるよ。あそこは本が出ると同時に運ばれてくるからね。持っていたい本とかない限りは無限書庫で大丈夫だよ。あぁ、でも無限書庫には返却期限があるから、気兼ねなく読みたいから買うっていう感覚はありだと思うけど」
フェイトは一冊の本を持っている。
手にとって見せてもらう。ライトノベルで学園恋愛モノみたいだ。題名は「青空図書館３」。えぇと、確かこの出版社のは裏に作品の

紹介がついていたはず。

――季節は夏。毎日を、何をやりたいわけでもなく気軽に過ごしている少女、「アミ」は中学受験を控えていた。しかし、まったく身が入らない。

「こんなんじゃ駄目」と一念発起し、放課後、向かった図書室には一人の少年がいた。彼は隣のクラスの男の子、容姿端麗、成績優秀、性格も申し分ない図書委員長の「レイン」。

物静かな雰囲気の彼は同学年の女の子たちからは人気があり、アミも気になっていた。

勉強会で彼に急接近したアミだったが、アミは彼の抱える問題を知る。彼は幼くして親を亡くし、親戚の家で暴力を振るわれる生活を送っていたのである。

そして彼は、県外の中学校に特待生として入学するために日々、歯を食いしばって努力しているのだった。

アミは思う。この人の助けになりたいと。

しかし、毎日をただ過ごしてきただけの彼女には彼の気持ちなんてわからない。無神経なことを言って彼を怒らせてしまうのだった――

うん。紹介を呼んだだけでも読みたいと思わせるドラマがあるとは思うよ？だけどこのヒロイン、金髪で髪を両側でくくっていてフェイトそっくりだし、このレインっていう図書委員長のほうは紺色の長髪でアイスブルーの瞳。まんま僕が元になったキャラクターだろ。

そして作家は「ネル・クロニム」。これ明らかにルネさんだよ。何やってるんだよあの人は。

「フェイト、この本欲しいの？」
「え？いや？えぇと、そうじゃなくて・・・・」
「でも、この本ずっと持ってたよね。図書館で借りるだけじゃなく、持っていたいんじゃないの？」
その言葉にフェイトは一瞬逡巡する様子を見せ、「うん・・」と頷いた。
「まぁ、ライトのベル一冊くらいなら全然かまわないよ。一巻と二巻は、後日自分でってことで」
「うん！」
フェイトは僕の後ろに付いていた時とはまた違う、はじけるような笑みを見せた。

雑誌コーナーで月間ステップを手に取り、青空図書館３と一緒に購入し、書店を跡にした。
服や雑貨は十分な数があるので特に必要ない。女の子だし、フェイトは服には興味あるかなと思っていたけど、そんなに興味を示さなかった。
僕らはその後、気になっていたＣＤを購入し、オムライスに似た料理の見本がガラスケースにビッシリ入っているお店に入った。

「じゃあ僕はメラニコヌ・グルナソース、グマ付きで」
僕は注文をとりに来たウェイトレスに注文する。日本だと、オムライス・デミグラスソース、ハンバーグ付き・・になるんじゃないかと思う。と、言うかまったく同じだ。
「わ・・私は、これを」
フェイトはおずおずとメニューを指差す。彼女の過去をかんがみ

るに、こういうところには来慣れてないんだろうな。
ちなみにフェイトが指差しているのはトマトソースのオムライスだ。
「以上でよろしいですか？」
「はい」
そう言うとウェイトレスは去っていく。

「フェイトはこの後、どこか行きたい所とかある？」
「私は・・特にないかな。何があるのかも分からないし」
そうだった。フェイトは本局に着てから半年、ほとんどの時間を僕と共に過ごしているのだから、買い物にも、最初、リンディさんと服や雑貨を買いにここに来た時意外はほとんど外に出ていないんだ。
「じゃあ、ターミナルの方にでも行ってみる？僕もあっちの方には行ったことがないからね」
「うん／／／」

出てきたオムライスの味はなかなかのものだった。贔屓にしてもいいかもしれない。

管理局本局で言うターミナルとは、路線が集まっていたり、飛行機が離発着するようなものではない。大型転送施設のことだ。各時間ごとにどの区画に転送するのかが決まっており、人は目的の区画に転送される部屋に集まって、いっきに送られる。
まぁ、鉄の塊が魔法に変わったくらいで、感覚的には電車のホームでいい。

さて、ターミナルについて説明したのだが、今回はまったく関係ない。ショッピングモールからターミナル周辺までは歩いて十分いける距離だし、別ブロックに行こうとも考えていないからだ。

ターミナル周辺には、やはり利用客のニーズを考えて、飲食店や居酒屋が多い。他には、ショッピングモールが近くにあるので、こちらは専門店が多いな。デバイスの部品とか、楽器、伝統衣装とか。それに露店も結構ある。

しばらくぶらぶらとしていた僕たちだが、フェイトがとあるところで立ち止まったので僕も足を止めた。二十代後半くらいの男性が開いているシルバーアクセサリーの露店だった。

フェイトは開かれたトランクに飾ってある一組のアクセサリーに見入っていた。

「お？お譲ちゃんたち、デートかい？」

茶色い髪を肩まで伸ばし、バンダナを巻いた、トランクを二つ開いているだけだが、店主といっていいのだろう男が言う。フェイトはその言葉に赤くなってうつむいた。

「いいねー、初心って感じで」

フェイトはその言葉にどんどん縮こまっていく。僕はその場に座り込んで商品を見る。

それなりの値段だ。純度の高い銀製で、手作り。小さいものでも五千円はする。フェイトの見ていたのは、一組、つまり二つで五万近い。僕は今までの給料をほとんど貯金しているので余裕といえば余裕だが・・・・。

「はは、坊ちゃんたちには少し高いか」

フェイトが見ていたのは、月をデフォルメしたようなデザインのものと、丸いからもう一つは太陽かな？水面の波紋の様に丸が連なっているから違うかもしれないけど。細部まで丁寧に造られていて、この主人の技術の高さが窺える。

あぁ、たぶんこれは杖と月、剣と太陽だな。

「この二つ・・いや、一組かな？下さい」
「おこづかいは大丈夫なのか？」
主人は心配しているのだろう。そう聞いてくる。
「いや、僕は一応本局勤めなので。それに普段お金使わないし、それに僕も気に入ったからね。気に入ったものは買っておかないと」
「あ！どこかで見たことがあると思ったら、無限書庫の館長じゃねぇか」
「そういうことです。はい」
僕は四万七千円を差し出す。
「ちょっと待ってな。紐はサービスしてやるぜ！」
店の主人は黒い紐をアクセサリーに通し、紙袋に入れた。

僕はそれを受け取って、いまだ縮こまっているフェイトの手を引いてその場を離れる。
店の主人は「また頼むぜー！！」と手を振っていた。

近くの公園のベンチに座って紙袋を開く。
「はい。フェイト」
僕は杖と月を模した方をフェイトに渡す。
「え？でも・・そんなの悪いよ」
「いいんだよ。僕も気に入ったんだし」
そう言って僕は剣と太陽を模したアクセサリーを見る。うん。いい仕事してる。
僕はアクセサリーの紐を切って、アイリスに通している紐を剣と太陽のアクセサリーにも通す。

フェイトは未だ月と杖のペンダントを見つめている。

「フェイトは首にかけないの？」
「え？いいいいよ」
「そんなこと言ってもせっかく買ったんだし、着けなきゃ損だろ。せっかく一組になってるんだし。あ、僕が着けてあげるよ」
「え？」
呆けるフェイトの手からペンダントを奪い、後ろに回る。髪を分けて、引っかからないようにしながら紐を首にかけた。

「っ！！！！！！」

フェイトは肩をビクッと震わせ、顔をみるみる赤くする。そして力を失って、ベンチにコテンと寝転がった。
「ちょっと、フェイト？フェイト～？」
どうもしばらく起きそうにない。

今だ顔を赤くしたフェイトが僕の後ろについてくる。
僕らは今から拘束されているフェイトの使い魔、アルフに会いに行く。ターミナルではなく、一定以上の地位の管理局職員のみが使用できる特別な転送装置で。
アルフのいるのは独房である。とは言ってもその実態は少し狭い一人部屋。使い魔である限り、フェイトを押さえている限りどうしようもないという結論に至り、悠々自適の一人部屋だ。
もっとも、裁判を終えるまでそこにいるというだけで、別に今のアルフには罪があるわけでもない。悠々自適なのは当然だった。もっとも、フェイトに会えないアルフはずいぶん寂しがっていたし、肉が少ないと嘆いてもいた。

「あ、ベンさん。今日もごくろうさまです」
僕は看守のベンさんに声をかける。
「お、毎日ご苦労だな。ちょっと待ってろ」
そう言ってベンさんは帳簿を持ってくる。どの時間からどの時間、どんな人間が面会したか。それを記帳するものだ。僕は必要事項を書き込む。
「はい。ベンさん」
「ふむふむ。よし。面会室で待ってろ」
ベンさんは扉を開け、中に入っていく。
僕らは面会室に向かうのだった。

僕とフェイトが面会室で待つこと数分。ベンさんがアルフを連れてきた。彼女は狼を素体にした使い魔で、気前のいいお姉さんキャラというのが最初の印象だったのだが・・・・・

「あんた、ほんとにいいやつだねぇ」
涙を流しながら差し入れのビーフジャーキー（減塩）をかじっているこの状況。彼女は中々の愉快キャラだと思う。
最初はこんな感じではなかったのだ。最初は・・・・・
「ふんっ！フェイトに手を出したらただじゃおかないよ！」
で、一ヶ月後・・・・・
「きょ、今日は、何か持ってきたのかい？」（チラチラ）
三ヶ月後・・・・・
「澪、今日も来てくれたんだね」
で、今だ。

何か一つのドキュメンタリーが頭の中に流れた気がするが、まぁいい。とりあえず今は僕、フェイト、アルフでジャーキーをかじる。うん。おいしい。

二人には言ってないがこのビーフジャーキーはちょっとしたブランド物だ。普通にコンビニで売っている物の三倍くらいの値段はする。

差し入れを持ってくるのは週に一度。普通のお菓子の時もあるので、たいした出費ではないのだが。

僕は今日あったことを話しながら談笑する二人を見ながらまどろむ。

この二人には大した欲はない。謙虚で、清楚で清廉で。侵してはならない存在だ。

一応の証拠は揃っているとはいえ、この二人の将来は僕に懸かっているんだよな――そう思うと負けられない。できる限りの減刑を実現して見せますか。

第六話　新種ストーカー　（感想にあったのでフェイトの心情を軽く追加）（後

なんだかやってしまった感じです。フェイトが原作と違う・・・・気がする。

第七話A' s　闇の書　（なのはのフラグを友情フラグに変更！）（前書き）

裁判のシーンはまた別に書こうと思ったのですが、作者のレベルが足りず、あまりきちんとしたものになりませんでした。

第七話A' s　闇の書　（なのはのフラグを友情フラグに変更！）

フェイトの裁判はつつがなく終了した。事前にしっかりと準備した成果だと思う。

正直、半年くらいの管理局への活動従事くらいは覚悟していたのだが、執行猶予一年半、管理局活動従事三カ月の判決で勝訴した。その時の検察側のオッチャンの顔はミモノだったね。

「裁判長！被告はロストロギアを集めていたのですぞ！？禁固刑にすべきです！」

「けど、黒幕は彼女ではないでしょう？あくまで彼女は第一級犯罪者、プレシア・テスタロッサに命令されて動いており、本人の意思は入る余地がなかった。それは活動報告書にも書いてありましたし、証拠も出そろっている」

「どんな理由があろうと、集めていたのは事実！それはどうするのだ！」

「僕は何も彼女の無罪を主張しているわけじゃないよ。ただ、懲役刑はやりすぎだと言ったんだ。この手の少年犯罪で懲役刑が出た記録はない」

「ふん！それならあるわ！三十七年前のミリタリー・ソース事件に、六十二年前のマインド・プリズン事件、どうだ。どちらも未成年の犯罪で片方は死刑、もう片方は永久流刑が執行されている！」

「それは本人がロストロギアを悪用した事件でしょう。今回の被

告は使用などしていない。使用して虚数空間の壁を開けたのはプレシア・テスタロッサであり、彼女ではない。それらとはまた別の事例でしょう。今回に類似した事例も記録に残っていますが、懲役刑がついたなどということはない。前例がないのだからそうするべきではない」

「前例がないのなら、作ればいいのだ！！！」

「子供ですか？貴方は。僕にはどうも貴方が自分の私情を挟んでいるようにしか思えないのですが」

「貴様ぁぁぁ！！！！！」

まぁ、そんなやり取りがあった。やけにテンションの高いオッチャンだった。そのあとオッチャンは僕に殴りかかろうとし、裁判長の命令で取り押さえられて法廷から強制退去となった。なんであんなのが検事やってんだよ、と、管理局の人材の貧弱さに泣きたくなったのは本当だ。

事前に調べて、今回出てくるであろう検事の中にあのオッチャンの名前もあがっていた。どうもあのオッチャンは犯罪者を衛星軌道上の牢獄にぶち込むのを生きがいにしているらしい。陰惨な趣味だ。

でも正直あのオッチャンで助かったな。あのオッチャンがつかみだされたおかげで好き勝手減刑案を語ることができたのだから。

ほぼ無罪といっていい判決が出たのだが、フェイトは自ら管理局嘱託魔導師に志願した。何とも真面目というかなんというか。書類上僕とリンディさんが後見人となっているので、問題は出ないと思うが、管理局上層部には気をつけておかないとなと思う。フェイトも子供ながらすさまじい魔力を持っているのでいいように利用されかねない。まぁ、そのことはリンディさんも分かっているだろう。

そして今日、フェイトは長期休暇を取ったハラオウン一家とともに第９３管理外世界「地球」へ、友人に会いに行く。その友人からもらったリボンで髪をくくり、僕が大体八か月前に渡したワンショルダーに軽く荷物を詰め込んでいる。

「じゃあ、いってらしゃい」

次元航行艦のドッグ、ドアにつながる橋の前で僕はアースラに乗り込もうとするクロノ、リンディさん、フェイト、アルフに声をかけた。

「澪は来ないの？」

フェイトは顔を暗くして言った。

「まぁ、僕には仕事があるからね。「管理責任者」という立場だし、そうそう簡単に休暇は取れないよ。でも今回は楽しんできなよ、久しぶりに会う友達なんだろう？」

「・・・・うん」

「フェイト、元気出してよ。澪だって事情があるんだからさ」

アルフがフェイトの肩に手を置いて元気づける。

「じゃあ澪君。戸締まりはしっかりしてね」

リンディさんが微笑んで、僕に注意を促した。

「分かってます」

「まぁ、澪君はしっかりしてるから平気よね。じゃあ行ってくるわ」

四人はアースラに乗りこんでいく。フェイトは最後までこちらをちらちら振り返り、アースラが航行を開始するまで窓から出立ロビーの、見送り用のデッキにいる僕を見ていた。

アースラがドッグから消え、今は地球へ航行途中だろう。僕はあ

の後、ちゃんと無限書庫で仕事をして、ハラオウン家に帰ってきた。管理局に来てから、一人ということはなかった。何だかいつもの家が広く感じる。

≪マスター≫

まぁ、未だ僕はひとりじゃない。アイリスがいる。

僕は今日、手の空いた時間に魔力変換資質の実験をしていた。僕はフェイトの裁判が終わり、彼女のデバイスが戻って来てから、彼女の魔法を「解析」した。そして、魔力変換資質をエイヴィヒカイトで再現しようと思ったのだが、どうやっても威力が５０％減退してしまう。まだ何かが足りないんだ。

正直こんなんじゃ戦闘には使えない。魔力によるゴリ押しでも、魔力変換資質の必要ない普通の魔法を使った方がいい。利用できるとすれば、せいぜい日々の生活で火花を出して火をつけるくらいか。サバイバルでもなければあまり使う場面はないだろうけど。

僕は、一人分の夕食を作る。今までこの家に住んでいる四人、アルフが来てからは五人分の食事を、まぁ、リンディさんが忙しい時にだけ作っていたくらいだが・・・・大人数の食事しか作ったことがないので少し大変だ。

そして食事をとり、戸締まりをしてベッドに入る。一人の夜は静かだ。

＊＊＊＊＊＊

翌朝、僕は目玉焼きとサラダを簡単に作って、インスタントのコーンスープに湯を注ぐ。椅子を引いて座り、この世界にはないということで作ってもらった箸を握る。その時だった。

「澪！」

アイリスからクロノのあわてた声が聞こえてきた。僕は何かと思って返事をする。

「何？地球に行ってたんじゃなかったの？」

「あぁ。地球には行ったさ。でもあっちで事件が起こって急いで戻ってきたんだ。アースラまで来てほしい。十四番ドッグだ」

「分かった」

事件か。クロノのあわてようといい、並の事件じゃないな。

そして次はルネさんに電話をかける。昨日も残業で、無限書庫にいるはずだ。しばらくの着信音の後、受話器が上がる音が聞こえた。

「ふぁい、こちら無限書庫・・・・」

やはり疲れてるな。でも言うことはきちんと言っておかないと。

「ルネさん。僕です、澪です」

「澪君？・・どうしたの？」

「実はクロノから呼び出されまして、今からアースラまで行ってきます」

「頑張ってねー」

そう言って、ルネさんの声は聞こえなくなった。寝たな。

僕は用意した朝食をそのままに、アースラへ向かった。

「クロノ！」
僕はアイリスを使い十四番ドッグに転移し、アースラのブリッジへ。
「来たか澪」
クロノは昨日あったことを説明する。

昨日の夜、急に地球の鳴海町という町に広域封鎖結界が張られた。それに気付いた少女、高街なのはのデバイス、レイジング・ハートは高速で接近する魔力反応を察知、なのはは屋上に上がり、その魔力反応を待つことにした。
そしてデバイスを起動する前に攻撃が来た。辛くもしのぐなのは。攻撃してきたのは赤い服の少女だった。デバイスの性能で劣るなのはは少女の攻撃で追い込まれていく。
アースラはその攻防によって発せられた魔力反応をとらえ、フェイトとアルフ、そして同乗していたユーノ・スクライアを戦線に投入アルフのバインドで対象の捕獲に成功。しかし、相手側にも味方が現れる。そして相手の圧倒的技量に次第に追い込まれていく。
なのはフェイト達の危機を救うために彼女の最大魔法であるスターライト・ブレイカーを撃とうとする。しかしその時、彼女の胸を何者かの腕が貫いたのだった。
そしてなのはリンカーコアから魔力を抜かれて倒れ、本局の医療施設に運ばれた。

「そして、これを見てくれ」
クロノはコンソールを操作し、一つの映像を再生する。黄緑色の服を着た女性が一冊の本を持って飛び去る映像だ。クロノはその女性の手元を拡大する。そこには茶色の表紙に十字の装飾の入った本がある。

「・・・・闇の書か」
第一級捜索指定ロストロギア「闇の書」、十一年前、クロノの父親の命を奪ったモノでもある。
「知っていたか」
「あぁ。無限書庫レベル3の管理局の活動報告書と、レベル5のロストロギア関係の書物の中に記述があった。詳細まで覚えているよ。「解析」で頭に焼き付けたからな。レベル5は最近本の貸し出しの仕事が多かったからまだ整理が終わっていない。まだ探せばあるかもしれない」
「・・そうか。本当は今すぐ聞きたいところだが、なのはの病室に向かうぞ。フェイト達や母さ・・リンディ提督、ユーノ・スクライアもそこにいる」
「分かった」

本局の医療施設、一つの病室の外にアルフとリンディさん、そして亜麻色の髪の少年がいる。一応名前だけは知っている、ユーノだ。僕の姿を認めるとリンディさんとアルフが駆け寄ってくる。
「澪君、来たのね」
「えぇ。クロノに呼ばれましたから。で、何か僕に用があるんでしょう？」
「えぇ、そうよ」
リンディさんは咳払いをして、宣言した。
「無限書庫管理責任者、茜火澪。あなたにこのたびの事件の捜査協力を申しつけます」
そうして僕に一枚の紙を見せつける。それは、無限書庫管理責任者が、アースラに同行するというものだった。管理局上層部の、僕より上の人物の判子が押されている。

「分かりました。拝領します」
僕はそういって書類を受け取る。しばらくは無限書庫の仕事は滞るな。
「それで、リンディさんたちがいるということはこの病室ですか？なのはがいるのは」
「そうよ。会っていく？」
「そうします。ビデオレターで知っている程度ですが、知り合いですから」

僕は病室の前に立って、ノックする。コンコンという音に反応して返事が返ってくる。
「はい」
フェイトの声だ。なのはは寝ているのだろうか。
「あぁフェイト、僕だけど・・入っていい？」
「澪！？うん、どうぞ」
僕はその声に続いて入室する。ベッドにビデオレターで見た、茶髪の少女が上体を起こして座っていて、その横でフェイトが丸椅子に腰かけている。
僕はベッドのなのはに近づく。
「初めまして、高町なのは。僕は茜火澪。初めまして。澪と呼んでくれて構わないよ」
いちおう、面と向かって会うのは初めてなので、そう挨拶する。なのはは何故か僕の顔を見て唖然としている。
「にゃ～、やっぱりかっこいいの」
かっこいい？僕が？そうなのかな。
一方フェイトがなのはの方を睨みつけて不機嫌ですという顔をし始めた。
「あ、私は高町なのは。なのはって呼んで」
なのはは緩んでいた顔を正すと、僕の自己紹介に答える形でそう

言った。がっちりと握手を交わす。そして、フェイトは治療をけた直後のはずなのに置き続けるなのはに忠告した。
「なのは、寝てた方がいいんじゃない？」
「む～。私が大丈夫だもん」
フェイトの忠告に反論し、なのははベッドから降りて立とうとした。しかし、力が入らないのかよろめいて、僕の方に倒れてきた。
ボスっと、僕の首筋に顔をうずめる形になる。シャンプーのいい匂いが僕の鼻に届く。僕からはなのはのうなじが見えるが、赤くなっているのが分かる。恥ずかしがっていることは確実だが離れていこうとはしない。
その時、ガタンと音がした。
「なのは・・何、してるの？」
フェイトが表情のなくなった顔で僕らを・・ではなくなのはを見ている。なのははフェイトの声を聞き、ビクッと肩を震わせるとすごい勢いで僕から離れた。しかし、また足がふらついて倒れるので僕は腰に手をまわして抱きすくめる形になる。
「なななななな！！！！！」
フェイトが高速で「な」を連続して口にする。一方僕と正面から向かい合ったなのははもう気を失いそうである。いちおう、日本人が異性との触れ合いにおいてシャイであるという知識はある。僕も昔、この世界のじゃないけど住んでいたからね。彼女はすごい勢いでもじもじしている。
そして近寄ってきたフェイトがなのはを羽交い絞めにして僕から引きはがす。なのはは未だ唖然として顔を赤くしている。
しばらくしてなのはが落ち着いて、彼女をベッドに戻した。フェイトの不信の目線は未だ続いている。
「さ、さっきはありがとう・・なの」
なのはが僕を見る視線はいろんな場所を経由している。いわゆる挙動不審だ。

「いや、気にしないでよ。確かに僕も少し驚いたけどさ」
「うん・・・・」
僕となのはが話しているのを、フェイトはいかにも気に入りませんという顔で見ている。そして口を開いた。
「・・なのは？澪は私のだからね？」
私の、てまた危険な言動を。そのフェイトの一言に、なのはの顔は真っ赤になる。
「わ、わわわ私にはそんなつもりないよ！ただ、ちょっとかっこいいな～って思って」
「そう。ならいいよ」
フェイトの目線が普段のものに戻る。フェイトってたまにこうなる時があるんだよな。僕が無限書庫の職員たちに毎朝抱きつかれているときとかさ。

僕は身体の魔力を整える結界をなのはのベッドの周りに敷き、病室を後にした。そしてリンディさんの執務室に皆で向かい、リンディさんは全員がそろったとみると鍵をしめた。今ここにいるのは僕、クロノ、リンディさん、フェイト、ユーノ、リーゼロッテにリーゼアリアだ。
「じゃあ澪君、「闇の書」について、知っていることを話してくれるかしら？」
奥の机に座ったリンディさんが、机に肘をついて手を顔の前で組んで言う。
「はい。まず、「闇の書」というのは、管理局の有史以前から存在し、魔導師の魔力を蒐集して力を得るロストロギアとしてたびたび管理局の歴史に登場します」

僕は「闇の書」の映像を宙に映し、話を続ける。
「一人の主人を選んで起動し、その主人が死ぬか本体が破壊されると無作為に転移し、次の主人のもとにおさまると、報告書の内容から読み取れます。そして「闇の書」には守護騎士プログラムという物が存在し、主人を守っており、皆さんももう見たと思いますが、彼女らを倒さない限り、主人に手を出すというのは難しいと言わざるをえません」
映像をある報告書に変える。
「そして、ここからが重要なのですが、「闇の書」は完成すると暴走し、周囲に破壊をもたらしています。６６６ページ分の魔力はすさまじく、世界一個が滅んだという事例もあるようです」
僕はフェイトに向き直る。聞きたいことがあるからだ。
「さて、フェイト」
「え？な、なにかな？」
自分に話が来るとは思っていなかったのか、フェイトはあわてている。
「先んじて守護騎士にあったようだけど、どうだったのかな。とにかく生きた情報というのは少ないんだ。この書類には守護騎士には人格がなく、ただ「闇の書」の完成を目指すプログラムと書いてあるけど、僕が映像を見た限りそうは思えなかったんだよね」
「うん・・私は、自分たちの意思で「闇の書」の完成を目指しているように感じたよ。それに、彼女たちは破壊を目指す様な人間じゃなかったと思う。私の戦ったシグナムは本当に騎士っていう感じで・・・・・・」
「正義を掲げるっていう感じかな？」
「そう」
「あ、それと見たことのない魔法を使ってたよ」
近接系特化魔法、ベルカ式か。
「あぁ、あれはベルカ式だね」
「ベルカ式？」

フェイトの疑問にクロノが進み出て答える。
「遥か昔に僕らの使うミッド式と勢力を二分した魔法だ。既についえているから、稀少魔法の一つとして数えられている。その使い手は騎士と呼ばれていたようだ。詳細は明らかになっていない」
「まぁ、管理局の有史以前のベルカ王朝の魔法だからね。一応、近代ベルカ式というのもあるけど、それはミッドチルダ式でベルカ式を再現したものだし、ベルカ式とはいえないかな」

フェイトはもう前の戦闘で気づいたことはないみたいだ。
情報が少ない上にそれが正解かも分からなくて、どう対応するのが妥当か分からないな。とにかく「闇の書」の完成を止めるのは決定とみていいけど、何故、守護騎士たちは完成を目指すのか、その理由が知れればまた現状が変わってくるかもしれない。
「リンディさん」
「なにかしら？」
「正直、事前の情報と違っている個所がでてきました。「闇の書」の完成を止めるのは決定的かと思いますが、守護騎士たちにもう一度接触し、正確な現状を把握するのが急務だと思います」
「・・・・そうね。それで、他に「闇の書」に関する情報は？」
「ありません。レベル５の整理がまだ完璧ではないので、新たな情報が出てくる可能性はありますが、期待はしない方がいいでしょうね。どうしますか？」
正直、今の状況じゃ待機以外にないだろうな。守護騎士たちのレベルを見るに、なのはの協力は必須といっていい。並の局員じゃ太刀打ちできまい。連れていっても無駄だ。せいぜい結界を維持してもらうくらいか。
「では、澪君とユーノ君には無限書庫で情報収集を、リーゼアリアとリーゼロッテは彼らについていってくれるかしら。後は・・・・」

その時、端末から通信の着信音が響き、アースラのスタッフであるエイミィさんの顔が宙の画面に浮かぶ。
「何？エイミィ」
「リンディ艦長。なのはちゃんたちのデバイスなんですが、少しおかしいんです。修理を進めているんですが、部品が足りないというエラーが消えないんです。そちらに情報を送ります」
画面には見慣れたミッドチルダの文字。デバイスたちはカートリッジシステムの搭載を求めていた。

第八話A' s　デバイス新生

「カートリッジシステム？」
ここはデバイスの修理を請け負う修理室、宙に浮かぶデバイスの前に立ったフェイトが、コンソールの前に座っているエイミィさんに尋ねた。
「うん。古代ベルカ式のデバイスに使われる、魔力を一時的に高めるシステムのことだよ。これについては澪君の方が詳しいんじゃないかな」
フェイトとエイミィさんの目が僕の方に向く。
「カートリッジシステムね。僕のデバイスにもついてるよ。儀式によって魔力を込めた弾丸をデバイスに組み込んで、それを開放することでデバイスに魔力を満たすシステム。ロードしたときのみ、本人の実力以上の魔法を使える。その反面、魔力の制御が難しく本人にも負担がかかるという欠点もあるけど・・・・」
フェイトは僕の方を向いて心配そうに目を細めた。
「そんな危険なものを使ってるの？」
「澪君は魔力に対する抵抗が異常なまでに高いから大丈夫なんだよ。本当は使ってほしくなかったんだけど、身体に影響も出ないし本人がこのギミックは外せないっていうから・・・・まぁ、格好いいのは分かるんだけどね」
正直、フェイトやなのはのデバイスでカートリッジシステムを搭載するには少し無理がある。フルドライブを行うとデバイスのフレームに亀裂が入りそうだ。それに本人への負担も大きい。解放した魔力をデバイス内で使いきるようにしなければ。
それに、開発方面でも、基本的に管理局武装局員のデバイスにカートリッジシステムは搭載されていないので、管理局の技師たちでは何週間かかることか。エイミィさんがやったとして、カートリッジシステムの基本構造にフレームの強化、細部の調整も含めて一週

間では無理だろう。
「僕が、やるべきなんだろうね」
僕のデバイスは自作だ。もちろんカートリッジシステムも自分で調べ、試行錯誤して作っている。
「え？」
フェイトが、何のことだというような窺うような表情をこちらに向ける。
「僕がカートリッジシステムを搭載すべくデバイスたちの改造を行うってことさ」
「そうなるわね。私もカートリッジシステムは専門じゃないし、経験のある澪君にやってもらうのが一番よね。あ、でもそうなると無限書庫の方はどうしよう」
「そうなんだけど・・・・無限書庫の方は正直そんなに期待していないからこっちの方が優先度が高いかな」
「え？え？え？」
フェイトはどうも話についてこれてないようだ。その彼女にエイミィさんが言う。
「あ、澪君ってデバイス開発にかけてもすごいんだよ？アイリスだって自分で作ってたしね！」
「えええええええぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！」
フェイトは大声をあげて驚く。そんなに意外なのかな、僕がデバイスをいじれるのが。まぁ、僕自身で勉強したわけじゃない。「解析」による裏技ではあるね。

＊＊＊＊＊＊

そして、僕は「無限書庫」での調査から外され、レイジング・ハートとバルディッシュの改造を行っていた。カートリッジシステムを搭載すべく基本構造を変え、フレームを補強。デバイス内の魔力の伝達を良くし、使用者の負担を防ぐ。本人たちの戦闘スタイルを考え、なのはのデバイスには交換の早いマガジンタイプ、フェイトの方には接近戦の邪魔にならないリボルバータイプを採用した。

デバイスの改造自体は三日、貫徹して終了した。その次の日に僕の魔方陣の中で療養していたなのはが完全回復。そして・・・・。

「「さあ！しょうぶだよ（なの）！澪（君）！」」

僕の目の前には新たなデバイス、レイジング・ハート・エクセリオンとバルディッシュ・アサルトを構えた二人。ここは管理局の演習場、脇にはクロノとユーノ君、そしてリンディさん。エイミィさんは携帯端末を手に持って僕らのデータをとる準備をしている。

正直、僕でなくてもいいんじゃないかと思う。僕は最初、クロノを指名したが彼女らの要望で僕が模擬戦を行うことになった。仮眠はとったとはいえ三日貫徹したあとなんだけどな。まぁ、エイヴィヒカイトのおかげで問題はないが。

「起きて、アイリス」

僕はそう言って胸元のアイリスをコンコンと叩く。

アイリスはデバイスの改造に立ち会って、その演算機能をフルに使っていたため今まで待機モードで回路を冷却させていた。

≪んが！≫

何とも間抜けな声をあげ、起動する。おかしくて少し口からフフ・・と声が漏れてしまった。

≪笑ったな！？今笑っただろう！マスター！！≫

アイリスはそうまくしたてる。
「ほえっ！？」
そしてなのはは突然の声に驚いたようだ。
「え！？デバイスが喋ってる！？」
「なのは。君のデバイスも喋るじゃないか。インテリジェントデバイスなんだから」
「そうじゃなくて・・」
僕のデバイスは感情豊かだ。彼女はそのことを言っているのだろう。
「僕のデバイスはそう組んだからね。僕の相棒というだけでなく、友として、時には助言者として僕を支えてくれるように。フェイトたちのデバイスもかなりの能力を持っているけど、僕のデバイスも負けてないよ」
アイリスを胸元から外し、フェイトたちにかざす。
≪――――だからマスターは・・・・おい！マスター！聞いているのか！？≫
「起動・・」
アイリスの言葉を無視し、僕は淡々と告げる。
≪クッ・・・・後で覚えていろよマスター≫
んー。後でアイリスのご機嫌取りをしないといけないかな。でもどうすればいいんだろう。一度徹底的に洗浄してみるか？
僕は作業用のつなぎを着ていたのだが、黒い細身のズボンとボディースーツになり、その上からジャケットと、下半身は外套を腰にまいた姿になる。正直、映像で見たシグナムに似ていなくもない。長い髪が戦闘の邪魔になるので起動とともに三つ編みになるように設定しなおした。髪は纏められ、先が紐で結ばれる。
そして手には一振りの白刃。群青の曲線があしらわれており、美麗な輝きを放つ。僕は特に構えるでもなく、自然体でフェイトたちの前に立った。

「「・・・・・・・・・」」

なのはとフェイトは無言で呆けている。若干、顔が赤い。デバイスを握る手にも力が入っていない。

「な、何か変かな？」

内心ビクビクである。正直、管理局の魔導師にはこんな恰好している者はいない。ひどく場違いなのではないか？という考えが頭から離れない。ではバリアジャケットの形を変更すればいいのではないか？と思うが、何故かそこはアイリスが強固に防御しており、書き直すことができない。

「そ、そそそんなことないよ！ね！なのは」

顔をさらに赤くしてフェイトが言う。

「う・・うん。格好いいの」

「ま、まぁ、それならいいんだけど」

変えることもできないし、考えても仕方ないのかな。まぁ、ちゃんと機能を考えて作ってあるから、変えるといってもこれ以上のものはなかなかできないだろう。

「じゃあ、いくよ」

その言葉にフェイトたちはしっかりとデバイスを構える。そしてわずかな間の睨みあいの後、ぶつかるのだった。

「いくよ！レイジングー・ハート！」

なのはのその言葉とともにレイジング・ハートは握る部分の先についている、拳銃でいう遊底（スライド）が動き、マガジンからカートリッジが一発装填される。

「カートリッジロード！アクセル・シューター！」

カートリッジによってデバイス内の魔力が増強され、レイジング・ハートから十二の魔力弾がはなたれる。だがその射軸を見るに、僕に当たる軌道ではない。だが、あの魔法には本人の意思で操作が可

能だったはずだ。
≪Ｍａｓｔｅｒ，　ｃｏｎｔｒｏｌ　ｐｌｅａｓｅ．≫
「うん！」
なのはは目をつむって集中する。すると僕に向かってくる弾丸の起動が劇的に変化し、速度も段違いに上がる。
なのはは十二の魔弾を完璧に操っていた。これで魔法と関わって一年もたっていないのか。天才だな。
僕は右から来る横殴りの数発と正面からの五発ををアイリスで弾き、待機している他の魔弾にも注意をはらう。
こんどは待機していたものも加わって全方向から襲いかかってくるが、避けられるものは避け、無理なものだけアイリスで弾いて距離をとる。やはり年季の差が出ているのか、魔弾の数は多いがその操作にクロノほどのキレがない。そして横目にちらっと、フェイトが魔法を準備しているのが見えた。
「プラズマランサー、ファイア！！」
フェイトから帯電した針のような魔弾が来る。そしてアクセル・シューターも全弾こちらに向かっている。いわゆる十字火砲というやつだ。
物理的にはじいたところで、アクセルもプラズマランサーも消せはしない。魔力で迎撃しなければ、方向転換して再度こちらに向かってくるだけだ。
「ディバインブレード」
≪了解だマスター≫
久々の模擬戦に、アイリスは嬉しそうに答えた。やっぱり戦闘用に作ったからだろうか、機能を僕が使うことに彼女は一種の歓喜を覚えるらしい。
アイリスの白刃を煌めくアイスブルーの魔力が覆う。僕はその状態で迫りくる魔弾を振り払う。
――――バキャン！

という音とともに魔弾は全て砕け散る。悪いね。この魔法のバリアブレイク機能は最大だ。もちろん魔力に対する干渉なので魔弾の対処もできる。フェイトたちは「え！？」と呆けた声をあげ、隙を見せた。僕はその好機を逃さない。人外の脚力でなのはに詰めより、煌めく白刃を振り下ろす。受ける方からすればトラウマになりそうな光景だが、一応非殺傷設定。

レイジング・ハートが自動でプロテクションを起動した。少しずつ食い込んではいるがさすがになのはほどの魔力で防御されるとディバインブレードでも突破には時間がかかる。

「なのは！」

その間に左から黄色の魔力刃、フェイトがデバイスを鎌のように変化させ、僕に斬りかかる。スウェーでかわし、その場での交戦は諦めて距離をとった。そして再び向かい合う。

「・・・・澪、澪の使ってる魔法って・・もしかしてベルカ式？」

フェイトが鎌に変化したバルディッシュを構えながら聞く。

「いや、確かにベルカ式をもとに作ってはいるけど、あの騎士たちの魔法は別物だよ。まぁ、ミッドチルダ式とも違うけどね。僕にはミッドチルダ式の魔法は使えなかったから、僕固有の魔法でデバイスを作ったんだよ。まぁ、魔法理論の細かい部分だからあんまり関係ないといえばないけどね。それにフェイトもミッド式だけど接近戦もするじゃないか。些細な違いだよ」

僕はいったん構えを解き、言う。

「アイリス、ランスフォーム」

≪Ｌａｎｃｅ　Ｆｏｒｍ≫

アイリスが槍の形になる・・といってもただ単に柄が伸びただけなんだけど。僕はアイリスを旋回させて半身になって構えた。

「じゃあ、今度は僕からいかせてもらおうかな」

フェイトたちはデバイスを構えたまま顔をこわばらせる。僕がま

ず攻めたのはフェイトだった。鎌という武器は攻撃速度がどうしても遅くなりがちだ。それを補うための移動魔法なのだろうが、僕も（生身で）速度には自信がある。それに加え、槍による突きはかくある武器の中でも秀逸な速度を誇る。

フェイトから見れば、僕が急に消えたように見えたかもしれない。だが彼女は何とか僕の突きに対応することができたようだ。鎌の持ち手の部分でアイリスの刃をすんでのところで逸らす。

だが、僕はアイリスを旋回させ、石突きによる殴打に変更した。今度はフェイトはバリアで防ぐ。しかし、こらえきれずに弾き飛ばされていった。

「フェイトちゃん！！！」

なのはから先ほどと同じ、魔弾が迫る。槍を旋回させてなぎ払ったが、アイリスに魔力を先ほどまで込めてなかったので消し飛ばせはしなかった。魔弾はUターンして戻ってくる。

僕は回避に努めるが、フェイトのプラズマランサーも打ち込まれた。アイリスに魔力を注ぐ、いわゆるタメの時間がなかなか取れない。

一つ一つ、何とか全てを壊し終えると、なのはがカートリッジをフルロードし、新たな魔法を準備していた。

「スターライト！ブレイカーーー！！！」

極太の収束魔法が放たれる。フェイトが彼女の横で「ちょ、それはまずいって！」と止めに入っているがもう遅い。

「アイリス！カートリッジロード！」

刃の根元の飾りが上下し、一度に二発のカートリッジがロードされる。今回は二回、四発のカートリッジを消費した。

「ディストラクト・ストリーム」

≪Ｄｉｓｔｒａｃｔ　Ｓｔｒｅａｍ≫

アイリスの刃の周りで魔力が回転し、突きとともに放たれた。螺旋を描いて直進する魔法が、なのはの収束魔法にぶつかる。

二つの魔法は拮抗していた。完全に互角である。桜色の魔力の奔

流は、アイスブルーの螺旋を描く魔力に阻まれ、僕へはむかってこない。
≪アーーーハハハハハハハハ！！！≫
久々の最大魔法の行使だからだろうか、アイリスのテンションがおかしい。だがまぁ、僕も「無限書庫」の細かい作業でストレス溜まっているし、ここ三日は貫徹していたわけで・・・・
「ハハハハハハハハハ！！！！」
同じテンションだった。
アイリスにさらなる魔力を注ぎ、ディストラクト・ストリームのパワーを上げる。拮抗していた二つの魔法のバランスが崩れ始めた。アイスブルーの魔力が桜色の砲撃を押し戻していく。
「早く逃げよう！なのは！」
向こうでフェイトがそんなことを言っている。本来なら聞こえないはずだが、強化された聴覚が会話をとらえていた。
「ダメなの！魔砲どうしの勝負、ここで逃げるわけにはいかないの！いつでも私は全力全開なの！」
なのはも魔法の出力を上げる。しかし、一度崩れたバランスを取り戻すことはできない。
「意味分からないこと言わないでよ！なのはーーー！！」
フェイトの悲痛な叫びとともに、二人はアイスブルーの奔流にのまれた。

「ハハハハハハハハ・・・・は？」
テンションが少しずつ戻ってくる。アイスブルーの煌めきがおさまり、僕が見たのは無惨に破壊された演習場。もともと魔法訓練用の演習場なので、消し飛びでもしない限りは問題ないし、専門の掃除係もいるので僕が損をすることはないが・・・・。

「・・・・やりすぎたかな」
≪あぁ！やりすぎたな！≫
アイリスが僕の声に気持ち良さそうに答えた。僕の魔法の射線上にあった障害物は無残に粉々になり、その途中でフェイトたちがブスブスと煙を上げながら死屍累々といった感じに倒れている。
うん。なんか・・・・ごめん。
そしてフェイトたちは医療施設に逆戻りするのだった。

＊＊＊＊＊＊

その後数日、フェイトとなのはは一日に何度も僕に模擬戦を挑んできた。あまりに何度も来るので、一度スケープゴート＜クロノ＞を置いて逃げたことがあったのだが・・・・数時間後にフェイトとなのはだけが（すごくいい笑顔で）戻ってきた。
気になって様子を見に行くと、無惨に破壊され、瓦礫となった演習場の真ん中でクロノがみごとなボンバーヘッドで倒れていた。身体中から煙が上がっている。

「ク、クロノ・・大丈夫か？」
僕のその言葉にクロノはピクリとも動かずに・・・・
「み、澪か。頼むから二度とこんなことはしないで・・・くれ。僕では、彼女たちを抑えきれない・・・・」

それだけ言い残し、デバイスを握るクロノの手から最後の力が失われた。
「クロノ〜〜！！」
そして僕はもう決して逃げないと誓うのだった。

後々フェイトたちに何故クロノがあんなになるまで模擬戦をしたのか話しを聞いたところ、「だって澪が逃げるんだもん」と、口をへの字に曲げ目を据わらせて、そっぽを向いて答えた。
彼女たちに付き合える人はいるのだろうか、と僕は彼女たちの将来が不安になった。

そんなことがあった。クロノはそれからいっそうフェイトから逃げ回っているし、なのはの笑みは彼の恐怖である。ヘタレ道を爆進しているといえなくもない。
ちなみに、「無限書庫」の方はフェイトたちのデバイスが完成してから僕も作業していたが、大した情報は見つかっていない。ただ、ユーノ君が僕の「解析」に驚いていたな。
それとアイリスだが、フェイトたちとの最初の模擬戦のあと、部品一つ一つまでピカピカに磨いたら許してくれた。その日は一日やけにご機嫌だったな。

そしてもろもろの準備が終わると、「闇の書」の騎士たちが地球を中心として活動していることが分かり、アースラで地球の近くに駐留することになった。

そして今日も今日でフェイトたちと模擬戦をし、汗を流し終えた

後だった。

――――ビーッ！ビーッ！ビーッ！

けたたましい警告音がアースラの中に鳴り響く。

「闇の書の騎士たちを結界の中に封じ込めました」

そして管理局の魔導師から通信が入った。

第九話A' s　騎士たちの戦い

上空ではなのはとヴィータ、そしてフェイトとシグナムの戦いが続いている。そしてアルフは犬耳の男と殴り合っているのが見える。フェイトたちはヴィータとシグナムに一対一の試合を挑んだ。騎士たちにサシの勝負を挑んだ以上、僕から止める気はない。それは無粋というものだ。

それに僕にはやることがあった。「闇の書」とは一体何なのか、それを探るべく所持者を見つけ出し、「解析」をかける。作戦上は騎士たちを捕まえ、話しを聞くことになっているが、僕はそうしない。騎士たちの行動と「無限書庫」の情報には食い違いが多すぎる。どちらが正しいということは分からないし、どちらかが正しいという保証もない。やはり、今までやってきたように「解析」で探ろうと思う。

管理局の人間は「解析」を本を読むための魔法、探し物をするための魔法と勘違いしている。本当はありとあらゆる物体、現象、概念をエイヴィヒカイトの変数によって表すことのできるものだ。だがそれを知るのはリンディさんとクロノのみ、他に教える気はない。

加えて言えば、僕はフェイトたちが騎士たちを倒せるとは思っていない。もちろん彼女たちほどの魔力があれば簡単に負けはしないだろうが、いかんせん実戦経験が足りなさ過ぎる。そして騎士たちは古の時代から生き、経験を積んでいる。負けはしなくとも、勝つのは難しい・・そんなところだ。

「よし、じゃあボクたちは「闇の書」の所有者を探すぞ」

「うん」

隣にはユーノとクロノ、フェイトたちが一対一を僕と同様に戦いからあぶれたのだった。

クロノとユーノは行動を開始した。僕も行くかな。

「アイリス、ディフェンスモードで起動」
僕の言葉と共に、両腕に篭手が出現する。今回の僕の目的に攻撃力は不要だ。「闇の書」の所有者から書を奪い取り、「解析」する。それが目的なのだから、剣よりもさらに小回りが利き、防御系魔法にプラス補正のかかるディフェンスモードの方が都合がいい。
そして僕も飛翔魔法を使い、摩天楼の中へ飛び立った。もはやこの程度の魔法にアイリスは必要ないな。

そして数刻と経たず、「闇の書」を所持している黄緑の服の騎士をとあるビルの屋上に見つけた。データによると湖の騎士シャマル。補助魔法各種を使い、戦況の分析をしている。
察知されないよう魔力の隠蔽を全力にし、物陰から忍び寄る。そして給水タンクの陰でタイミングをはかり、自身の魔法に気を取られているときを見計らってバインドをかける。
「え！？」
突然四肢が固定され、呆けた声をあげる。戦い慣れしていないことが見て取れた。補助が専門か。
彼女の後頭部に手刀をいれ、気絶させる。五体が力を失い、「闇の書」が地に落ちてページが開かれる。僕は「闇の書」を拾い上げ、「解析」を開始すると共にクロノに連絡を入れた。「解析」の途中は無防備になるからだ。
（クロノ、「闇の書」を手に入れた。こちらに来てくれないか？）
（なに？もうか？さすが仕事が早いな）
最低限の情報のみを伝え、念話を切った。「解析」に意識を集中する。「闇の書」の情報が流れ込んできた。
それは改造というより破壊としかいえないものだった。中のプロ

グラム、特に防衛機能と所有者の認証機能がいっそなくした方がいいくらいに壊れている。それにともない守護騎士プログラムの方にも影響が出ている。どんなふうになるのかは分からないが。

人の手が加えられているのは分かる。そうでなければこうも局所的に機能が壊れはしまい。手を出したはいいが、「闇の書」・・いや、この書の中に刻まれた名前でいうなら「夜天の書」か。その「夜天の書」はその人間には複雑すぎた。結果、絡まりに絡まった糸が解けなくなるのと同じでどうにもならなくなり、修復をあきらめ、書自体を投げてしまったというところか。

それに・・・・・どことなく管理局の技師特有のクセを感じるところがなんとも世の無常さを感じさせるな。まぁ、決定的な証拠にはなりはしないだろうが。

僕が時間をかけて修理すれば何とかなる・・かもしれない。だが最悪防衛機能を切り離すしかないな。もともと魔導書として使うなら防衛機能なんてなくていいくらいだ。

そうこう考えている間にクロノが到着する。

「澪！」

「クロノ、周囲の警戒を頼む」

クロノは僕が「解析」の最中だと気づいたのだろう、「あぁ」とだけ言って応え、デバイスを握りなおして周囲を窺う。

汚染は最後の夜天の騎士、「夜天の書」の管理人格にも及んでいた。人格プログラムは無傷だが、彼女が消滅しない限り防衛プログラムは己の修復機能によって再生し続けるだろう。やはり人格プログラムを切り離して新たな身体を与えるのが妥当な線だろうか。魔法生命体は未開拓の分野だが、エイヴィヒカイトに不可能は・・・・少ししかない。彼女自身か守護騎士に「解析」さえかけられれば何とかなりそうだ。

その時だ。「がああああ！！！！」と声を上げ、クロノが吹き飛ばされていった。そして視界に映る青色の魔力光。僕の四肢はバインドによって固定され、「夜天の書」はボトリ、とコンクリートに落ちた。それを一人の男が拾い上げる。

その男は仮面をつけ、優雅に立っている。男は湖の騎士、シャマルにかかっているバインドを解き、叩き起こすと「夜天の書」を渡して言った。

「使え」

「え？」

湖の騎士は呆けた声を上げ、目の前の男を凝視している。

「仲間が死んでしまってからでは遅かろう？ページはまた集めればいい」

こんな男は報告にはなかった。いや、変身魔法を使っているのなら男である必要もないが・・・・とにかくこの男の目的は何だ。その正体は？一応ここでは「夜天の書」の騎士たちに味方しているようだが。

「アイリス！」

≪Ｂｉｎｄ　Ｂｒｅａｋ≫

とにかく、「解析」でもストラグル・バインドでもいい。仮面の裏の素顔を晒してもらおう。僕は「解析」の後にストラグル・バインドを放つ。

しかしだ。それは仮面の男をとらえることはなかった。僕の手から広がった「解析」魔方陣の範囲外にいち早く退避し、ストラグル・バインドにもつかまらない。不自然だ。そう思う。

「解析」の効果範囲はそれなりに広く、目の前の男のように所見で見切れるものじゃない。それに、　目の前の男は明らかに発動前

に回避を始めていた。「解析」のなんたるかを知っているということだ。少なくとも物体に作用するということと、情報を読み取るということについては。

そして回避を選んだ以上、この男は素顔を晒していないという等式が成り立つ。間違いなく変身魔法で姿、声を変えている。そして僕の「解析」を知っている以上、管理局、しかも本局の人間の可能性が高くなる。完全にとは言えないが。

「アイリス、スラッシュモード・ソードフォルム」

≪１ｓｔ　ｍｏｄｅ，ｓｗｏｒｄ　ｆｏｒｍ≫

とにかく、不安要素をいつまでも残しておくことはできない。この仮面の男は早急に取り押さえる。僕は剣に変化したアイリスで仮面の男に斬りかかった。

宙を飛びまわり、仮面の男に魔弾＜スプレンダー・バレット＞を打ち込み、距離を詰め、斬撃を放つ。

男は握った拳で、膝でアイリスを弾く。体幹をねじり、蹴りを繰り出す。その動きが何だかリーゼロッテさんに重なった。

僕は同じ回転、同じ足で相手の蹴りに合わせる。すね同士がぶつかり合い、上乗せさせた魔力が擦れ合い、火花を散らす。

「がっ！！！」

エイヴィヒカイト「魔人錬成」で強化された僕の蹴りに、仮面の男はたまらず後ずさる。僕は好機とみて気絶させるべく後頭部めがけてアイリスを振り下ろすが、再び両手両足がバインドで固定された。二人目がどこかに隠れていたのか？

今度のバインドは先ほどのものよりも制度が甘い。力任せに引き千切る。だが、仮面の男にとってその隙は見逃しがたいものだった。全体重、、遠心力、魔力を乗せた渾身の蹴りが僕の脇腹をとらえた。

――――――衝撃。

仮面の男の蹴りはエイヴィヒカイトによる強化の上から、意識を失いそうなほどのダメージがくる。
僕は吹き飛ばされ、給水塔を貫通し、ビルの屋上に強かに全身を打ち付け、それでも止まらずに二階三階と壁を貫く。
「ぐ・・ああぁぁ・・・・」
地面に両手を付き、肺から空気を吐く。
全身がバラバラになりそうな痛み。間違いなく肋骨の一、二本は折れている。内臓にも傷が付いているかもしれない。まったく、僕は体の再生が苦手だっていうのに。黒円卓第四位や十二位みたいな再生力は持っていないぞ。
「魔人錬成」は体に現れる変化も人それぞれ違うからな。僕は第七位マキナと同じ、純粋な肉体強度の強化だ。壊れないこと、それが僕の強み・・・・だったんだけどな。まぁ、魔力制限状態だから、よくさっきの攻撃にもった方だよな。
メルクリウスほど卓越したエイヴィヒカイトが使えれば僕の素質とは関係なく肉体の再生くらい一瞬なんだろうけど・・・・今の僕に望むべくじゃないな。
と、言うかこれ非殺傷設定じゃないな。そりゃあ僕に対して非殺傷設定じゃ心許ないし、僕も相手がいつも非殺傷設定で来てくれるなんて思っていないけど。

僕は隣の壁を突き破って建物から出る。落ちてきた穴から出るなどという下策はしない。屋上に戻ると、湖の騎士が「夜天の書」を開き、魔法を撃つところだった。そして仮面の男はもういない。
「破壊の雷」
その声とともに「夜天の書」が光り、何ページかが失われ、それとともに膨大な魔力が生まれていく。
そして天からの黒い雷が結界を貫き、視界が黒く染まる。間違いなく騎士たちはいったん引く気だ。
「ｐｅｒｓｕｉｔ　ｓｐｅｌｌ」

直訳すると追跡呪文か。僕は魔法を発動させ、無防備に立っている湖の騎士に「印」を付ける。
「いったん引くぞ！連続転移で追跡を撒け！」
結界が打ち破られるとともにピンクの髪の騎士、シグナムが号令をかけ、四色の閃光が夜の空に飛び立っていく。アースラにはエイミィさんがいるけど、あの様子じゃ追跡は無理だろうな。だが、「印」はつけた。この星の近辺に戻ってくるしかない以上僕からは逃れられない。
「カハッ」
僕はその場で咳きこんだ。コンクリートの床に血がこぼれる。やはり、内臓に傷を負っていたようだ。いったん治療に戻らないとな。ここじゃ魔法で内部出血を止めるくらいしかできない。

「澪！」
アースラに戻ると、フェイトが血相を変えて飛んできた。そして僕の口元から零れる血を見てさらに顔を青くしていく。隣にはなのはもいて、心配そうにこちらを窺っている。
「だ、だだだだ大丈夫！？」
「大丈夫だよ・・」
「で、でででもでも」
「ちょっと肋骨が折れて、内臓が、かはっ！」
僕の口から吐き出された血がフェイトの顔に少しかかった。フェイトの顔はもう蒼白だ。そして彼女はゆっくりと後ろに倒れる。
まぁ、こんな様子だが大丈夫なのは本当だ。肉体の再生が苦手とはいっても、魔力を開放すれば簡単に治るレベルだし、たまにむせるだけでなにも苦しくはない。蹴りのダメージは残っているけど。
「ふぇ？フェイトちゃん！？」

なのはが倒れてくるフェイトをなんとか支えている。フェイトは気を失ったようだ。
「なのは。フェイトを部屋に運んでリンディさんに報告しておいてくれ。僕は医務室に行ってくる」
「う、うん！澪君もお大事に！」
なのはもかなりうろたえている。僕が指示を出すとすぐさまフェイトを引きずって去って行った。

＊＊＊＊＊＊

僕は一通り治療を受けると、誰にも言わず書置きだけを残してこっそりとアースラを抜け出し、一人地球に戻った。アイリスは既に湖の騎士につけた「印」をとらえている。
そこは普通の一軒家だった。少し一般家庭との違いを上げるとするのなら、バリアフリー設備が整っているくらいだろう。そこからこの家に住んでいる人物の体が不自由であることがうかがえた。
「オプティカル・カモフラージュ」
読んで字のごとく、光学迷彩。待機モードのアイリスが首もとで光り、僕の姿を覆い隠す。
≪これで良かったのか？マスター≫
アイリスは僕に話しかける。リンディさんやクロノ、フェイトになのはを置いて僕はひとりで来た。もちろんそれには意味も理由もあるのだが、彼女たちは今頃起こっているだろうな。これからすることの詳細は書置きに残していないが、今の僕は重病人だ。フェイ

ト達は怒っているだろう。
「あぁ。「夜天の書」の騎士たちを説得するにはこれが一番だと思う。何せ彼女たちは騎士、だからね」
僕は、騎士たちに勝負を挑むつもりだ。一対四、まず普通では勝てない。僕も戦況判断では彼女たちに負けないとは思っているけど、積み重ねた実戦の数が違う。技量では勝てないだろう。魔力は僕の方が少しだけ強いようだったけど。
だから今まで隠してきた手札を切る。制限された魔力を解き放つか、それとも・・・・。

ある人部屋では初めてみる茶髪の少女となのはと戦っていた髪を左右に三つ網にした少女、鉄槌の騎士ヴィータが眠っており、違う部屋からは騎士たちの話し声が聞こえてきた。とにかく、考えるのは後にして騎士たちの会話に耳を傾ける。
「主の様子はどうだ？」
烈火の将、シグナムが湖の騎士に語りかける。彼女たちの主、魔力は感じなかったがあの少女のことだろうか。
「よくないわ。闇の書の浸食が深くなってる。これじゃもう・・・・それに管理局も出てきちゃったし・・・・」
「主はやての魔力資質はほとんど闇の書の中だ。迂闊に近づかなければ感づかれることもあるまい」
これは新たな情報だ。まぁ、この手のロストロギアにはありがちな展開でもある。起動状態を維持するために持ち主の魔力を食らうというのはかなりの通例だ。しかし、今回悪かったのは「夜天の書」の主が幼い子供だったということだろう。膨大な魔力が引き出されるのに耐えきれず、リンカーコアが悲鳴を上げている・・・・そういうことだろう。
「だが・・・・いつまで主のみが持つか分からん。蒐集のペースを早める必要がある」
「えぇ。はやてちゃんのためにも」

・・・・どういうことだ？

あの少女を助けるために魔力の蒐集を行っているのか？やはり管理局の認識と彼女たちの認識にはくい違いがあるみたいだな。「夜天の書」がどうだったかは知らないが、「闇の書」は完成すれば無制限に破壊をばらまくだけの存在にすぎない。そして「闇の書」の主は毎回魔力を使い果たし、最後には干からびて死んでいる。特にクロノの父親を奪った十一年前の事件は詳細まででそろっており、それは間違いである可能性が低い。

彼女たちにはその記憶がないのか？記録によると、十一年前も彼女たちは騎士として蒐集をしていたとある。それとも毎回姿は同じでも違う人格が召喚されるのだろうか。

もし、僕がいることを察知して出鱈目を言っているのだとしたらそれはそれで見事なものだが、その可能性は極端に低い。そもそもいることに気付いているのなら彼女らは主を守るための行動をとらなくてはならない。

おそらくだが、彼女たちは「闇の書」の完成とともに主の負担が減ると考えているのではないだろうか。確かにそうだ。未完成という、ある種不安定な状態はあの茶髪の少女から必要以上に魔力を奪っているのだろう。その原因が消えれば少しづつでもよくなるのは明白だ。

しかし、彼女たちは「闇の書」がどういうものか知らない。防衛機能が決定的に壊れているのは僕が「解析」で見たので本当だ。彼女らはそれを知らない。完成し、防衛機能が働き始めればあの少女はもう助からない。

「闇の書」の騎士である彼女たちが何故それを知らないのかという疑問は残るが、知らないモノは仕方ない。「解析」のときに騎士たちにも影響が出ていたが、それが記憶の混乱であったのかもしれない。

やはり、戦闘中に思いついた通り防衛機構を切り離すしかないが、「闇の書」のデータに直接触れるには完成させなければならない。完成前に触れれば、主を取り込んで白紙に戻って転移してしまうからだ。完成し、主を正式に認証し機能が完璧に起動する少しの間だけ書き換えが可能になる。

さて・・・本題はここから。どうやって「夜天の書」に関わるかが問題になる。ただ単に管理局側の僕が協力しますと言っても信用する馬鹿はいない。何か一押しが必要なのだが、相手は騎士だからね。生半可なことをしても無意味だろう。だから・・・・

「いやー。いい話を聞かせてもらったよ」

僕はそう言って迷彩を解き、魔力を周りに散らす。突然の登場にその場にいた騎士たちはしばし唖然とするが、すぐに僕を睨み、構える。

「貴様は！」

烈火の将がデバイスに手をかけながら叫ぶ。正直茶髪の少女には起きてほしくないのだが・・・・。

「なんだよシグナム！」

その声が聞こえたのだろう。鉄槌の騎士があわてて起きてくる。そして青い毛並みの狼も現れた。

「な！テメェは！！」

鉄槌の騎士は僕を見るとやはり睨み、声を荒げる。

「少し、静かにしてくれるかな。君たちの主を起こしたくはない」

僕がそう言うと、一応静かにだけはなった。

「何故・・貴様がここにいる」

一分の隙もなく、烈火の将が言う。

「湖の騎士に追跡魔法を付けさせてもらった。情報が必要だった

からね。何故あなたたちは戦うのか、僕らはなにをすればいいのか」
湖の騎士は僕のその言葉に全身を探り、魔法を発見し解除した。
「だが、我らの前に出てきたとなれば、覚悟はできているのだろうな」
僕はその言葉を無視し、フフフと笑う。
「何がおかしい・・！」
烈火の将は僕の態度に目ざとく反応したようだ。
「君たちは本当に、「闇の書」を完成させることで主を助けられると思っているのかな？」
「なに・・・・？」
「そう。あなたたちのやり方であの少女が救われることはない。むしろ、そのやり方は彼女を殺す」
騎士たちの目が驚愕に見開かれる。しかし、平静を保ちながら烈火の将は言葉を投げかけてくる。
「貴様・・・・なにを知っている」
ここで全てを話すことはたやすい。だが、それで彼女たちを説得できるかというとまったくそんなことはない。強い意志を持つ騎士たちに、言葉だけでは届きはしない。
「ここでなにを言ったところで、あなたたちは僕の話を聞きはしないでしょう。だから・・・・」
僕はいったん息を吸い、騎士たちの視線を正面から受け止めて宣言する。
「あなたたちに決闘を申し込む。「夜天の書」の騎士たちよ、舞おうじゃないか。この捻れた悲劇の上で、血塗られた円舞を」

第九話A' s　騎士たちの戦い（後書き）

ついにヴォルケンリッターと関わり始めました。ここまで来るのに五万字くらいあって、なかなか長々と書いていると思う。しっかりと読める小説を目指していきます。・・・・気構えだけは。

第十話A’s　決闘　Power Balance　＜前＞

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝

シグナムはリビングのソファで一人考えていた。

昨晩、ふいに現れた少年は騎士たちのデバイスにとある無人世界の位置情報と、時間を転送すると姿を消した。無論来い、ということなのだろう。

だからこそ不自然だった。何故あの少年は「決闘」などというまどろっこしい方法をとるのだろうか。あの時、私たちはあの少年の接近にまるで気づいていなかった。彼がその気なら、主はやてを襲撃し、「闇の書」を持ち去ることも容易だったはず。それに何故一人だったのか。あの少年は管理局。部隊などいくらでも調えられたはずだ。

指定された時刻は正午。まだ二時間もある。これほど時間が用意されているのも、準備万端整えて来いという暗示だろう。あのときの私たちは戦闘の後で疲弊していた。それはあの少年も同じなのだろうが、多勢に無勢のこの状況。私たちの戦力と調えさせることにいったい何の意味がある。

昨晩は気が立っていて気がつかなかったが、一日置いて冷静になってみるとあの少年の行動は穴だらけである。少年が英雄願望の持ち主ということは、はっきり言ってないだろう。暗幕の夜空をバックに光るあのアイスブルーの目がそれを物語っている。彼は間違いなく、冷静で、冷徹だ。間違った行動など、十分に考える時間さえあれば起こしようもないだろう。

だからこそ、シグナムは決めかねていた。決闘を、受けるか否か。
主のことを考えるのなら、無論受けないべきだ。自らの突飛な行動で主を危険にさらすなど下策中の下策。それほどこの状況を罠であると仮定するのは容易かった。
だが、とシグナムはいったんその思考を切る。
あの私たちを見つめるアイスブルーの目・・・・あれが私の思考を掴んで放さない。あれは、謀略をめぐらしている目ではなかった。危険を楽しむ狂気の目でもない。あれは・・・・そう、本気の目だ。
あれほど真摯な目線など、悠久の時を生きてきたシグナムをもってして経験したことがなかった。あの目が、あの少年の言葉を切って捨てることをできないようにしていた。
そして思うのだ。私たちはなにか見落としているものがあるのではないか、と。あの少年は私たちが知らない情報を知っている。それはシグナムは真実だと思っている。そして主を真の意味で救うにはそれが必要不可欠であるのかもしれない。
決闘を受けるべきか、それとも受けざるべきか。「闇の書」の騎士、その将として、シグナムは一人悩んでいる。

「なに考えてんだ？シグナム。昨日の事か？」
髪を二本の三つ編みにした少女、ヴィータが後ろに立っていることにシグナムは気づかなかった。普段の彼女とは思えない失態である。そのことにヴィータも不安が募る。
「あぁ。不思議な目をした少年だと思ってな」
シグナムは下を向いていた目線をいったん天井に向ける。そして一息ついた。
「実はあたしも・・そのことについて考えてた。ずっと引っかかってたんだ。このまま魔力の蒐集を続けて・・それではやては幸せになれんのかって。何か問題があるわけでもねぇ・・・・でもなにかが引っかかってんだ」

ヴィータはそう言い、待機モードのデバイスを握り締めて真剣な顔でシグナムに向かい合う。
「あたしは・・受けようと思う。決闘を」
シグナムはヴィータがそう言ったことに正直驚いた。ヴィータは我らの行動方針に口出しすることは少ない。一人で突っ走ってしまうことはあっても、こうして作戦上の意見を言うことは少なかった。しかも、一歩間違えば主はやてに危害が及ぶ状況に自ら飛び込んでいくなど、普段の彼女からは思いもつかないことだった。
「理由を聞いていいか？」
「正直、感だ。あたしはあの男が伊達や酔狂であんなことを言うとは思えなかった。きっと、全てに意味があるんだ。あいつの言ったことは」
「・・・・・・・・」
おおむね、シグナムとヴィータの感じていることは一緒だった。シグナムも、あの少年を無視することができないでいる。彼の一言一言が重くのしかかってくる。
「言っとくけど、とめても無駄だぞ。あたしはもう行くって決めたからな」
そのヴィータの強い気のこもった視線に、シグナムは心のつっかえが取れた気がした。シグナムはゆっくりとソファから立ち上がる。
「私も行こう」
「いいのか？罠かもしれねぇぞ」
「その時はその時だ。それに我らは誇り高きヴォルケンリッター、決闘から逃げることなどせん」
その時リビングのドアが開き、シャマルと狼の姿をとったザフィーラが入ってきた。
「やっと決めたわね。はい、魔力をこめなおしておいたわ」
シャマルは二人に銃の弾丸のようなものを渡した。
「感謝する」
「ありがとな」

二人はそれを受けとって思い思いの礼をする。
「はやてちゃんには今日は用事があるって言っておいたわ」
「そうか。主はなんと言っていた？」
シグナムはカートリッジをポケットにしまいながら聞き返した。
「ウフフ「早く帰ってきてな？」だそうよ」
「・・そうか。では、できるだけ早く終わらせなければな」
「でも、油断は厳禁よ」
それはシグナムも承知していた。補助専門とはいえ、騎士の一人であるシャマルを一瞬の内に無力化した手際と、仮面の男と戦っていたときの剣の扱い・・只の少年というにはいささか無理がありすぎた。先の勝負では不覚を取っていたが、一対一では私はあの少年に勝てない。剣の技量は私のほうに分がありそうだが、戦況判断力と魔力は私の上を行っていた。
「分かっている」
「それと、闇の書はどうしようかしら」
「持っていく。主はやての魔力資質はほとんどこの中だ。むやみに置いておく方が危険だ。では、そろそろ行くとしよう」
騎士たちは帰るべき、暖かな家をあとにする。心を鉄に変え、打ち砕かれることのないようにと決意を新たにしながら。

一方そのころ、管理局本局ではリラクゼーションルームでリーゼロッテが右往左往していた。それをリーゼアリアがとがめる。
「いつまでうろたえてるのよ」
「でででも、澪君がアースラからいなくなっちゃったって！私あのとき結構追い込まれてたから思わず殺傷設定で思いっきり蹴っちゃったし！」

あのとき、リーゼアリアからのバインドによる支援がなければ、リーゼロッテは討ち取られ、素顔を晒されていただろう。そうなることは避けなければならない。少なくとも「闇の書」を葬り去るまでは。

「聞いた話しじゃ命に別状はなかったそうじゃない。確かに私もあのときは焦ったけど」

正直、リーゼアリアもロッテの脛が澪の脇腹を捉えたときは気が気でなかった。二人して思わず医務室に駆け込んだくらいだ。

「でも！すごい怪我なんだよ！？いなくなっちゃうなんてただ事じゃないよ！」

「書置きもあったし、それに澪君だよ？大丈夫だって。きっとそのうち帰ってくるよ」

「・・・・うん」

リーゼロッテはひとまずソファの上に腰を落ち着けて深呼吸した。

「・・・・・・つらいね、アリア」

一緒に修業してきた、家族ともいえる仲間をだまし続けること、そして敵対すること。ミオを蹴ったときの感覚が、リーゼロッテによみがえる。

「・・・・そうね」

リーゼアリアはそれに力なく答えた。

「これが終わって、これまでみたいに一緒にいられるかな」

リーゼロッテのその言葉に、リーゼアリアは答えることができなかった。難しい、ということが分かっているから。

管理局の意思を無視して動く。「闇の書」を完成に導く。封印さえ完璧に決まればまだ言い訳もできるだろうが、それでも無実というのは難しかった。それほど、ロストロギアの関わる事件は繊細なのだ。たった一つの間違いで世界が滅びるのだから。

そして二人の間に重苦しい沈黙が停滞する。どちらも、その沈黙を打ち破ることはできなかった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝

――とある無人世界。

魔力を隠蔽する結界の敷設を完了した。周囲には石と砂しかない、礫砂漠だ。ここで魔法を連発しても何も失うものがないからこそ、僕はここを決闘の場として選んだ。

本局からもアースラの駐留空域からもずいぶんとはなれているし、感づかれることはないと思うが、念には念をだ。

≪マスター≫

そしてアイリスが接近する魔力反応を察知、決戦の時は近い。

＊＊＊＊＊

騎士甲冑を纏った「夜天の書」の守護騎士たちがゆっくりと地に降りてきた。時間は正午ジャスト、手には起動済みのデバイスを持ち、その表情は厳しい。

「やはり来たね。待ったたよ」

そう、彼女たちは来るしかない。騎士の矜持と、主の身の安全の為に。

僕はデバイスを槍の状態で起動し、向かい合う。烈火の将が苦々

しいといった顔をし、口を開いた。
「本来なら一対多は主義に反するのだが・・・・今回は主の安否がかかっている。卑怯ととってもかまわんが、引く気はないぞ」
「そう、かまわないよ。初めからそうするつもりだったし。まずは名乗りを上げさせてもらう。僕は管理局本局無限書庫管理責任者、茜火澪」
その名乗りに騎士たちは怪訝な顔を浮かべる。
「無限書庫管理責任者・・・・だと？」
「えぇ。僕は本来前線に出るべき役職じゃない。でも、今回唯一君たちを抑えられる人材だと自負している。それで、今度は君たちの番なのだけど」
「・・・・失礼した。私は烈火の将、シグナム」
「・・・・・・鉄槌の騎士、ヴィータ・・」
「盾の守護獣、ザフィーラ」
「湖の騎士、シャマル」
騎士たちはそれぞれ、思い思いに名乗りを上げる。
「決闘の前に、一つ聞かせてもらう。お前は何を知っている？」
未だ構えをとらない僕を睨みつけて、シグナムが言った。
「それは昨日も言った。ここでそれを聞いて、君たちはなにか変わるのか？いや、なにも変わらない。僕の覚悟をもろとも打ち砕いて奪え。少なくとも僕が本気であることを証明しなければ、君たちは納得しないだろう。知りたい情報は全てデバイスの中だ。僕が死んだとしても彼女から聞き出せばいい」
「っ！」
「これは・・僕にとっては一対多など最初から理解の内にある決闘だ。それで死んでも文句は言わない。憂う必要もない」
僕はアイリスを目の前にかざす。
「結界、起動」
その言葉と共に、敷設していた魔力隠蔽の結界が辺りを包む。騎士たちは驚いて周囲を見わたしている。

「なっ！！！てめぇ！！！」
ヴィータはいつもの強制隔離結界だと思ったのだろう、僕に向かって叫んだ。
「安心するといい。これはただ魔力反応を誤魔化すだけの結界だ。僕はともかくあなたたちは管理局に見つかると面倒でしょう？餞別だよ」
とは言うものの、実は僕のためのものでもある。管理局に乱入されるわけにはいかないのだ。今回の決闘は僕の決意を見せる場であり、邪魔をされると非常に困る。
そして僕はアイリスを旋回させて構えた。
≪しっかりな。マスター≫
「さて、時間は有限だ。そろそろ始めようか」
空気が張り詰め、風の音がいっそう大きく聞こえてくるようだ。巻き上げられた砂が僕と騎士たちの間を流れ、沈黙を強調している。

「はっ！！！」
「はあっ！」
「でぇぇぇい！！！」
僕と騎士たちは同時に地を蹴った。シグナムとヴィータが最も早く僕に接近し、そのあとにザフィーラが続く。シャマルは後ろに飛んで距離をとったようだ。
「レヴァンティン」
≪ｊａ≫
まず最初に、シグナムの剣が炎を纏って襲い掛かる。僕はアイリスで受け、槌を振り上げるヴィータに回し蹴りを放つ。
「グッ！」
人外の脚力を持つ僕の蹴りを、ヴィータはデバイスで受けた。補助魔法各種がかけられているとはいえ、溜まらず後ずさる。
そしてシグナムからの切り返しの胴とザフィーラの拳の両方が迫

る。
≪ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ≫
移動魔法を起動、バックして距離をとる。そして同時に魔弾＜スプレンダー・バレット＞を撃ち出した。騎士たちは追撃をあきらめ、後ずさる。そして再びにらみ合いに。
「・・・・強いな。澪とやら」
シグナムが地をジャリッと踏みつけ、言う。
「そちらも。純粋な技量じゃ敵わないな」
「・・・・フ、謙遜するな。お前の武器の扱いもみごとなものだ。だが・・」
そう、彼女には分かったはずだ。一対四では僕に勝ち目のないことが。
「それ以上は言わなくてもいい・・僕はやるだけやる。それだけだ・・・・アイリス！」
僕は後ろに跳び、弾幕を張る。
「チッ！距離をとっての砲撃戦に切り替えやがった！」
なのはのような超長距離砲撃魔法は僕のデバイスには組み込まれていない。それなりの距離でも砲撃はできるが、近接戦闘を補助する近～中距離砲撃が基本である。それに相手が四人もいる上、名乗りをあげての決闘で狙撃もクソもない。補助専門のシャマルがいる以上、させてはくれないだろう。しっかりと対処されているようだし、このまま距離をとって砲撃を続けても魔力が減るだけだ。
だから、今のヴィータの言葉は正しくない。本当の目的は一対一の状況を作り出すこと。
ザフィーラとシグナムに弾数を集中させ、ヴィータに迫り、斬りかかる。
「ディバイン・ブレード！」
「チッ！あたし狙いか！！？アイゼン！テートリヒ・シュラーク！」
青い魔力を纏った白刃と銀の鎚がぶつかり、火花を散らす。

「ガァッ！！！」

魔力でも、身体能力でも純粋なパワーではここにいる者の中で僕に敵う者はいない。正面からぶつかり合ったヴィータは後方に吹き飛ばされていった。

そして、不意に僕の顔に影がかかった。左からザフィーラが、後ろからはシグナムが攻撃を仕掛けてくる。

それに対し、アイリスを振り回し両方を振り払おうとする。シグナムは剣で受けたようだが、ザフィーラは腰を落としてかわしたようだ。剣にぶつかって止まっている槍の間をぬって拳が迫る。僕はかわすことができないことを悟った。

右わき腹、急所の一つに向けて放たれたそれだったが、僕は槍から左手を離し体を回転させ、基本的な防御魔法、ラウンドシールドでザフィーラの拳を受けた。しかし力は上でも体格に劣る僕は吹き飛ばされる。

地面を削りながらかなりの距離を滑り、崖下に強かに身体を打ち付けた。ガラガラと、崩れた岩が降ってくる。まぁ、この程度じゃどうにもならないけど。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

心苦しい。それがこの決闘が始まってからのシグナムの心持ちだ。前回の戦いでもそうだった。あの金髪の魔導師、フェイトといったか。今、戦っている少年、澪も彼女と同じくらいの年なのだろう。その少年がザフィーラの拳を受け、地面を削りながら吹き飛んでいく様は心が凍える。自分を戒めたくなるのだ。だが、主の命の危機を前にそんな余裕はない。

今は倒すべき敵にもかかわらず、少年は無事だろうかと考えてしまう。ザフィーラの拳はカードしたようだが、崩れた大岩に埋まってしまった。彼ほどの魔導師ならば、戦闘不能ということはないだろう。しかし、いつかは生涯に響く怪我を負わせてしまうかもしれない。

そこまで考えて、シグナムはかぶりを振った。こんなことを考えていてはいけない。今はただ、勝利するのみ。

一方ヴィータは焦っていた。何だ、あの身体に宿ったパワーは、規格外にもほどがある。澪と名乗った少年の腕はかなり細い。同年代の男子と比べても細めだ。しかし、鍔ぜり合った時の圧倒的重圧、あれはだめだ。

鉄鎚の騎士としては恥ずかしいが、単純なぶつかりあいでは勝てる気がしねぇ、そう思った。

そしてザフィーラは澪の反応の速さに驚いていた。たとえ相手がベルカの騎士だったとしても、完全に決まるタイミングだった、さっきの一撃は。だが、少年はさも当然のように対処して見せた。技量はまだ粗さが残るが、単純な戦闘力ではここにいる誰よりも上。それを実感する。

その時、シャマルの声が荒涼とした砂漠に響く。

「魔力反応増大！気をつけて！」

少年の上に積もった瓦礫が爆発する。仰向けに倒れたまま、拳を天に突き上げている。　そしてそのままゆっくりと起き上がる。その姿は人間ではないようだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「くらえ！鋼の軛！」
起き上った僕が聞いたのは渋い男の声。その声とともに、地面から白い棘が出現する。
アイリスの腹で棘を受け流し、相手の状況を覗う。ヴィータのデバイスから四角錐の棘とバーニアが生えている。
あれはなのはの魔力が蒐集された戦闘で見せた魔法だ。少しまずい。相手も本気になったということだろうが、このまま攻められたら対処できない。ザフィーラの魔法で移動範囲が狭められているし・・・・難しいな。

アイリスを両籠手型に変えて避けられるものは避け、そうでないものは受け流してダメージを回避する。上空に逃れようと試みるが、絶妙に角度を付けられた棘がそれを阻害している。
身体を捻り、回転させ、すんでのところで棘を回避する。一体一回の魔法にどれだけの魔力をつぎ込んでいるのだろうか。それだけ、この一回のチャンスにかける必死さが伝わってくる。

なんとか棘の魔法の効果範囲から抜け出ると、脳天目がけて先がピックのように尖ったハンマーが振り下ろされた。
「ラケーテン、ハンマー！！！」
「ぐ・・イージス・プロテクション！」
棘の回避に専念し、体制の崩れていた僕は万全の状態でそれを受けることができない。一応、持っている最大の防御魔法を使用するが、踏ん張りがきかずに吹き飛ばされた。
ごろごろと地面を転がりながらも、いち早く体制を立て直し立ち上がる。急いで周囲の状況を確認すると、シグナムがこちらに弓となったデバイスを向けていた。
これまでにない量の魔力が収束していくのが分かる。炎が矢の先

にまとわりついている。
「翔けよ隼！」
≪Ｓｔｕｒｍｆａｌｋｅｎ≫
そして一瞬の閃光とともに矢が放たれる。光の向こうからまさに雷光といえる速度、瞬きを一回でもすれば見逃してしまいそうな速度で鋭利な矢先が僕を貫こうと飛んでくる。しっかりと空間に身体を固定し、イージス・プロテクションに魔力を注ぐ。

――――ドオォォォォン！！！！！

プロテクション越しにすさまじい衝撃が身体を貫く。ぶつかった矢は炎を周囲に撒き散らし、少しずつプロテクションにくい込んでくる。そしてバキャンという音とともにプロテクションはバラバラになり、矢は僕の脇腹に命中する。
威力が削がれているため、バリアジャケットを貫いてくるということはないが、それでもかなりの衝撃が僕を襲い、三度、吹き飛ばされる。
「轟天爆砕！ギガントシュラーク！！！」
そしてなんとか踏みとどまった僕に、大きな影がかかった。天を見上げると、そこには巨大なハンマー。まるでビルが降ってくるような感覚におそわれた。
「アイリス！ソード・フォーム！ディバインブレード！」
カートリッジをロードし、ハンマーの打点にアイリスを全力で打ち付けその衝撃によって身体を動かし、なんとか直撃を回避しようとする。
その策は功を奏し、ハンマーに強かに身を打ちつけながらも後ろに吹き飛ばされ、地面と挟まれてペシャンコにされることだけはまぬがれた。
キリモミ回転とともに何度も地面に身体を打ち付け、鎮座してい

る岩を幾たびも砕き、力なく止まった。
特に激しくハンマーでたたかれた左腕はグシャグシャだ。間違いなく殺傷設定による一撃。だがそれに毒つくことはない。逆にうれしかった。彼女らが僕を生死をかけた決闘の相手として見ていることに。僕の覚悟を受け止めてくれていることに。

＝＝＝

「終わったか・・・・」
先ほどのシュツルムファルケンもギガントシュラークも・・いや、決闘が始まってからの全ての攻撃が殺傷設定による全力だ。バリアジャケットの上からとはいえファルケンを受け、そのあとはギガントシュラークに叩き潰されている。シグナムは少年が生きているとは思えなかった。
「いや、分からねぇ」
ヴィータはそう言ったが、デバイスを持つ手が震えている。少年を殺したことに対する罪の意識が、ヴィータの目じりに涙をため、全身から力を奪っている。確かにあの少年は地面と板挟みにされることは回避したようだが、直撃だ。死んでいるであろうことは彼女も分かっているようだった。
いやそもそも、「分からねぇ」というのは勝負が決まったか分からないということではないのかもしれない。何故、こんなことになったのか、それはシグナム自身が問いたいことだったから。
それ以後は全員会話がない。苦々しい・・という共通の感情が全員に流れていることをシグナムは感じていた。
だが、これから自分は少年の死体を確認し、可能ならそのデバイスから情報を得なければならない。だが、しばらくはこの場から足

が進みそうになかった。
その時だ。荒涼とした砂漠に・・どこか潤ったような笑い声が響いたのは

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

勝った！そう思った。

騎士たちの実力が今までの全てなら、この勝負は勝った。確かに技量はあちらが上、加えて数の上でもあちらに分がある。僕は戦況判断能力で負けないように立ちまわっているにすぎなかった。
しかしだ。それは今までの話。僕にはこの戦力差を覆す能力がある。
勝てる！そう思うと、やけに心が躍動し、肺から空気が漏れだしてくる。全身の痛みも忘れて僕は笑っていた。
「フフ・・フフフ、ククク・・・・アーハッハッハッハッハッハ！！！」
嬉しい。相手が掛け値なしの全力で決闘してくれることも、それを打ち破ることができることも。

左手が使えないので右手にもったアイリスをつっかえにして立ち上がる。騎士たちの驚愕に染まった顔が、かなりの距離を離れたここからでも見てとれた。僕はゆっくりと歩いて騎士たちに近寄って行く。
お互いの顔がはっきりと分かる距離にまで近寄って、僕は宣言した。
「この勝負、僕の勝ちだ」

――――形成。

黒い剣が手もとに現れるとともに、アイリスはディフェンスモードに切り替わる。白銀の籠手に包まれた右手に、黒い剣がおさまっている。

一方、騎士たちは僕の言葉に目を丸く見開く。だがしばらくして混乱が収まったのか、シグナムが口を開いた。

「お前は・・まだ私たちに勝てると思っているのか？」

「勝てる？そうだね、勝てるんだ。」

「何故・・そう思う・・・・お前は深く傷つき、その左手は使い物になるまい。今なら情報を置いて去るのなら見逃すが・・・・」

まぁ、ここで去っても僕の思い通りいくかもしれない。だがそれは絶対ではない。

「なぜ、引き下がる必要がある。この勝負に僕は勝利を見出して・・」

「もうやめてくれ！！！」

僕の言葉を遮ってヴィータが叫んだ。デバイスを持つ手が震えている。

「おめぇはもう十分頑張ったじゃねぇか・・それ以上傷つくことなんてねぇよ」

彼女は泣きそうな声で僕に訴えかける。

「・・・・どうも、お互いの認識に齟齬があるようだね」

「なに・・・・？」

その言葉をシグナムはいぶかしんで、驚愕に歪んでいた顔を冷静な表情に戻して僕の顔を覗う。

「この黒い剣、ハッタリだと思うかい？それとも、戦闘不能であるはずの僕が起き上がってきたことに驚愕して冷静でなくなっているのかな？だがその認識は改めた方がいい。僕はこれから長い間隠してきた手札を切るのだから」

僕は黒い剣を騎士たちに突きつけると、そのまま動かない左手を切り落とした。
「「「「「なっ！！！」」」」」
「アイリス、止血を頼む」
≪了解マスター。だが、後でちゃんと処置をしろよ≫
すぐに出血は止まり、断裂面は再生しようと蠢いている。僕の再生力が中途半端な弊害だ。
「私の手から零れ落ちた砂が湖の中に落ち、天の天秤が少しながら傾いた。私は湖の底から砂を掬い、一回、また一回ともう片方の湖にのみ砂を沈めていく。この天秤が世界ごと崩れればいい。私はこの世界に何の幸福も感じていないのだ。ゆえに私は砂を掬い、世界を壊す」
僕の独白、望みの形、それが砂漠の砂に、この世界に吸い込まれ、そして満ちていく。
「創造・・」
そして世界に暗い帳が下りた。

第十話A，s 決闘 Power Balance <前>（後書き）

創造位階の詠唱は僕が勝手に決めてます。神話、小説の一文ではありません。僕はそういう知識に明るくないので。

第十一話A，s　決闘　Power　Balance　<後>

＝＝＝

は先ほどと同等、いや追い込まれてからはそれ以上に力を込めている。なのに、少年の剣を受け流すので手いっぱいだ。

黒い剣が袈裟斬りで向かってくる。本来なら大したことのない一撃、しかしシグナムは自ら隙をつくることを承知で大げさに受け流す。デバイスと黒い剣がぶつかった瞬間、デバイスごと叩き斬られそうな衝撃が彼女を襲う。

自分が冷静な判断を失い始めていることをシグナムは感じた。

＝＝＝

僕の渇望、それは破滅。だがそれは自分の手によってなされなければ意味がない。悪辣に、一方的に全てを蹂躙したい。その欲望から生まれた能力。

「僕の攻撃力、守備力を両方１０として、君たちの能力はどちらも９というところだろう。３人で囲まれたらどうしようもない。だが、それを覆せるとしたら？」

「なに・・？」

「僕は今言った二つのパラメーターのうち、「攻撃力」を操っている。そうだね、１．５といったところか。君たち四人を効果範囲に入れて効果は分散しているけど、大体そんな感じだ」

「なにを・・言っている？」

「まだ気がつかないのかな。攻撃力の削減率、そして増大率だ。つまり君たちの攻撃力・・いやこの場合「干渉力」と言いかえた方がいいか。「干渉力」は１／１．５、つまり三分の二に削減され、僕の「干渉力」は１．５倍になっている」

「何だと！！？」

「つまり、数字で見ると僕の攻撃力は１５、防御力は１０。君たちの攻撃力は６、防御力は９となっているわけだ。ここまで数字が離れれば、数の有利などどうとでも逆転できる。それに・・・・」

僕は首の裏に剣をまわす。ガキン！という音とともに何かが剣に当たった。

「っ！！！」

補助魔法で気配を隠蔽したシャマルが背後でデバイスによる一撃を放っていたのだ。だが、指輪から伸びたクリスタルのような物体は剣に阻まれ止まっている。

創造位階に上がった僕に奇襲は無効だ。対象の干渉力を操るということは、まず対象を把握するという前提が必要だ。その位置、魔力、腕力に至るまで、完全に把握する能力がこの創造にはある。

加えて、効果範囲は膨大だ。逃れることも難しい。広域封鎖結界と併用すれば逃走も封じることができる。

≪Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ≫
僕は一瞬でシャマルの裏にまわり、昨日と同様に後頭部を打つ。シャマルの意識が落ち、身体からぐったりと力が抜ける。倒れる彼女を支え、ゆっくりと地面に横たえた。
「これで一人」
そう言ってシグナムたちに向き直る。彼女たちは目を丸くしていた。

「アイリス。解放するけど、大丈夫だよね」
≪当然だ！マスターの設計に狂いなどない！≫
「じゃあ、いくよ」
手に持った黒い剣の刀身に奔る六つの円が輝き、僕の魔力色、アイスブルーの煌めきが漏れだす。剣には創造位階の能力とは別に魔力放出能力がある。銃が銃弾を撃つのと同じような感覚だ。
「来るぞ！ヴィータ！ザフィーラ！」
「おうっ！！！」
「ぬぅ・・・・」
シグナムたちは身を固くしてデバイスを構えた。剣から放出された魔力は周囲の砂を巻き上げる。僕は剣を顔の横に構えた。
そして一閃。アイスブルーの斬撃がシグナムたちに向かっていく。間一髪、彼女たちは避ける。創造によって干渉力を上げられた閃光が地面を大きくえぐる。続いて一人違う方向に飛んだザフィーラにもう一閃。今度はザフィーラをとらえた。バリアを張ったようだが、閃光はそれを易々と砕き、彼を吹き飛ばす。
「ソニック・ムーブ！」
ザフィーラからすれば、瞬きのうちに僕が目の前に現れたように見えたかもしれない。すれ違いざまに目を見開く彼の鳩尾に膝を入れ、身体が折曲がり後頭部を晒した彼のうなじを剣の柄の先で強打した。そして力を失った彼の上着を掴み、残った二人を見下ろす。
二人は、茫然自失とした目線を向けてくる。僕はその二人に向か

っザフィーラを投げた。シグナムはデバイスをいったん手から離し、ザフィーラを受け止める。そして地面に下ろした。
そして再びデバイスをとったシグナム、そしてヴィータの前に僕は降り立つ。
「ほらね。僕の勝ちだ」
両手両足に力の入っていない彼女たちの前でそう宣言する。僕は彼女たちより圧倒的に強い。その僕という存在を前に、彼女たちはどうしていいか分からないようだった。
剣を振り上げる。その時になっても彼女たちに動きは何一つない。額からは汗が流れ、デバイスを握る手は震えていた。

＝＝＝

ヴィータは本能的な恐怖を感じていた。それは戦いの中に身を置く者特有の知覚といっていい感覚だ。非殺傷という便利なものがあるとはいえ、無血の勝利を続けてきたわけじゃない。どうしようもなくて殺した相手もいたし、二次災害に巻き込まれたものもかなりいたことだろう。彼女にとって、死とは遠くにあるものではなかった。だからこそ、ヴィータを含め守護騎士たちには動物の本能的恐怖が備わっていた。

それがヴィータの足を止め、ガタガタとデバイスを握る手を震わせる。シグナムが吹き飛ばされていっても、ヴィータはその隙をついて攻め込むことができなかった。それどころか、じりじりと後ずさっている。

澪と名乗った少年が剣を振った格好から直立に戻り、だらりと剣を垂らしてヴィータの方を向いた。逃げることすら考えられない。心臓を直接掴まれたような感覚がヴィータを襲う。

剣を振り下ろすことなく、少年はどんどんヴィータに近寄って行く。来るな！ヴィータはそう思う。だが、池の鯉のようにパクパクと口が動くだけで声が出ない。足がガクガクト揺れ、力が抜けていく。やめてくれ、その剣を近づけないでくれ！

澪とヴィータの距離はもう五十センチもない。ヴィータはついにデバイスを取り落とした。

やめろやめろやめろや

ているのか、それすらも分からない。
ただ、その中で澪の目と視線が合う。剣にまとわりつく魔力と同じアイスブルーの輝き。しかし最初とは違い、その目は尋常でなく冷たかった。破壊、破滅、消去、そんなものしか籠っていないように感じた。
ヴィータは股間が暖かくなったような感覚を感じ、意識を失った。

＝＝＝

ウマから抜け出れていないのだろう。その特性とは関係なく心が冷える。
どうにもならないもの、それが過去なんだと、雲ひとつない砂漠の中心でしみじみと感じた。

その一時間後、日本時間で二時半くらいにシグナムが目を覚ました。続いてシャマルとザフィーラも目を覚ます。
「う・・・・私は・・負けたのか？」
「ごめんなさい。ちゃんとサポートできなかったわ」
「いや、シャマル。お前のせいではない」
「起きたね」
ガシッと僕をつかんで離さないヴィータを抱え、僕はシグナム達に近づいた。
「悪いけど、拘束させてもらってるよ。ヴィータは・・・・なんか離してくれなくてね。まだ気絶してるから静かにね」
シャマルが僕の腕の中で震え続けるヴィータを見て「や～ん！ヴィータちゃんカワイイ～！」とか言っているが、それでいいのかヴォルケンリッター。
「彼女には創造位階の殺気が堪えたみたいだ」
「あれは私でも堪えたぞ」
シグナムはこちらをジト目で見て言う。
「あれは何だったのだ」
僕は「破滅の聖剣」を出現させる。それにシグナムたちは怯むが、構わず続ける。
「この剣の能力は「干渉力」を操ることだといったけど、それだけならあんな殺気が漏れだすことはない。この剣の真の能力は、所有者が真に望むことを世界に押しつけること。もっとも、あまりに

突飛すぎることは人の頭が考えられないから無理だけど」
もっと詳しく言うと、エイヴィヒカイト「魔人錬成」の能力なのだけど、それは今はいいか。無駄に難しくなるし。
「この剣は僕と直接融合していて、僕の望みを吸っている。そして僕の望みは・・・・破壊だよ。だから発動すると破滅の意思が世界を支配してしまう。君たちはそれを感じたんだと思うよ。まぁ、ロストロギアという感覚で見てくれればいい」
僕の説明に、シグナムたちは理解が追い付いていないようだ。まぁ、望みを叶えるロストロギアとか・・・・あ、ジュエルシードがあったか。でもそれを抜きにしてもかなり珍しいものだからな。しかもジュエルシードと違って望みを明確に能力に反映してくれる。
「それはいったん置いておいて、僕がこの決闘に臨んだ理由。そしてこうして勝って得るもの、それを聞いてくれるかな」
シグナムたちは真剣な顔になって頷いた。
「私たちは決闘で負けたのだ。それくらいはわきまえているさ。だが、主を傷つけるようなら命に代えても阻止して見せる」
「あぁ、そういうことはないから安心していいよ。まずは、これを見てもらおうか」
僕は「破滅の聖剣」をしまい、アイリスを彼女たちの前に突き出した。

第十一話A，ｓ　決闘　Ｐｏｗｅｒ　Ｂａｌａｎｃｅ　＜後＞（後書き）

聖遺物の説明が半分ほどオリ設定になってしまった。
そして創造位階・・・・強くしすぎた？

ちなみに主人公の聖遺物の天敵は第七位のマキナ卿。完全破壊の前では「干渉力」の削減が意味をなさないから。

スペルミスしていました。×Ｓａｎｃｔｕａｌｌｙ　○Ｓａｎｃｔｕａｒｙ

主人公紹介（前書き）

主人公の能力がとりあえず出そろったので紹介を。

主人公紹介

名前：茜火（あかねび）　澪（みお）

容姿

長い紺の髪にアイスブルーの瞳。つまりメルクリウスとか蓮と同じような容姿。ただしメルクリウス＝うすら笑い、蓮＝熱血と違って澪は無表情。イメージはかなり異なっている。一人称は二人との差別化の為に「僕」

魔力ランク：Ｓ（Ａ'ｓ開始時。まだ増大中）

デバイス：アイリス

１ｓｔ　ｍｏｄｅ／Ｓｌａｓｈ　ｍｏｄｅ

ｓｗｏｒｄ　ｆｏｒｍ：剣型

ｌａｎｄｅ　ｆｏｒｍ：槍型

２ｎｄ　ｍｏｄｅ／Ｄｅｆｆｅｎｃｅ　ｍｏｄｅ：両籠手型

魔法（オリジナル）

※ディバイン・ブレード

魔力でデバイスを包んで斬撃の威力を上げる魔法。結界破壊能力あり。簡易的に防御にも使用できる。βバージョンとして魔力でできた剣を作るものもある。

※スプレンダー・バレット

防御魔法に負荷をかける効果をもった銃弾程度の大きさの魔力弾を何百と放つ魔法。誘導能力なし。

※ディストラクト・ストリーム

螺旋を描いて直進する砲撃魔法。近～中距離専用直射魔法。
※プルート・ディペンデンス（現在未登場）
前方にいくつもの魔力爆発を起こす魔法。近～遠距離用の直線広域殲滅魔法。
※イージス・プロテクション
費用対効果がいいシールド系防御魔法。

聖遺物：破滅の聖剣（武装具現型）
剣、鞘、飾り帯からなる聖遺物。剣には魔力放出（直射型）、鞘には結界、飾り帯には拘束能力がある。

創造位階「Ｓａｎｃｔｕａｒｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｅｘｃａｌｉｂｅｒ」
効果範囲内の魔力を持った生物の「干渉力」を操る。
効果範囲内に複数の対象がいると効果が分散してしまう。
魔力の多い者には効きが甘い。
効果は平均化される。
つまり、魔力の高い者を多く取り込んでしまうと意味を失くしてしまう。
副産物として効果範囲内の力の大きさ、向き、位置を把握することができる。

流出位階は未収得。

特別編（前書き）

あれこれ考えて、この後の展開も決まっていない当小説ですが、
これ終わったあとどうなるんだろう？ということで考えてみました。

特別編

茜火澪は悠久の時を生きた。彼を知っている者はいなくなり、管理局の歴史にその名が載る程度だ。その長い時は彼に世界を壊す力を与えた。

彼はその力で世界を渡る。彼を信じる騎士たちと・・・・

＊＊＊

黒い剣を持ったサーヴァント、澪は小声でイリヤに話しかけた。
「（うん。キリツグが私のこと大切に思ってたのは澪のおかげで分かったけど、楽しみにしてたのよ、弟と会うの。ちょうどいい機会だわ、聖杯は壊すけど、その前に戦いたいの。澪の力なら殺さずに勝利できるでしょう？）」
「（しょうがないな。無意味な戦闘だが、イリヤが満足できるならそれもいいだろう）」
澪はイリヤの前に進み出て凛、そして士朗と対峙する。すぐにセイバーとアーチャーが前に出てくる。
「僕はライブラリアン（司書）のサーヴァント。マスターの望みだ。お前たちはここで退場願う」
「そちらこそ。私は何者にも負けない」
「笑わせるな。こちらには二人のサーヴァントがいるのだぞ？たった一人でどうするつもりだ」
凛は司書のサーヴァント？楽勝じゃない！と考える。士朗は状況の変化についていけない。
「まぁ、口上じゃ実力は分からない。いくよ！」
澪は地を蹴る。地面がボコン！という音を立ててへこむ。
澪は視認さえ難しい速度でセイバーに接近した。そのまま袈裟に剣を振り下ろす。
アーチャーは自分の戦いをするためその場にはもういない。
雷鳴のごとき速度で放たれた剣だったが、セイバーは当然のように反応し、それを受け止める。だが・・・・
スガン！という爆弾でも爆発したような音とともに、セイバーの全身をにとてつもない衝撃が襲う。超重の衝撃に剣を受けたセイバーの足元がすり鉢状に陥没する。
そしてセイバーは受け止めた剣を見て目を丸くした。
「なっ！！！その剣は！！！！！」
「ほう・・・・分かるのか。そう。これは君と同じ聖剣だ。分かるよ。どんなに隠されていようと、僕の目には黄金に輝く剣が見え

る」
「同じだと！？馬鹿にするのも大概にするべきです。私の剣はそんなに醜くはない」
「・・・・・・言ったな？では受けろ！この剣の洗礼を！」
澪の手の黒い剣、その刀身に奔る幾何学模様が変化し、六つの目のようになる。そして圧倒的な魔力が漏れ出した。

※対抗　ＢＬＥＡＣＨ：剣（刀）つながりで

「双極、その矛が罪人を貫くとき、その罪は贖われる」
双極は鳳凰に姿を変え、磔にされたルキアを見る。そして、燃やしつくそうと襲いかかった。その時・・・・

――――ガキン！

何者かがそれを遮った。死白装の左腕には十三番隊の副官章。
「茜火副隊長っ！！！」
磔になっているルキアが叫ぶ。
「おぉ、流石は双極。アイリスを震わせるとは」
そして澪は一つの例圧が迫ってくるのを感じた。
「ちょっと遅かったな、一護。おかげで僕が出ることになってしまったよ」
「何だてめぇは」
「そんなことはいい。今は・・・・」
双極は再び距離をとる。もう一度突っ込んでこようとしているのだ。
「どいてください！いくら貴方でも双極は！！！」

「もう黙ってろよ、ルキア。僕はもう反逆者だ。今更どれだけ十三隊を裏切ろうと何も変わらない」
澪は双極に向けてアイリスを構え、ディバイン・ブレードを起動させる。

その時、双極の首に帯が巻きついた。浮竹と享楽が双極を壊そうと動き出したのだ。
破壊される双極。それを見た澪は磔にされたルキアの横に舞い降りる。
「な、何をする気です！それは・・・・」
「黙ってろって言ったろ。僕に一護に、そのほかにも多くの人が動いている。ルキアはそのまま救われていればいいんだよ」
澪はアイスブルーの輝きを放つアイリスを振り下ろした。
破壊される双極のたっか。
「さて、一護」
唖然とする一護に澪は話しかける。
「君には戦うべき相手がいるだろう？朽木隊長は任せた。僕には僕の・・相手がいるからね。そして・・・・」
「恋次！受け取れ！」
澪は双極の丘に現れた恋次にルキアを投げ渡した。ものすごい勢いで地面に突っ込んでいくルキア。それを恋次は間一髪受け止めた。
「な、何をするのですか！茜火副隊長！！！」
「そうだ！落としたらどうすんだ！！！」
「さっさと連れて行け！お姫様を連れ去る役をくれてやるんだ！しっかり守れよ！」
その言葉を受け取った恋次は身をひるがえして走り出す。
それを副隊長たちが追ったが、それには一護が反応して対処した。
そして一護と朽木隊長の戦いが始まった。
「さて・・・・僕は」

澪はリィンフォースとヴィータにできるだけ死人を出さないように対処を命じると浮竹隊長と享楽隊長を追った。
追いつくと斬魂刀を開放し、山本総隊長と向かい合う二人を見つけた。澪は二人の後ろに降り立つ。
「浮竹隊長には総隊長の相手は難しいでしょう。僕に任せてください。享楽隊長も、浮竹隊長とともにルキアを追ってください」
「茜火君！？いきなり何を！！？」
「いいですから、僕の言うとおりにしてください。双魚の理では流刀若火と戦うのは難しいでしょう？」
「だが！」
浮竹の方を享楽が掴む。
「浮竹ぇ！澪君の言うとおりにしようじゃないの。彼は伊達やすいきょうでこんなこと言う子じゃないでしょ」
「享楽！」
「連れて行ってください」
澪のその言葉を聞いて、享楽は浮竹をつかんでその場を去った。
澪は総隊長と向かい合う。
「副隊長ごときが、いい気になるでないぞ」
山本総隊長からとてつもない殺気が漏れ出す。
「別にいい気になんてなっていませんよ。適材適所、基本でしょう？」
「何じゃと？」
山本総隊長はうっすらと目を開く。
「形成――――」
アイリスは篭手になり、澪の手には黒い剣が現れる。
「消せ、Ｅｘｃａｌｉｂｅｒ」（↑こんな口上をする必要はまったくない）
黒い剣からアイスブルーの霊圧が迸る。澪は山本総隊長に切りかかった。

※穴馬　涼宮ハルヒの憂鬱：魔砲使いがいないから

とてつもなく、あぁまったくもって遺憾だが、ハルヒがまたもや不審な団員を引っ張ってきやがった。一人は紺色の髪に水色の瞳、もう一人は銀髪ってありえねーだろ！と、俺はそいつらを見て心の中で突っ込んだ。

顔は・・ムカつくほどにいい。古泉みたいな優等生タイプじゃないが、むしろ古泉以上にかっこよすぎだ。女生徒は男の方につき従っている感じで、そちらもまた信じられないくらいに美人だ。どうなってんだ？この集まりは。俺以外全員美男美女じゃねぇか。

まぁ、そんなことは今はいい。問題なのはこいつらが何者かということだ。宇宙人に未来人に超能力者、ハルヒ・・・・こんどは＜何＞を引っ張ってきやがったんだ？また呼出くらうのかよチクショー。

もういい。こうなったら聞かれる前に聞いてやる！俺は帰っていく二人に声をかけた。

「おい。お前たちも俺に話があるんじゃないか？」

「・・・・別にないけど」

「は？」

空気が凍りついた。

待て、俺。よく考えろ。ハルヒが連れてきた＝変人というのはあまりにもこいつらに失礼だったんじゃないか？俺も一般人。こいつらだって単にハルヒに目を付けられただけで宇宙人未来人超能力者その他もろもろの仲間だということには直結しないのかもしれないし、そうであればいいな！

「あ、もしかしてＳＯＳ団にいる宇宙人未来人超能力者の皆のこ

とかな。僕には既にコンタクトをとってきたし、君にもあったようだね。まぁ、僕が何者なのかというのはだれも把握してなかったようだけど・・・・そうだね。物事の中核にいる君には話した方がいいかもね」
墓穴掘った！聞かなきゃよかった！こんはどんな荒唐無稽が飛び出てくるんだ？
新入団員、茜火澪は俺の前で胸元のシルバーアクセサリーをいじっている。

「強制隔離結界」

その言葉とともに、周囲がアイスブルーの煌きに包まれ、人が一人もいなくなった。前に見た閉鎖空間というのに似ていなくもない。
「僕は魔法使いだよ」
魔法使い？魔法使いってあの魔法使いか？とんでもないファンタジーが降臨しやがった。
「ただ、僕は涼宮さんとは一切の関係がない。ＳＯＳ団に入った以上そうも言っていられないかもしれないけど、他の団員が言うように進化の可能性とか、時空振とか神だとか言うつもりはない」
「つまりお前は、あいつらとは違って自分からハルヒにかかわろうとは思っていないと？」
「あぁ。僕らは戦い続けてきたから、ここらへんで一度平和なひとときというのを過ごしてみようかと考えていたわけだけど・・・・見事に厄介事に巻き込まれたね」
それには俺も心底同情する。
「じゃあ、僕のできることについて見てもらおうかな」
茜火はそう言ってシルバーアクセサリーを紐から外した。
「起動」
≪お？ついにやるのか？≫
何か声が聞こえた。めちゃくちゃに不安である。

「あぁ」
茜火の手にはいつの間には白銀の剣が握られている。そしてそれは水色の光を放ち始めた。
「ディストラクト・ストリーム！」
茜火は適当な方向に剣を突き出した。横向きの竜巻のようなものが放たれ、直線状の民家を粉々にした。めちゃくちゃだ。絶対死人が出た。何だかおれも慣れてきたな。
「あぁ、今ここには誰もいないから大丈夫だよ。超能力者もこの空間には侵入できない」
茜火は飛び回りながらビームを放って、余裕そうな表情で街を瓦礫にかえていく。ちょっとは自嘲しろーー！！！！

そして完全に瓦礫のみとなった街の中、茜火が指をパチンと鳴らすと、先ほどまでの破壊が嘘のように、元の町に戻っていた。そして茜火が俺に近づいてくる。
「僕にできることはだいたいが破壊だね。長門さんみたいな情報操作もできるけど、やっぱり僕らの本分は破壊だ。困ったことがあったら言いなよ。力になる」
こいつらも一癖も二癖もあるやつらだというのは分かった。だが、腹で何かを考えているわけではなさそうなので、こいつらに相談するのはありかも知れない。その人柄はともかく、こいつらの力を借りるような状況は御免こうむるがな！

特別編（後書き）

なんか最近、遊戯王５Ｄ，ｓの再編小説が書きたくなってきた。

第十二話A，s　夜天の主

「な・・なんなのだ、これは・・・・」
「そんな・・・・」
「・・・・・・」
シグナムたちはアイリスが映し出した立体映像を見て一様に呆然としている。僕は彼女たちが勝って得るもの、管理局の保有する「闇の書」の情報を負けた彼女たちに見せた。これが、僕が決闘という形で彼女たちに挑んだ理由。僕が本気だと知ったこの状況なら、目の前の現実を信じるしかない。
「これでは・・どうあっても助からないではないか・・っ！」
シグナムは奥歯をギリッとかみ締めて悪態をついている。他の二人も何も言わないが、同じようなものだ。
僕は未だ抱きついて離れないヴィータの背中を軽く叩いたりさすったりしている。震えはシグナムたちがアイリスの情報を見ている間に治まり、今は安らかな寝息を立てている。もっとも、シグナムたちに返そうとするときつく抱きついてくるが・・・・。ちなみにシャマルはアイリスの映像を見ながらも時折ヴィータの姿をみてニヤニヤている。僕としてはあんまり他人の痴態を見て楽しんでやるなと言いたい。
まぁ、それは置いておいて、現実に押しつぶされそうになっている彼女らに僕は言わなければならないことがある。
「そう、そこで僕の出番というわけさ」
「なにっ！？手段があるというのか！？」
シグナムは目を見開いて僕の方を向く。聖遺物で雁字搦めにされているのでなんだか間抜けな体だが。
「あぁ。だがもっとも、僕ができるのは手助け程度だよ。効果があると思われる策を練り不確定要素を排除して、限りなく０に近かった可能性を数十パーセントに引き上げるくらいだ」

「それでもいい！教えてくれ！お前はなにを知っているのだ！」
懇願、と言った感じでシグナムは僕を見ている。
「僕の知っていることについては、今君たちが見たアイリスの映像が全てだよ。僕独自で情報の裏づけは済んでいるから、そこに書かれていることについて間違いはない。そして僕の分析どおりなら、君たちの主を救う方法が一つだけ残っている」
場の緊張が高まっていき、シグナムたちは唾をごくりと飲み込んだ。
「闇の書が蒐集を完了すると、本格的な所有者の認証が始まる。その瞬間から闇の書に手出しができるようになるんだ。それから防衛機能が立ち上がるまではいくらか猶予がある。情報の量が大きすぎるからね。ロードに時間が割かれるわけだ。その間なら、所有者の権限で防衛プログラムを切り離すことができる」
「だが、ここにはその所有者の認証プログラムにもバグが奔っているとあるが・・・・」
「そう。そこが僕が手助けしかできないと言った理由だ。その認証のバグは所有者を押さえつけて闇の書単体で起動しようとするはずだ。だが、それは完全じゃない。人の意志の力のみで跳ね除けるのはほぼ不可能だが、僕が外部から所有者の意識を保護してやればいくらか成功率は上がるはずだ」
「そんなことができるのか？」
「あぁ。ロストロギアをとめるならともかくそのくらいはね。だてに無限書庫管理責任者なんてやってないよ。魔法に関する知識なら、結構自信あるんだよね。さて、僕の目的は達したし、そろそろ拘束を解くよ」
僕は三人を縛っている聖遺物の帯を活動位階に下げて消した。
「「「？？？？？」」」
三人は疑問の表情を浮かべて僕を見ている。そしてシャマルが口を開いた。
「あなたの目的って・・・・結局なんだったの？」

疑問だろう。勝利した僕が何も得ることはなく、それどころか自分たちが欲しがっていた情報を渡したことに。
「君たちに管理局の「闇の書」に関する情報を見せること」
「なにっ！？」
シグナムが不審の目を僕に向ける。
「つまり、君たちが決闘を受けた時点で僕の目的は達成されていた。僕が負け、その上死んだとしても君たちはアイリスからこの情報を受け取っただろう。アイリスにはこれからの行動予定もちゃんと記録してある。君たちはその通りに動くことになっただろうよ」
「なら何故・・決闘などという形をとったのだ。意味がないではないか」
「決闘の意味は既に果たしている。何度も言った。僕の覚悟を見せなければ、君たちは僕を信用しまいと。力ずくで止めないと、君たちは滅びに向かって邁進してしまうことになる」
「・・・・・・・・」
心当たりがあるのだろうか。シグナムは押し黙った。

その時だ。腕の中のヴィータがもぞもぞ動き出した。
僕はヴィータの頭を撫でている。そうすると意識はないんだろうが、顔がほころぶ。口がだらしなく開いて涎が僕のスラックスにかかった。・・・・やめて欲しい。
「へへへ・・・・」
ヴィータは頭を乗せている僕の膝に頬をこすりつける。それをみてシャマルは「や～ん」と身体をくねらせ始めた。
そしてヴィータのまぶたがゆっくりと開き始め、僕と視線が合った。その瞬間、ヴィータは硬直する。今の彼女の状況は、足を崩して座る僕の胴に両腕を回して抱きついて、モモの上に顎を乗せているといった感じだ。
「あ、あ・・・・・あ・・」
ヴィータは気を失う前と同じようで違う感じに口をパクパクさせ

始める。
「うあああああぁぁぁぁぁ！！！！！！！」
物凄い叫びを上げ、ヴィータは僕から離れた。
「ななななな、なんでこんなことになってんだよ！！！おめぇか！？おめぇがやったんだな！！？」
ヴィータは僕を指差してそうまくし立てる。きっと今の僕は白い目をしているだろう。
「なにを言ってるんだ。君が自分で抱きついてたじゃないか」
「そうよ～？責任転嫁はよくないわ☆」
何故か僕の言葉に、ウィンクしながらシャマルが続く。その顔は今までのシリアスから一変、ニヤつきがとどまるところを知らない。

「っっっっっっ！！！！！！！」

ヴィータはしばらく茫然自失・・というには激しい謎の状態となり、誰の言葉も受け付けなかった。

しばらくして落ち着いてきたヴィータに、真剣な顔をしたシグナムが「闇の書の真実」を告げ、赤かったヴィータの顔はみるみるうちに青くなっていった。そして説明が終わった後、僕の方に近寄ってきた。
「頼む！はやてを助けてくれ！！！」
僕のカッターシャツを掴んで真摯な目線を向ける。
僕は「はいはい」とヴィータを落ち着けてから言う。
「最初からそのつもりだよ。だから僕は君たちに管理局の情報を見せたんだ」
「そ、そうか！」

安堵したような声が彼女から漏れた。さっきのシグナムたちの話しを聞く態度といい、よほどあの少女は信頼されているみたいだ。

「さて・・・・」

僕は話題を刷新しようと一息ついた。わざと大仰に行って場を緊張させる。その空気の変化に騎士たちは機敏に反応し、表情を硬くして僕を見た。

「情報が行き渡ったところで・・これからのことだ」

単に防衛プログラムを切り離すと言っても、パソコン上のデータを消去するのとはわけが違う。防衛プログラムも当然ながら魔力で動いており、制御を失えば・・・・いや失わなくとも破壊をばら撒く存在なのだから、戦いとなるのは必定。ならば、僕たちだけで挑むのは避けた方がいい。

それにこのままでは管理局が敵に回ってしまう。魔力の制限を解放てば戦力的には問題ないが、無駄なことはしたくないし、最近管理局の過激派の行動も怪しい。軋轢を生むような行為は控えたいところだ。

「君たちには管理局に出向してもらう」

「「「「なにっ！？」」」」

騎士たちは一様にそんなの無理に決まってんだろ！という目線を僕に向ける。

「もちろん、君たちには何も手を出させない。もともと一人の少女を救うために動いていたんだ。少々手段が手荒だったことの事実だが、君たちにはなにも後ろ暗いところなんてない。堂々としてればいい。

「今、僕たちの「夜天の書の主を救う」という目的に一番邪魔なのは管理局だ。しかし、それは真実を知らないからにすぎない。理由が明確かつ正当なものなら、管理局・・少なくとも今回来ているアースラのスタッフは協力してくれるさ」

「僕を信じてくれ」。僕のその言葉に騎士たちはしばらく悩んでいたみたいだが、うなずいてくれた。

「ところで、「夜天の書」とはなんなのだ？」
シグナムが悩ましげに言った。
「闇の書の真の名前だよ。闇の書とは何者かによって改悪させられた「夜天の書」のことを言うんだ。あんなに局所的に機能不全になるなんて、十中八九人の手が加わっているよ」
本当は十中八九どころか１００％だ。僕が直々に「解析」で確かめたのだから間違いない。それくらいには「解析」に自身を持っている。
「なんだと！？では、主はやてが苦しんでいるのは・・・・」
「遥か昔のどこかの誰かの責任ということになるね。この際だから呼び名を闇の書から夜天の書に改めてみては？」
「・・・・そうしよう」
「さ、続けるよ。管理局に出向すると言っても、夜天の書は持っていかない方がいい。何人かはアースラに向かわずに「夜天の書」を守ってもらう」
「なんでそんなことをすんだよ」
ヴィータが僕の言葉に反応した。
「昨日でてきた仮面の男・・・・あいつが管理局の人間である可能性があるからだ」
「なんだって！？管理局に歯向かってあたしたちを逃がしたのにか！？」
「あぁ。あいつは僕の術式を知っていた。その本来の効果を知っているものは数が限られている。一般人はもちろん、管理局のほとんどの人間が僕の術式を理解していない。僕に近い人がその本来の効果を知っていて、その詳細まで把握しているものは本当にごくわずかだ」
上層部は僕の「解析」について何かを知っているかもしれない。過激派が動いている可能性も考えられるが、破壊しかもたらさず、制御も利かない「闇の書」を求める理由がいまいちよく分からない。下手をすれば自分ごと吹き飛ばしかねないからな。

「仮面の男は僕のとある術を発動前に避けた。それは知っているということだ」
あのときの仮面の男・・・・蹴りのイメージがリーゼロッテさんと重なった。そして彼女はこの事件に捜査協力している。あれが彼女だったとするなら、無論リーゼアリアさんも同じだろう。そう仮定すればあのときバインドをかけたのはリーゼアリアさんだとつじつまが合う。戦闘中とはいえ、魔法の発動を気づかせなかった手際も彼女なら説明がつく。
「よって、今管理局に「夜天の書」を持っていくとは非常に危険だ。それに、一度出向するとどうしても取り調べに時間が取られて魔力の蒐集ができない。管理局に事情を説明しに行く役と魔力を収集する役を分け、管理局に「夜天の書」を持っていかないようにするのがベターだと僕は思う」
「・・・・確かに」
僕の提案にシグナムは難しい顔をしてうなずいた。
「ところで、今何ページ集まってる？」
「３８０ページだ」
まだ空きページが多い。さっさと集めないと何もできない以上、僕が行くのが適役か。
「じゃあ、蒐集は僕が行おう」
「なに・・？」
「正直、二人以上、できれば三人は管理局に出向して欲しい。そうしないと信頼させられないからね。そうすると蒐集のペースは格段に落ちてしまう。魔法生物も魔力は弱いとはいえ大きな身体を持つ強敵が多い。どうしても無理が出る。その点僕なら、さっきのあれがある」
それに書置きしてきたとはいえ、今アースラには戻りにくいというか・・・・。
「僕のさっきの黒い剣の能力は、魔力が弱いものには効きが強い。魔法生物くらいならよっぽどの奴が来ない限りは何体効果範囲に入

れようとわけはない」
「だが・・・・・・いや、そうすることにしよう」
しばらく悩む様子を見せ、シグナムはそう言った。
「シグナム！？何を言っているの？「夜天の書」を他の者に預けるなんて」
シャマルはどうも反対のようだ。慎重でなければこれからの作戦はどこかで瓦解するかもしれない。反対されたわけだが僕の好感度は増した。だが、考えればそれ以外の選択肢がないことにも気づく。
「もう・・私たちには彼に賭けるしか選択肢がないのだ。結局最後は主共々「夜天の書」を彼に託すことになる」
「・・・・確かにそうね。それに澪君だっけ？信頼できそうだし・・・・」
「それに、私は何も彼のみに托そうとはしない。ヴィータ、お前は少年の蒐集についていけ。独断専行の多いお前は話し合いには向かないだろうからな。管理局には私とザフィーラ、そしてシャマルで行く。このメンバーなら何かあっても身を守りつつ転移で逃げることも可能なはずだ」
「お、おう！」
シグナムの言葉にヴィータが慌てて反応した。若干けなされていた感じに思えるが・・・・いいのか？
「じゃあ決まったところで、君たちの主を迎えにいこう」
「主も連れて行くのか！？」
「あぁ。それに、「闇の書の闇」についても説明しなくてはならない。僕が手助けするとはいえ、運命を打ち破るのは彼女だ。事前に説明して、しっかりと気持ちの準備をさせるべきだ。なに、管理局に連れて行っても「夜天の書」がなければ問題は起きない。それにあそこにはフェイトとなのはがいる。万が一管理局が蛮行に出ることがあっても彼女たちが何とかしてくれる。彼女たちは自分の正義で動ける人間だから」
「・・・・分かった。辛い真実を告げるのは心苦しいが、主の命

には代えられん」

「それにヴィータは着替えてこないとね！」

僕は騎士たちの肩の力を抜くために話題を変えてみた。元気ハツラツに。

「なあっ！！！」

ヴィータはスカートを両手で押さえて後ずさった。顔は羞恥で真っ赤である。

その様子を見て、シャマルはなにかに思い至ったようで笑みを浮かべる。シグナムは何を言っているのかわからないようだ。ザフィーラは・・・・興味がなさそう。

「もしかして、ヴィータちゃん♪」

シャマルはヴィータに満面の笑みでにじり寄る。

「あ、あああああたしがそんなんになるわけねぇだろ！！！」

ヴィータはさらにシャマルの意味不明の迫力に後ずさっていく。

「へぇ～、どうなったの？ヴィータちゃん？」

「っ～～～！！！」

その一連のやり取りを横目に見ていたシグナムが僕に聞いてきた。

「茜火、シャマルとヴィータはいったい何を言っているのだ？」

「澪でいいよ。それとあれはヴィータがしっ――」

「言うな～～～～っ！！！！」

顔を真っ赤にしたヴィータが僕に殴りかかる。だが・・・・

――――ガンッ！！！

魔力をこめていない拳が僕に聞くわけがなかった。グキ・・と音がして、ヴィータは地面を転げまわりながら悶絶している。

その後復活したヴィータが「お前いったい何でできてんだよ！」と聞いてきたのは無理からぬ話しである。

＊＊＊＊＊＊

――地球、鳴海市
僕と守護騎士たちは一軒の家の前に立っている。もちろん彼女たちの主の待つ家だ。
「澪・・混乱の連続で忘れていたが、その左腕は大丈夫なのか？」
ドアを開けようとしたシグナムが思い出したとばかりに聞いてきた。
「大丈夫だよ。一ヶ月もあればまた生えてくるから」
再生は、切り落とした瞬間から始まっている。
「おめぇ本当に人間かよ」
ヴィータにはさっき、タンパク質でできている！と人間性を豪語したばかりだが、確かにこうして自分を一度客観的に見てみると人外だよなと納得できる。
「まぁ、種族的には・・・・いや、種族的にだけ？」
「何だよそれは」
「秘密ってことで。あ、でも一般人の君たちの主にこれはトラウマ映像だよね。隠しておかないと」
左腕はカッターシャツごとなくなってしまっている。アイリスに即席のコートをバリアジャケットで出してもらう。デバイスって便利だな。
「これでいい。僕のことは上手く紹介してくれ。彼女の置かれている状況については一番詳しい僕が説明する」

「承知した」
シグナムはそう言って玄関を開け、中に入った。
「ただいま戻りました、主」

「おかえり～」

と訛りのあるイントネーションで答えが返ってきて、奥から車椅子の少女が現れた。
「あれ？そっちの男の子は誰なん？やけにかっこいい子やな～」
「それも含めて話があります。少し時間をもらえますか？」
「そんなんかしこまらんでもえぇっていつも言ってるやないか。もちろんえぇで。でもお茶入れてくるから少し待っとってな」
そして少女は玄関から見て右の、廊下の途中にあるドアに入っていった。騎士たちその部屋に入っていく。シグナムがチラッとこちらに視線を向けた。ついて来いといっている。
ヴィータだけは風呂場に直行したけどな。

入った先はリビングだった。少女、八神はやては奥でお茶の用意をしていた。僕は彼女に近寄る。
「手伝うよ」
紅茶を入れたマグカップを載せたお盆を少女の手から預かり、戸棚から出そうとしていたお菓子を取って、それは彼女に持たせた。やっぱり全部を他人にされるというのは心苦しいと思うからね。
欲の皮の突っ張ったオヤジばかりの管理局上層部と関わっていると、こういう心の綺麗な人物は実は世界に少ないんじゃないかって思えてくる。まぁ、実際そうなんだろうけど、とにかくギャップでどうしても顔がほころんでしまう。

「っ！！！」
はやては僕の顔を見てビクッと反応した。どうなってるんだ？
まぁ、気にすまいということで守護騎士たちの座っているソファの前のテーブルにお茶を並べた。真ん中にお皿を置くと、はやてはクッキーの缶を開けて中身を皿の上に並べた。ヴィータの顔がキラキラと輝いている。甘いもの、好きなんだな。ちなみに今彼女はジャージ（半袖短パン）を着ている。服が足りていないんだろうか。
シャマルが近寄ってきてはやてを抱っこすると、ソファに座らせた。僕は「U」の形をしたソファに彼女と向かい合うように座り、騎士たちははやての左に一人、右に二人座った。ザフィーラは犬型になってソファの横で丸くなっている。
ヴィータがクッキーに手を伸ばそうとしてシグナムにはたかれているのを横目で見て、僕は口を開いた。
「始めまして、僕は茜火澪。澪と呼んでくれてかまわないよ」
「私は八神はやてや。私のこともはやてでええで」
異性と面と向かっているこの状況が恥ずかしいのだろう。視線を時折外しながら彼女は言った。
「じゃあはやて。まずは僕の紹介だね。でも何を言えばいいのかな・・・・」
「主はやて」
はやてから一番離れて座っているシグナムが、会話に飛び込んできた。
「実は今日家を空けたのは、この少年、澪に会いに行っていたからなのです」
「そうやったんか。で、何をしに行ってたん？」
「魔法のことに関しては以前話しましたね。澪は世界でも卓越した知識を持つ魔導師なのです。その力を借りるため、コンタクトを取っていたのです」
こういうのは他人から聞いた方がいいだろう。若干の嘘はご愛嬌だ。

「へぇ～。澪君ってすごいんやなぁ」
すごい順応速度だな。
僕は紅茶を一口啜って話し始める。
「そう、そして今日僕が此処に来たのは、君が持っている本のことについて話があったからだ」
僕はアイコンタクトをかわし、シャマルから本を受け取って机の上に置いた。

「え？」
とはやては間抜けな声を上げた。
「なにか問題あるん？」
「この本が此処にあることは特に問題じゃない。君が所有者に選ばれたことも、そのこと事態については問題ない。心配しなくとも、はやてと騎士たちを引き剥がしたりはしないよ」
はやては明らかな安堵の表情を浮かべた。
「ただ・・・・問題があるのはこの本自体なんだ」

僕は説明する。今、彼女の身に起きていることを。本の真実を。そして管理局のことを。そしてこれからのことを。

「そんな・・・・私は、どうしたらええんや」
はやては両腕で自分の身体を抱いて震えている。逃れられない死、それが恐怖をもたらしている。
「大丈夫だよ。対策は既に考えてあるからね。僕自身ができるのは手助け程度だけど、かなり確立は上がるつもりでいるから。詳しくは落ち着いた後にシグナムたちに聞いてよ。彼女たちにはもう話してあるから。はやては助かるよ」
「ほんとなん？」

はやては目に涙を溜めて僕を見た。
「あぁ。僕は都合のいい希望を語りはしない。事実だから言っているんだ。はやては助かる」
僕がそういうとはやては少しだけ微笑んだ。
「さ、お菓子を食べよう。僕地球のお菓子は久しぶりだよ」
人が混乱しているとき、話題の刷新というのは重要だ。とりあえず彼女を落ち着けて、その後だな。行動を開始するのは。
場の空気が変わったからか、はやての表情にもいくらか余裕が出てきた。
もうおあずけは限界だとばかりにヴィータはクッキーに手を伸ばしている。そのまま大胆に行くと思いきや、リスのように少しかじっては至福の表情を浮かべる。面白いな。
「澪君って管理局・・えぇと、ミッドチルダやったけ？そこの出身なんやろ？地球に来たことあるん？」
なんか墓穴掘った気がする。異世界出身なんて彼女を混乱させるだけだし、なんて言おう・・・・・そういえば、グレアム提督はここ出身だっけ？
「いや、僕の知り合いのおじさんが地球出身でね。休暇に時折この世界に帰ってたから昔お土産にもらったことがあるんだよ」
「へ～、そうやったんか。世間って意外と狭いんやね」
「ちなみにそのおじさんはヨーロッパ出身だよ。昔森の中で倒れていた管理局員を助けたことから魔法を知ったんだってさ」
「私も魔法、使えるんかな～？」
やはり魔法は少年少女の永遠の憧れだ。僕は手にした状況が少しあれだけど。
「今すぐにはちょっと無理だね。けどこの事件が終わって、「夜天の書」が本来の機能を取り戻せば使えるだろうね。僕の見立てでは今の段階でシグナムと同じくらいの魔力がありそうだ。あ、これはかなりの数値だよ」
「そうなん？」

「あぁ。管理局でエースを張れるくらいには」
はやてはリンカーコアが未成熟かつ、「夜天の書」の変調のせいでリンカーコアが悲鳴を上げているのであって、「夜天の書」の方だけでも十全の状態になれば無理をしなければ普通に魔法を使えるはずだ。僕やフェイト、なのはも九歳だけど使っているし。
「しかもまだ成長段階だろうね。その年齢なら」
僕はクッキーを摘んで半分くらいかじった。やはり日本のお菓子は美味しい。管理局のが取り立てて悪いわけでもないが、この味には一歩劣る。
「やっぱり地球の、特に日本のお菓子は美味しいよ」
「私はいつも食べてるからよく分からへんけど、そうなん？」
「うん。管理局のお菓子が不味いっていうわけじゃないけど、この味には一歩劣るよ。さっき言ったおじさんはヨーロッパの人だけど、買ってくるのは日本のお菓子だったよ」

その後、僕らははやてが持ってきたトランプで大富豪をしてみたり、人生ゲームに興じてた。なぜ、お金の絡む（少なくとも言葉上は）ゲームばかりなんだろうと頭を捻った。
ちなみに、人生ゲームの勝者は僕だった。何回ものタナボタの末に巨万の富を築き、日本語仕様の人生ゲームにもかかわらず、妻が四人、子供が六人の大所帯となって、ピンが車からはみ出ていた。シャマルはそれに大爆笑だったな。
そして堅実タイプのはやて、そしてシグナムが続いて、ヴィータはなぜかダイスを振るたびに不幸が訪れ、シャマルは何度も博打で全財産をなくした。きっとあれがなければ勝者はシャマルだ。

僕は机の上の「夜天の書」を持ち、立ち上がった。
「さて、じゃあ僕は行動を開始するよ」
僕は騎士たちを見回して言った。僕の言葉に彼女らは真剣な表情

になる。
「もう行ってまうん？」
はやては上目遣いに僕を見て、心もとなげだ。
「魔力の蒐集は早ければ早いほどいい。安心してよ。魔法生物から魔力を奪うだけで殺、しはしない。それに僕は強いからね。問題ないよ」
今回はスピードがものをいう。シグナムたち三人が管理局と話している間に、全ての準備を終えてしまおうと思っている。防衛プログラムを切り離すのは、決闘をしたあの無人世界でいいだろう。
さて、それには戦力が必要なわけで、僕とヴィータしかいない以上、戦力アップには僕が強くなるしかないか。エイヴィヒカイトの制御陣を足元に展開し、集中する。
しばらくすると視線が高くなり、それと共に制御陣が消えていった。
今の僕の肉体年齢は十五歳。「肉体の成長」は真っ先に「解析」した項目である。そうでなければ不審がられ、不老不死とか馬鹿馬鹿しい研究の材料になりそうだから。
ちなみに、成長する者の肉体年齢に干渉するには時間の要素を式に入れ、物質の移り変わりを計算しなければいけないため、難しい。だが僕のように成長せず、肉体も魔導に満たされ半分意味をなくした存在だからこそこういう手段が取れる。
リンカーコアも少し成長し、S＋ランクといったところだろうか。まぁ、１０が１１になった程度の変化である。
「「「「「・・・・・・・・」」」」」
八神家の全員がその僕を口を開けて見つめている。
「み、澪君が大きくなってもうた！」
面倒だが、説明することにする。
「僕の肉体の成長は何年も前に止まっていてね。こうして魔法で成長させてたんだ。ちなみに実年齢はさっきまでの姿の九歳だ。今は少しでも力が必要だからこうするけど」

肉体を成長させると魔力だけじゃない、リーチや腕力、体力も増える。
「そ、そうやったんか。ホ・・」
「だからこうすると・・・・」
僕はヴィータとシグナムに手を向ける。ヴィータは今の僕と同じ十五歳くらいになって、シグナムは十歳まで縮む。
「「なあっ！！？」」
二人同時に驚く。シグナムの服はぶかぶかに、ヴィータはサイズが合わずパツパツになってしまっている。僕の服がこの式に対応した特別仕様だったから忘れてたけど、そういえばこうなるんだった。
「へぇ～、ヴィータってこういう成長をするんや」
はやては赤くなった隣のヴィータをジト目で見つめている。嘗めまわすように全身を見わたし、時折つついている。
基本スレンダーなのに出ているところは適度に出ている、同姓に喧嘩を売っているとしか思えないプロポーションをしている。背も高め。ルネさんがファッション雑誌片手に嘆いていたな。「私だってもう少し美容に当てる時間があればー！！！」と。
僕の美観だが、今のヴィータは正直ファッション雑誌のモデルと比べても月とスッポン。もちろんヴィータが上。ルネさんに合わせてはならない。彼女は自分の本能のままに動くから。
「う・・うあああぁぁぁ！！！」
羞恥からか、ヴィータはリビングを飛び出していった。
「シグナムは可愛くなったなあ」
一方のシグナムははやてにペタペタ触られているが無言だ。かなり落ち着いているようだ。そして僕の視線を察したのか、口を開いた。
「フッ・・驚き疲れたな」
たそがれているだけだった。
とにかくその場にいたシグナムを元に戻して調子に乗りましたと

謝り、もう少し年齢を下げてくれないかしら、と言ったシャマルの要望を叶えていると、顔を赤くしたヴィータが戻ってきた。服が変わっている。探してきたのだろうか。着替えられると戻したときにまた着替えないといけないんだけど・・・・。

「まぁ、こんなこともできるんだ」

僕ははやてを見て言った。

「私も成長できへんかなぁ？」

はやては期待と不安が入り混じった目を僕に向けている。将来が気になるのだろう。

「成長する者にこの魔法をかけることはできないんだ。僕の力不足だよ」

「そ、そうなんか」

はやては嬉しいような、悲しいようなそんな感じだ。

「そしてヴィータ。服を着替えてくると、身体を元に戻した後でもう一回着替えてこないといけないんだけど？」

「あ・・・・・・そ、それを先に言えぇぇぇ！！！」

「まぁまぁヴィータ、しばらくそのままでええやん。綺麗やで」

「え？う、あ・・・・」

ヴィータははやての言葉にたじろいだ。

「急に変な魔法をかけたことについては悪かったよ。ゲームの後でテンションが上がって調子に乗ってた」

僕は素直に４５度の謝罪の礼をした。

「う・・・・うぁ。そ、その・・お前も綺麗だと思うか？この格好」

なぜそんなことを僕に聞く。それにこの格好って・・・・その格好も自分自身だよ。

僕は頭を上げて、正面からヴィータを見た。

「うぅぅ・・・・」

別に視姦しているわけでもないのだが、ヴィータは縮こまってしまう。

「そうだな・・・・・・うん。可愛いよ」
「っ！！！」
ヴィータは目に見えて真っ赤になる。そしてそれを見たはやては面白くなさそうだった。
「えぇもん！私だって大きくなったらヴィータ以上に可愛くなるもん！」
はやては頬を膨らませてそっぽを向いた。結局、ヴィータは元に戻さなくていいのか？

「とにかく、僕は行動を開始する。無人世界に飛んで魔法生物から魔力を収集してくるから、管理局のほうは任せた。それと、これを持っていってくれ」
僕はシグナムに手紙を渡した。
「これは？」
「ことの内容を書いた手紙。これを必ずリンディ・ハラオウンという人物に渡してくれ。僕の・・・・無限書庫管理責任者の判が押してある。無視はできないはずだ」
「あぁ。必ず渡す」

シグナムが手紙をしっかりと持ったのを確認し、僕は八神家を後にした。後ろにはまだ顔が赤いヴィータ。戦闘はしっかりしてくれることを祈りつつ、僕は無人世界に転移した。

第十二話A，s　夜天の主（後書き）

今回は長くて疲れました。
そしていつの間にかハーレムモノに近づいている。まぁいいか、何も問題ないし。

第十三話A，s　蒐集

三日三晩、休むことなく収集を続けた。それで集まったページは２３５ページ。元からあったページと合わせて６１５ページ・・・・目標の６６５ページまであと５０ページなので、この蒐集ペースならあと一日で集めきることができる計算だ。しかし「破滅の聖剣」を使い続け、魔力が枯渇寸前なのでそろそろ寝ないといけない。

もちろんこのペースにヴィータはつき合わせていない。毎晩休んでもらっている。

とにかく僕も限界なので、今日の蒐集を追え、ヴィータと昼の間に見つけておいた洞窟に入る。日はもう落ちていて、澄んだ空気の上に満天の星空が輝いているのが洞窟の入り口から見えた。

横になると、酷い眠気が僕にのしかかる。でもしっかりとアイリスを首につけなおして、僕は眠った。

＝＝＝

魔物が退去して押し寄せた時、＜プルート・ディペンデンス＞という広域殲滅魔法を連発していた。普通の魔導師なら・・いや、あたしたちだったとしても数時間で魔力がなくなっていただろう。だが澪は三日三晩戦い抜いた。とんでもない魔力量だ。顕在量はヴィータたちとそう違わないが、総量では圧倒的な差があった。

澪は典型的なオールラウンダー、それも接近戦から広域殲滅まで何でもありのだ。広域殲滅魔法があったのは正直助かった。接近戦しかできないあたしたち騎士は囲まれることに弱いからだ。

シグナムたちはどうしているだろう。管理局に捕まってなきゃいいが・・・・まぁ、それはねぇだろ。澪も自信満々だった。上手くいくはずだ。それに何か合ってもシグナムたちは簡単にゃ負けねぇ、ヴィータはそう考えた。

こうして考えていてもはじまらねぇ、明日もあたしは蒐集を続けなきゃならねぇ、そう思ってヴィータは寝ようとした。しかし、その時異変に気づいた。

――――ハッ！ハッ！ハッ！ハッ！

過剰に早い呼吸音。それが澪から発せられていた。

そして近寄ってみてヴィータは驚愕した。震えている・・澪はガクガクと大仰に肩を震わせていた。そして両腕で自分の肩を抱き、身を丸めている。

何なんだ、これは。ヴィータは自分の目を疑った。あんな戦いをした澪が、小さくなって震えている。なんでだ。

≪驚いたか？ヴィータ≫

その時、澪の手から零れたアイリスがヴィータに声をかけた。

「あ・・あぁ」

ヴィータはそう答えるしかできなかった。

≪マスターは週にニ、三日こういう日がある≫
「何があったか、聞いてもいいか？」
ヴィータは・・・・たぶん自分は澪のことが心配なんだと思った。何で澪はこんなにも自分たちに良くしてくれたんだろう、何で他人の力を借りようとしないのだろう、何で震えているのだろう、そんな考えが頭に張り付いている。どうしても聞きたかった。何が彼を苦しめているのかを。
≪・・・・ヴィータは、「家族」というものについてどう思う？≫
ヴィータの質問に帰ってきたのは違う質問だった。
「家族？」
≪別に血なんかつながっていなくてもいい。ヴィータにたとえるなら他の守護騎士や主のことだ≫
何故そんなことを聞くのかヴィータは困惑するが、答えることにした。答えなければならないと思ったからだ。
「あたしは、大事なもんだと思う。温かくて・・やさしくて、心地いい」
≪そうだな。その考えは間違っていない。だが、マスターにとってそれは違う≫
しばらくアイリスは沈黙し、語りだした。自分のマスターの過去を。
≪マスターにとって家族というのは苦痛だ。温かみなど欠片もない。絶望、痛み、涙、嘆き・・・・その類のものに満ちていた。ヴィータ、マスターのズボンを下ろしてみろ≫
「なっ！！！」
とんでもないことを言う。ヴィータはずっと子供の姿だったが、結構な時を生きているそれが何を意味しているか分かるのは当然だった。自然、顔が赤くなる。
≪何を勘違いしているか知らないが、お前の考えているような性的な意味は何もない≫
それに実物もな、とアイリスは心の中でつぶやいた。

≪それにこうなったマスターは絶対に目を覚まさない。大丈夫だ≫
ヴィータはその言葉に押し切られ、しぶしぶ、湯気が立ちそうなくらい顔を真っ赤にして澪のズボンのベルトに手をかけた。はたから見れば立派な変態である。その事実にさらに赤面していく。
丸まっているの難しかったが、ヴィータはなんとかズボンを脱がし終える。
「ぬ・・・・脱がせたぞ」
≪そうか。ではパンツも脱がせ≫
「っ！！！！！」
もうヴィータの頭は爆発寸前だ。
「なんでそんなことするんだよ！」
ヴィータは無茶を言うアイリスに猛然と講義した。お、お、男のパンツを脱がせる！？無理に決まってんだろ！恥ずかしさで頭が猛烈に回転している。
≪千の言葉を言うより、一の実物の方が理解が早い。私はヴィータ、お前が信用できると思ったから言っているのだ。早くしろ・・でないと私は話さない≫
「・・・・分かったよ・・・・・・・・・」
自分から聞いた手前、ヴィータはもう引き下がれなかった。
ヴィータは澪の髪の色と同じ、紺色のボクサーに手をかけ、見ないようにして一気に引き抜いた。もう澪は何もはいていない。
≪見ろ≫
アイリスは光を放ち、洞窟の中を明るくした。
もう一度心の中で言うが、無理に決まってんだろ！自分で男のはいているものを脱がせ、しかも見ないといけない。ヴィータは何故自分はこんなことをしているのか悲しくなってきた。
≪いいから見ろ≫
しかしアイリスは止まらない。ヴィータはやけくそになって目を澪に向けた。
「なっ！！！！！」

アイリスの言ったとおり、そこに性的な意味は何もなかった。いやそもそもあるべきものが存在していない。そしてその代わりにある大きな傷跡・・・・過剰なまでに大きい切り傷だ。
ヴィータはそれを見て放心した。何を言っていいか分からない。恥ずかしさも一瞬の内に冷め、視線は傷に釘付けになった。
≪これが答えだ≫
混乱の極致にあるヴィータの耳にアイリスの硬質な声が響く。
≪マスターは「家族」から虐待を受けていた。毎日のように殴られ、蹴られ、叩かれ、罵声を浴びせられ、ビール瓶で頭を打たれた。マスターにとって「家族」とはこの上もない苦痛。だからマスターには「家族」がいない≫
「家族がいない？」
≪あぁ。マスターの家族・・両親はもう死んでいる。マスターに殺されてな≫
「なっ！！！！！」
ヴィータたち守護騎士に「家族」は存在していなかった。魔導生命体なのだ、当然のことだ。しかし、はやてという主を得て「家族」というものを得た。だが、これも「家族」なのだとアイリスは言う。ヴィータは認めたくなかった。認めたくなかったが・・否応なく理解させられる。
≪マスターの過去を私は見てきたわけじゃない。マスターから聞いたことだ。だが、マスターがそんな詰まらん嘘をつくはずもない。それにこうして振るえているマスターを見ていると、嘘なんて言葉は浮かんでも来ないだろう？≫
ヴィータはその通りだと思った。
≪人は時として、その余りある欲を抑えきれない。そしてそれは自分より弱いものに向くものなのだ・・・・マスターの言っていたことをそのまま言っているだけだがな。そう、人は時として自分というものを見失い、軽挙な行動をしてしまう≫
それは自分たちも同じだ。はやてが死んでしまうと考えて・・・・

ほかのことは考えずに行動して、むしろはやての命を奪うところだったのだから。
≪そしてマスターの両親はその典型だった。結婚で失敗して、仕事で失敗して、何より人生で失敗して、そしてその不平不満をマスターにぶつけた。その結果がこれだ≫
「・・・・・・」
≪もちろんマスターも周りの人間に相談したらしい。だが、返ってくる言葉は「親が怒るのはあなたのことが心配だから」だ。何も分かっちゃいない。上から目線でいえる言葉じゃない。思考を放棄した醜い言葉だ≫
だんだんとアイリスの口調が厳しくなる。ヴィータも心の内は怒りで爆発寸前だった。
≪マスターは助けを求めた誰からも信じてもらえず、一人で走り続けるしかなかった。だからマスターは常に一人だ。心からの信用などマスターには存在せん。人の愛し方が分からんのだ≫
それでいいたいことはいい終わったのか、アイリスは光を弱くしていく。そして洞窟には沈黙が満ちた。
ヴィータは自分たちの家で対峙したときから澪を変なやつだと思っていた。だが、そんな過去があるとは思ってもみなかった。「家族」が幸せなら、澪はその幸せを自ら捨て続けなければならない。「家族」が苦しいから。それはすごく悲しいことだと思う。

≪さて≫
しばらくするとアイリスが急に声を出した。
≪ヴィータ。マスターに服を着せてやってくれ≫
それはもちろん、パンツとズボンをはかせろという意味である。ヴィータはすっかり失念していた。自分が脱がせたということを。
≪生憎私はデバイスだ。文字通り手も足も出せんからな≫
ヴィータは再び真っ赤になることになった。

≪ご苦労様≫
真っ赤になったヴィータをアイリスが茶化す。その言葉にヴィータは（たとえさせられたものだとしても）自分が変態への階段を登っていることを自覚せざるを得なかった。
ヴィータは半ばあきらめの心境でもう一度澪を見た。相変わらず小さくなって震えている。
「やめて・・・・やめてよ、かあさん・・・・とおさん」
澪の口からそんな言葉が漏れた。
ヴィータはとりあえず澪の手を握ってみることにした。すると澪は両手でその手を握り返した。気のせいか、震えが若干治まった気がする。ヴィータは今日はそのまま眠ることに決めた。澪の隣に横になる。澪の綺麗な顔が苦痛と恐怖に歪んでいるのが見えた。
「そんな顔・・見ていたくねぇよ」
ヴィータはもう少し澪に近寄った。しかしその選択はヴィータにとっては思いもよらないことを引き起こした。澪がヴィータの手から自分の手を離し、抱き枕のようにしがみついてきたのだ。
「＋ＫＬっじょｋＧＯ＜ＬＬＰＰ＞ＯＨＦＯＰ＝Ｄ@：ＦＯ～！！！！！」
ヴィータは奇声を発し、トマトのように真っ赤になる。
≪なかなか可愛いぞ♪ヴィータ♪≫
ヴィータは何とか澪の手から逃れようと必死にもがくが、その腕はちっとも緩まない。むしろ密着度が増しただけのように思えた。こいつどんな腕力してやがんだ！とヴィータは思った。
澪はヴィータの動きに反応してかもぞもぞと動く。やめてくれ！変な気持ちになんだろうが！とヴィータは心の中で叫んだ。
だがまぁ、人間なれてくるもので、十分もたつとヴィータは落ち着いてきた。そして思う。あたしはもしかして汗臭いのではなかろうかと。思えば三日も風呂に入っていない。戦いづくだったし、間

違いなく汗臭い。一方澪の方はそんなに汗臭くないようだった。その違いに女としてなきたくなったのは秘密だ。
それになんかこいつの匂いって落ち着くな、と考えていると疲れからかヴィータはいつの間にか眠ってしまっていた。

＊＊＊＊＊＊

次の日、目を覚ましたヴィータの目に飛び込んできたのは澪の寝顔だった。昨日とは違って安らかな寝顔だ・・・・ってそうじゃない！もしかして一晩中抱きつかれたままだったのか！？ヴィータはまた赤くなる。澪とあってからペースを崩されっぱなしだ。
≪フフフ・・良かったじゃないか。マスターもヴィータなら安心できるようだ。無意識だが・・いや無意識だからこそ素晴らしいな。喜べ。マスターに認められたようだぞ？正気の時はまだ分からんがな≫
恥ずかしいので、ヴィータはとにかく澪の腕から出ることにする。昨日とは違い、簡単に抜け出ることができた。そしてヴィータは澪の寝顔を見る。
すげぇ綺麗な顔してやがる。それになんだかんだ言って助けてくれるいい奴だし・・・・こんなやつめったにいねぇよ・・とヴィータは思う。
≪どうしたヴィータ、乙女の顔になっているぞ？≫
「お、おお乙女の顔ってなんだよ！」
≪可愛い顔のことさ≫

「っ！！！」
まったく何てこと言いやがる！こいつにしたって澪にしたって、性格特徴てきすぎんだろ！とヴィータは抗議したい気分だ。しかし自分もそのうちには言っていることに彼女は気づいていない。
「ん・・・・っ」
騒がしくしていたからか、澪が身体を揺らした。
≪騒がしくしたからな。そろそろマスターが起きるようだ≫
澪がゆっくりとまぶたを開く。ヴィータはそれにメチャクチャ色っぽいなという評価を下した。

＝＝＝

確かに。別に子供つくろうって考えてるわけじゃないんだろうし、不躾だった。
「それは悪かった。さて、今日も蒐集に行く。今日で終えるつもりだからそのつもりで」
「お、おう！」
どういうわけだか少々混乱気味のヴィータをつれ、今日もまた蒐集の為に別の世界に転移するのだった。

そしてやってきたのは密林の無人世界。周囲からはギャアギャアといてはならない生物の鳴き声が聞こえる。木が日光を遮り、あたりは薄暗い。
「なんか不気味なとこだな・・・・」
ヴィータが周囲を見わたして言う。樹木の密度が高くほんの十メートル先も満足に見えないこの状況は、確かに何か不穏なものが出てこないかという考えを人に抱かせる。
僕はまずアイリスを２ｎｄモードで起動し、右手に篭手がはまったのを確認してから「破滅の聖剣」を形成する。それを新たにバリアジャケットに追加した専用のベルトに固定し、アイリスを１ｓｔモード、ソードフォルムにする。準備完了。
「アイリス、サーチャーを頼む」
≪分かった≫
アイリスから水色の光球が放たれ、そのまま四散していった。そしてすぐに魔力反応を拾ったようだ。
≪おぉ、マスター。この世界は当たりのようだぞ。魔力反応がいっぱいだ！≫
アイリスは調べた簡単な地図の上に感知した魔力を表示する。地図はサーチャーが調べているため、リアルタイムで更新され、広く

なっていく。この魔力反応ならどれも2～3ページはいくな。

そして移動した僕のヴィータが見たのは5～6メートルくらいの恐竜のような生物の群れだった。ただ、所々に発光する水晶のような突起物があり、かなりの魔力を放っている。

周囲はここだけ木がなく、ぽっかりと空いている状況だ。

「澪・・もしかしてあれ、かなり強いんじゃねぇか？」

今回の魔法生物はそんなに大型ではない。だが、これまで蒐集してきたものより魔力反応は上。それに、身体中に魔力がめぐっているのが感じ取れる。それが五体を強化しているようだった。

「そうみたいだね。それにあれだけ数がいると様子見っていうわけにもいかない。最初から全力で押し切らないと取り返しがつかない」

――――「Ｓａｎｃｔｕａｒｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｅｘｃａｌｉｂｅｒ」

鞘に書かれた模様が強く発光し始める。周囲に重い空気が満ち、恐竜のような魔法生物は一様に僕のほうを向く。人間なら逃げていくところだが、追い詰められた動物は玉砕覚悟でつっこんでくるのが通例だ。今回もその例に漏れず、徒党を組んでおしよせてきた。

「プルート・ディペンデンス！」

≪Ｐｌｕｔｏ　Ｄｅｐｅｎｄｅｎｃｅ≫

アイリスを逆手に持ち替え、人差し指と中指を恐竜の向かってくる方向に向けた。指から細い一条の光が放たれ、それは周囲に何の影響も与えることなく恐竜も、その先の樹木もただ通過する。そして次の瞬間・・・・

――――ドドドドドドド！！！！！！！

奔った光を追うように魔力爆発が連続して起きる。恐竜たちは瞬く間にその爆発に飲まれ、見えなくなった。
そして光が治まり・・・・そこには魔力ダメージでノックダウンされた恐竜が・・・・いるわけではなかった。何割かは倒れているが、他はダメージを負っているとはいえまだ健在だった。
「なんでだ！なんであれで倒れねぇ！」
ヴィータが驚愕して恐竜を見る。僕も恐竜たちを観察し、そして気づいた。僕の魔力が恐竜たちの全身から放出されていることに。
僕は試しに＜スプレンダー・バレット＞を一発打ち込んでみた。すると身体から突き出ている水晶に吸い込まれていき、身体から放出された。
つまり彼らは純粋魔力を取り込み、無害なものとして放出する能力を持っているということだ。僕やなのはを初めとする魔力変換資質を持たず、純粋な魔力で戦うものの天敵といえる。魔力自体を吸い込む能力なので、「Ｓａｎｃｔｕａｒｙ ｏｆ ｔｈｅ Ｅｘｃａｌｉｂｅｒ」の効果をみごとにすり抜けている。まぁ、吸いきれなかった余剰分の魔力には「Ｓａｎｃｔｕａｒｙ ｏｆ ｔｈｅ Ｅｘｃａｌｉｂｅｒ」の効果は適応されているようだが。
「どうも、純粋な魔力攻撃が効きにくいみたいだ。僕がサポートするからギガントシュラークで一掃してくれ」
「あぁ！」

・
・・
・・・
・・・・
・・・・・
・・・・・・
・・・・・・・
・・・・・・・・

そして一時間後。

「ハァ・・ハァ・・・・、やっと、終わったぜ」

周囲には気絶した恐竜たちが山と積まれている。

「確かに・・今回はめんどくさかった」

ここ三日の疲れが残っていたのか、身体がうまく動いてくれなかった。帰ったらゆっくり休まないとな。

「けど・・これで」

「６６５ページ、蒐集完了。帰って風呂にでも入ろう」

「あぁ」

そして今からアースラに連絡を入れるのか・・・・フェイトになのは、クロノ、エイミィさん・・怒ってるだろうな。

「・・はぁ・・・・アイリス」

うだうだしていてもしょうがないので、拒否していた念話をすることにする。もしかしたら全員八神家にいて鉢合わせって可能性もあるかもしれないから。

第十三話A，s　蒐集（後書き）

今週は本当にいろんなことがありました。長い間反目してきた父親との和解から始まり、さまざまな想いが頭をめぐりました。そして、「あぁ、結局僕も我儘な人間だったんだな」ということを自覚しました。

今の僕の心境は、この小説を書き始めたころとはずいぶん違うモノになっています。当初僕が考えていたこの小説のイメージは今後変わっていくかもしれません。

第十四話A，s　一家団欒（前書き）

この前は見苦しいところをお見せして申し訳ありませんでした。
心機一転！書いていきます！

第十四話A，s　一家団欒

＝＝＝

決闘で澪が自分の腕を切り落としたというところでは気絶するかと思ったし、四対一で勝ったという部分には本当に驚いた。でも、ヴィータと二人きりなんて・・・・なのはじゃないけど、帰ったらＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩだね。フェイトは薄く笑う。

何はともあれ、ことの真実が明るみになって、打開策も可能性は低いかもしれないがあるという。

リンディの指示で厳口礼がしかれ、事件が終わるまでは騎士たちやはやてのことは事件が終わるまでは本局にも漏れない。

そして今フェイトたちははやての家にいる。アースラでシグナムたちの話しを聞き終わり、どうするかという話になって出た結論がこれだった。

小学生の、それも身体の不自由な少女がいきなり蒸発というのは問題なので、それならいっそいつものメンバーで八神家に厄介になろうということになったのだ。はやてはすごく喜んでいるようだった。

フェイトたちははやてと沢山話をした。どんなお菓子が好きだとか、学校でどんなことがあったとか、魔法のこととか。この三日の内にフェイトとなのは、はやてはすっかり仲良しになっていた。ただ、はやての口から澪の名前が出たときはフェイトは内心穏やかではなかったけれども。

そして今日は休日で、澪がハーレムを築いたという謎の人生ゲームをクロノを巻き込んで興じていた時だ。アースラに残っているエイミィから通信がはいった。

「澪君から通信がはいりました！」

フェイトの頭をすさまじい衝撃が駆け抜けた。

＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

通信を終え、僕とヴィータは八神家の前に立っている。どうもエイミィさん以外はここにいるようだ。

「どうしたんだよ、入らねぇのか？」

隣のヴィータが不審げな目線を向けてくる。もう僕たちは元の姿に戻っている。ヴィータは服がぶかぶかだ。

「いや、ちょっと入りにくくて」

「なんでだよ」

「実は・・これまでのことって全部独断専行なんだよね・・・・一応事後承諾として書置きと手紙を入れてあるけど」

「あー、なるほどな」

取っ手に手をかけ、ドアを開いた。目に飛び込んできたのは涙目で僕を睨みつけるフェイトだった。その後ろではドアに隠れながらなのはとはやてとシャマルがこちらを窺っている。

「えぇと・・・・ただいま」

僕のその言葉と共に、フェイトは走ってきて僕に抱きついた。そのまま胸に顔をうずめてしばらく微動だにしない。

「・・・・・・・バカ」

「フェイト？」

「・・・・バカバカバカバカバカバカバカ！本当に・・・・心配したんだから」

フェイトは顔を上げ、僕の左腕の方を見つめた。包帯でグルグル巻きになっており、そこに腕はない。今再生したのは肩の三角筋までだ。

「こんなに・・・・こんなになっちゃって・・」

フェイトは血が滲んだ包帯を見つめ、涙を流す。

「まぁ、大丈夫だよ、この程度は・・僕にとってはね。それより、早く皆と話をしないといけないし、三日も風呂に入ってないから汚いよ？」
「・・・・うん」
そう言いながらも、フェイトはしばらく離れようとしなかった。

リビングに入ると、人生色々と書かれた三日前僕もやった人生ゲームが開かれていた。クロノはコーヒーを片手にソファ出たそがれている。何かあったのだろうか。リンディさんは魔法瓶でリンディ茶を大量製造していて、シグナムとザフィーラは戻ってきたはやての横についた。
後ろから、「どうしたの！？ヴィータちゃんすごく汗臭い！」「うっせぇ！三日も風呂入ってないんだからしょうがねぇだろ！」というやり取りが聞こえ、ヴィータは風呂に直行したようだ。三日前が思い出される。
そして僕の姿を見たリンディさんが近寄ってきた。
「独断専行・・・・何か言うことは？」
「特にありません。こうするしかないと思ったので、そうしただけです」
リンディさんは僕の言葉に少し考える仕草をした。
「そう・・・・じゃあ、別にいいわ」
「それでいいんですか？」
「えぇ。正直助かりました。それに澪君は悪いことは何にもしてないもの。はい。これでも飲んで落ち着きなさい。ご苦労様」
そう言ってリンディさんはリンディ茶を勧めてくる。反射的に受けとってしまったのだが・・・・どうしよう。
決して口をつけられることのないコップを持ったまま、僕はシグナムに近寄った。そして懐から「夜天の書」を取り出した。
「はい。６６５ページまで集めてある」
「は・・？」

シグナムは唖然とした顔をした。
「ちょ、ちょっといいか？私の聞き違いでなければ６６５ページまで蒐集をしたと聞こえたのだが・・・・」
「そうだよ。見てみれば分かる」
シグナムは「夜天の書」を開いてページをめくっていく。そして最後のページまでめくり終わったようだ。正直、後ろから見た方が圧倒的に早いのだけど・・・・。
「驚いたな・・あれから三日しか立っていないはずだが・・・・」
「三日三晩不眠不休で集めたからね。おかげで今は眠いよ」
「・・・・大丈夫なのか？」
「ちょっと無理してるかもしれない。風呂に入ったら一度ちゃんと休息を取るよ」
「それがいいだろう」
ちなみにこのやり取りの間、ずっとフェイトが僕の背中にくっついている。それをはやてが引き剥がそうと必死なのだが、フェイトはびくともしない。背中にくっついたまま至福の表情を浮かべている。

そしてしばらくするとヴィータが風呂から返ってきた。僕も風呂にはいろうと思ったが、手に未だリンディ茶があることに気づく。どうしようと思って、ソファのクロノに近づいた。
「なんで・・・・ボクだけ不幸な目にあうんだ。人生ゲーム・・ボクの未来は真っ暗だって暗示か？」
なんだかお取り込み中のようだった。リンディ茶は風呂でこっそり処理してくることにしよう。
「はやて。お風呂を借りていいかな」
「えぇで～。三日もお風呂はいってないんやろ？早くはいってさっぱりしてきいや～」
「うん。そうする」
そこで着替えがないことに気がついた。

「リンディさん。僕の着替えってどうにかなりませんか？」
「エイミィに持ってこさせるわ」
「分かりました。じゃあお風呂にいってきます」
リビングを出て、トイレの向かいにある脱衣所に入る。この三日間ですっかり砂で汚れた服を脱いで洗濯籠らしきものに入れる。まぁ、左袖のないカッターは処分だけど。
そして風呂場に入る。当然のことながら水は張ってないので、シャワーで簡単に身体の汚れを落としてタオルで身体を洗うことにする。ボディソープを泡立て、全身に滑らせていく。そして僕はこれからのことについて考えた。

守護騎士たちは味方につけたし、フェイトたちも「夜天の書」のことについて理解した。はやても見た限り問題はなさそうだ。蒐集もあと1ページというところまで完了した。残る排除しなければならない要素はあの仮面の男である。
何者かという確証はない。だが、僕は気になっていることがある。あの仮面の男の蹴りのイメージだ。
もしあの仮面の男がリーゼロッテさんたちなら、これから話せば分かってくれると思う。だが、管理局の過激派だったとしたら・・目的は「夜天の書」の力を得ることに間違いない。制御できなくとも管理局に属すことを渋っている世界に転移させて破壊させるくらいのことはしそうだ。
どうやって行動する？心当たりのリーゼロッテさんたちに発破をかけてみるか？かけたとして・・・・もし仮面の男の正体がリーゼロッテさんたちだったとして、正直に答えるだろうか。まず答えないだろう。だがその時の反応からある程度探ることはできそうだ。
そしてもし管理局の過激派の連中なら・・・・特定のしようがない。倒したとしても次々と出てくるだけだろう。
計画の最後・・・・防衛プログラムの分離にははやての心理状態が大きく左右することになる。そのためにはあと少し時間が必要だ。

今が悪いわけでもないが、三日では受け止め切れていないようだったからな。その間、「夜天の書」は鉄壁に守らなければならない。この家に守護結界の敷設、街中にサーチャーを張り巡らす。やることは次から次へと出てくるな。

念入りに身体を洗ってお風呂から出た僕を待っていたのは、久々のちゃんとした昼食である。蒐集中は軍の携帯食料で済ませていたから、食欲が高まってきた。

大所帯となったのでテーブルには入りきれず、大人グループと子供グループで分かれているみたいだ。リンディさんたちがソファに座っていて、はやてを筆頭にフェイト、なのは、ヴィータ、クロノがテーブルに座っている。テーブルには六人目の食事が用意してあって、そこにつけということなのだろう。

僕はテーブルまで歩いていき、椅子を引いて座った。皆僕を待っていたようで箸を持っていない。ちなみにヴィータはよだれをこぼしながら焼き魚を凝視している。蒐集につき合わせた手前、待たせるのは非常に罪悪感がある。

「あ、澪君来たな～、じゃ、ご飯にしような」

「待ってたぜ！早くはやてのご飯食いて～！」

「「「「「「いただきます！」」」」」」

全員で食事の挨拶をする。おやつのときとはうって変わってヴィータはご飯をかき込んだ。そして至福の表情を浮かべる。一方の僕は焼き魚の身をとることから始めた。

「そういえば澪、左腕は大丈夫なのか？」

団欒とした食卓にそのクロノの一言で影が差した。はやては空気の変化に挙動不審になるし、フェイトは心配そうにこちらを見る。ヴィータもなんだか辛そうである。

「大丈夫だよ。一ヶ月もすれば生えてくる」

「・・・・は？」
「クロノ、細胞外マトリックスという物があってね。千切れた指にふりかけると傷が塞がるのではなく指が生えてくるというものなんだけど、今僕はアイリスで同じ現象を引き起こしてるんだ。止血もしているし、大丈夫なんだ」
魔人練成のことは話せないので、適当なことを言ってごまかしておく。まぁ、細胞外マトリックスの件は本当にあることだが。
僕のその言葉に一応周囲の空気が落ち着く。
「さ、ご飯食べよう」
魚の骨をとり終え、味噌汁のお椀を持って一口啜った。
「これってはやてが作ったの？」
「え？あ・・うん。そうやで」
「おいしいよ。味のバランスも絶妙だし・・火加減も良かったんだろうね、具の味がいい」
「そうやろうか？」
「うん。花嫁修業はしなくていいんじゃない？」
僕の言葉にはやては赤くなった。そしてフェイトとヴィータが僕を睨んでくる。二人はなにやら対抗意識を燃やしているようだった。

そして、おいしい食事を取ったからか僕は食後、リビングで寝てしまった。そしてすぐにそのことに後悔することになる。
戦いは、なにも正々堂々ばかりではないのだから。

第十五話A，s　闇の書の終焉　＜前＞（前書き）

難産でした。
パソコンの前に座っていても言葉が出てこない。一行書いたとしても続きが思い浮かばない・・・・そんな状態でした。
ではどうぞ。

第十五話A，s　闇の書の終焉　＜前＞

（澪！！！起きてくれ！！！澪っ！！！）

僕の意識はアイリスから流れてくるクロノの絶叫で覚醒した。急いで周囲を見わたすと、僕は知らない部屋に敷かれた布団の上で寝ていた。布団に入った記憶はないので、誰かが運んでくれたのだろう。

窓から見える空はもう既に暗く、しかし封鎖結界のせいで星は見えない。

「いったい何があったんだ？」

（夜天の書が覚醒した！今、なのはたちが交戦中だ！）

「なにっ！？」

僕は久々にあわてた。覚醒といっても段階がある。防衛プログラムが起動していたら、もう取り返しがつかない。

「すぐに行く！アイリスに位置情報を転送してくれ！」

するとすぐにアイリスに位置情報が送られてきた。玄関から出る時間も惜しく、転移で指定された場所に向かった。

転移するとそこにはクロノがいて、リーゼアリアさんとリーゼロッテさんがバインドで縛られていた。

「クロノ、いったい何があったんだ？」

「あぁ、あの後――――」

クロノは語りだした。七時をまわり、夕飯の支度をしていたのだそうだ。その時、急に封鎖決壊が街に張られた。そしてデバイスを起動する間もなく仮面の男が襲い掛かってきた。

仮面の男はその場にいた魔導師全員を拘束すると、夜天の書をシグナムから奪い取って守護騎士たちの魔力を蒐集、魔法生命体である守護騎士たちはその場で消滅・・・・というよりこの状況なら夜天の書に取り込まれたのか。
そして６６６ページの蒐集を終えた「夜天の書」は起動した。

「で、あとはクロノが仮面の男を捕まえ、フェイトとなのはが出てきた管理人格と戦闘になる・・と」
「そうだ」
仮面の男がリーゼアリアさんリーゼロッテさんだというのは想像していた。だからこそすばやく行動しようと思ったのに・・・・後手に回ってしまった。自分のふがいなさに泣けてくる。
「事情は分かった。状況を見るに、防衛プログラムはまだ起動していない。まだ間に合う、当初の予定通りはやての意識を保護して防衛プログラムを切り離す」
「あぁ！頼む！」
僕はなのはの魔力を感じる方に飛び立つ。おそらくすべてを理解したのだろう。リーゼアリアさんとリーゼロッテさんは絶望に打ちひしがれた目で僕を見ていた。

なのはと管理人格の女性は一度距離をとっているようだった。僕はなのはの横で止まる。
「澪君！フェイトちゃんが「夜天の書」の中に！私・・どうすればいいの！！？」
なのはは混乱しているようだ。来る前から感じていたが、フェイトの魔力反応が極端に小さい。なのはの話を聞くに取り込まれたの

か。魔力蒐集機能によって様々な種類の魔法も取り込んでいるはずなので、そういうことが起きても不思議じゃない。
僕はアースラに通信を入れた。
「エイミィさん。フェイトの魔力はどうなっていますか？」
（大丈夫、あるよ！それと澪君！フェイトちゃんは「夜天の書」に取り込まれたみたい！）
やはりそうか。だが、直接はどうにもならない。はやてが「夜天の書」の所有者権限を奪取するまでは。
「なのは、少々予定が狂ったが、今からはやての意識の保護を行う。フェイトは大丈夫だ、はやてが所有者権限を行使すれば何とでもなる、守護騎士たちもね」
なのはは僕の言葉に肩の力を向いた。
「そのために、まずはあの管理人格を拘束し、「夜天の書」に干渉しなければならない」
「でも、どうすればいいの？」
「魔法でノックアウトして、バインドで僕ごとグルグル巻きにするんだ。そうすれば暴れられても僕から逃れられない」
「分かった」
なのはは強く頷いて管理人格・・銀髪の女性を見る。
「アイリス、２ｎｄ　ｍｏｄｅで起動」
≪承知した！≫
右手に出現した銀の篭手を握りこんで、僕は管理人格と対峙した。

なのはの桜色の魔弾が管理人格の防御魔法によって防がれ、僕の右拳も同じ拳で相殺される。完全に、魔人練成によって強化されている僕と肉体強度で互角だった。６６６ページ分の魔力は伊達じゃないということだ。
「Ｓａｎｃｔｕａｒｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｅｘｃａｌｉｂｅｒ」を使おうにも、あんな魔力を抑えきれるかどうか分からないし、第一

なのはの「干渉力」まで押さえ込んでしまう。僕の「創造」は対象を選べないのだ。攻撃のときだけ発動させるということもできるが、こうも高速化した戦闘ではいつしくじるかわからない。
制限した魔力を開放するという選択肢もあるが、今の僕は万全の常態でなく、多大な負担を身体に掛けることになるだろう。それに聖遺物に非殺傷の概念はないのだから、威力がありすぎてはやてたちを傷つけてしまうかもしれない。アイリスも僕の全力の魔力には対応できない。このまま戦うしかないわけだ。
「澪君！少しだけでもあの子の動きを止められない！？」
なのはが遠くから大声を張り上げて言った。
「分かった！なんとかやってみる！」
僕のその返事を聞き、なのははなにやら魔法を準備し始める。フルドライブを使うみたいだ。
動きの止まったなのはに管理人格が向かう。僕はそれを遮って蹴りを落とした。管理人格はそれを受けざるを得ない。
「くっ！！！」
「もう一発！」
今度は身体を捻って突くような蹴りを放った。防御魔法で受けるが、なのはとは違う方向に吹き飛ばされる。僕は拳を握りこんでそれを追う。
「ブラッティ・ダガー」
管理人格の周囲に赤い魔弾が現れる。それが僕目がけて一直線に飛んできた。
「ディバイン・ブレードβ！続いてスティンガー・スナイプ！」
右手に魔力でできた剣が現れ、それで魔弾を砕く。間にあわないものは追尾機能を持ったクロノがよく使う魔法、スティンガー・スナイプで撃ち落す。
≪流石マスター！見事な軌道制御だ！≫
そしてその間も僕は管理人格に接近を続けている。
「アイリス！ソード・フォーム！」

篭手から剣へとアイリスが姿を変え、僕は剣を握る。
「ディバイン・ブレード！」
僕はアイスブルーに煌めくアイリスを管理人格に叩きつけた。しかししっかりと防御はされる。黒い魔方陣がアイリスの刃を遮っている。
「カートリッジロード！」
アイリスの刃の根元の飾りが上下し、デバイス内の魔力が増強された。防御魔法の限界を超え、少しづつひびが入り始める。
「邪魔だ。ブラッティ・ダガー」
バキィ！と防御魔法にひと際大きなひびが入った瞬間、赤い魔弾が僕の懐に飛び込んできた。直撃して吹き飛ばされる。
「お前も・・闇に沈め。ナイトメア・ハウンド」
「ク・・レストリクト・ロック！」
魔法が同時に放たれる。管理人格のは黒い高速の直射魔法、僕のは拘束魔法である。
その魔法も、魔法行使直後だったため受けることができず、直撃。しかし、僕の拘束魔法もしっかりと管理人格を捕らえた。その感触がある。
「なのは！」
僕は落下しながらなのはを呼んだ。
「うん！」
なのははデバイスから六枚の羽を出現させている。
「エクセリオンバスターA・C・S！！！」
そして彼女は管理人格に向けて突っ込んだ。

＝＝＝

でこんなことになっているのだろうか。はやてにはなにも分からない。
昼食を食べた澪君がソファで寝てしまって、ヴィータと一緒に彼をつついて遊んで、シグナムに二階へ運んでもらって・・・・その後はいつもと同じ時が流れたはずだった。
だが夕飯の支度をしている最中、急に街中の時が止まった。それは正解ではないが、はやてにはそう思えた。そして窓を破って乱入してきた二人組みの男、彼らはその場にいた全員を拘束し、自由を奪うと「夜天の書」をはやてから奪った。
そして彼女の目の前で守護騎士たちから最後の蒐集を行った。余剰分の魔力は破棄し、ピッタリ６６６ページになるようにして。仮面の男たち、リーゼロッテとリーゼアリアの目的は「闇の書」の破壊。守護騎士たちの存在は邪魔にしかならない。
そして地面に力なく落ちる所有者を失った服。先ほどまで何者かが着ていたことの分かるしわの入った服は、シュールなことこの上なかった。それが否応なくはやてに四人が消えてしまったことを自覚させた。
もういやや・・なんでこうなってしまうんやろう、はやての前から家族が消えた。
やっとできた家族なのだ。血はつながってなくとも、四人は自分の家族だった、はやてははっきりとそう思う。
彼女の心にぽっかりと空いた穴が、いっそうその現実を自覚させていく。そして思ったのだ。

――――初めから、全部、夢やったら良かったのに。

夢だったら、朝起きて楽しかったなと思うことができる。また同じ夢が見れないものかと夜を楽しみに一日を過ごせるかもしれない。けど、目の前の服は紛れもない現実の証で、四人はもういなくて、もう時間は戻らなくて・・・・。はやては悲鳴を上げるしかなかっ

た。

「ゆっくりと・・お休みください。我が主」

女性の声がはやての耳に届く。眠くて目も開かず、その容姿は確認できない。

はやてはその声の通り、眠ろうと思った。悲しくて、全てを忘れてしまいたかった。

「けど、ここは寒いんや」

温度のことではない。シグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラ、それとアースラのみんな、そして澪君。その誰もがここにはいない。孤独にはやての心は冷えきっていた。

はやては自分の周囲を薄暗いカーテンのようなものが包んでいるのを感じていた。きっとこれが澪の言っていた「闇の書の闇」なのだろうと思う。だが、それを打ち破る気力は今の彼女にはない。

――――はやては助かる。

澪の言ったその言葉、それがはやての頭によみがえる。

「嘘つき・・・・」

最後に出たその言葉は彼に言った言葉なのか、それとも頑張ると誓った自分に言った言葉なのか、それを考える前にはやての意識はゆっくりと閉じていった。

＝＝＝

「カートリッジロード！」
準備段階で使った三発、そして今ロードした三発で、装填数全てを一回の魔法に使ったことになる。防御魔法を貫いた魔力刃からはとてつもない魔力が迸っている。だが、デバイスからの漏れはほとんどない。魔法にほぼ完璧に魔力が伝わっている証だ。
「はあああぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
なのはがいっそうデバイスを握る手に力を込め、魔力を込め、管理人格の防御魔法にデバイスを食い込ませていく。
「く・・っ！！！」
管理人格が苦悶の声を上げる。防御魔法はガタガタと振るえ、維持するのが限界に近いようだ。
そして特大の魔力爆発が起きる。防御魔法は無惨にはじけとび、管理人格は余波で吹き飛ばされる。魔力爆発はすくに収まり、その爆心地にはなのはの姿。
管理人格はそのまま海に落ちていくと思いきや、空中で踏みとどまった。あれだけの魔力をその身に受け、未だ彼女の意識は健在なようだ。しかし肩で息をしている。
僕は急いで管理人格に接近し、バインドで縛る。
「なっ！」
そしてその上から僕ごと二重にバインドをかけた。これで作業に必要な隙間を残し、僕と管理人格はほぼ密着状態となる。
「なのは！さらにバインドを頼む！」
「うん！」
そしてさらにその上から桜色の帯が僕と管理人格を縛る。無論、僕の右手は自由だ。
僕は管理人格の頭を右手で掴んだ。といっても、子供である僕の手は小さいので額に手を置く感覚に近いが。
「ク・・こんなもの！」
管理人格はバインドから逃れようと必死で身を捩じらせるが、三重のバインドから抜け出るのは難しいようだ。もっとも、そうでな

くては困る。今からする作業は米粒に字を書くがごとく繊細な作業だ。完全に無防備になってしまう。
僕は「解析」を管理人格に使う。管理人格は「夜天の書」と密接な繋がりを持っているので、彼女に干渉することで「夜天の書」に接続することができる。
今は「夜天の書」が不安定だし、戦闘中だ。これが当初の予定通り、なんの邪魔もなく「夜天の書」への干渉に専念できるのなら管理人格を通さなくても「夜天の書」にそのまま鑑賞すればいいし、その方が効果が高い。だが、所有者を取り込み不安定な「夜天の書」に干渉するのはリスクが高すぎる。多少効果を削ってでも安全な方をとるしかなかったわけだ。
それに、「闇の書の闇」を切り離したとして、結局管理人格は助かりはしない。管理人格に干渉し、「夜天の書」のなかのはやての意識を保護すると同時に、管理人格の構成プログラムを「解析」しておけば、あとあと管理人格の復活も可能だ。言い方は悪いけど、彼女はプログラムで動く魔法生命体だからだ。
そして「解析」によって開けた道、それをたどって僕の意識は「夜天の書」に繋がった。

＝＝＝

「ようやく起きたね・・・・」
そしてどこからともなく澪の声が響いている。
「私、は」
「おはようございます。我が主」
はやては始めて見る銀髪の女性に戸惑ったが、声をかけた。
「あなたは、誰なん？」
「私は「闇の書」の管理人格、名前はありません」
「はやて。早く所有者権限を行使するんだ」
「澪君？どこにおるん？」
声は聞こえど姿は見えない・・・・はやては周囲を見回した。
「我が主、彼はここにいるわけではありません。彼は私を通じ、「闇の書」に、主に語りかけているのです。今は交戦中です」
そこまで聞いてはやてはようやく自分の状況を理解し始めた。そうだ。私は「夜天の書」に取り込まれてしまったんや、澪君が言うとった、自分をしっかりもたなあかんて。はやては気を持ち直した。
「澪君！まだ・・まだ大丈夫なん！？」
「あぁ。まだ防衛プログラムは出てきていない。今ならまだ間に合う。僕が管理人格を押さえている間に早く所有者権限の行使を。それで守護騎士たちとフェイトを「夜天の書」から切り離すんだ」
そう言うと澪君の声は遠ざかっていった。黒い空間に二人、はやてと管理人格が残される。はやては管理人格を正面から見つめた。
「所有者権限を持って命じる。早く防衛プログラムとシグナムたちを切り離すんや！」
「ですが・・・・主の望みは・・・・」
はやては願ってしまっていた。すべてが消えることを、永遠の暗黒を。あぁ、この子は私の望みを叶えようとしてくれてただけなんや、はやては自分が招いてしまったことに悲しくなった。
「あれは気の迷いや！改めて宣言する！防衛プログラムを切り離しぃ！私が主や！いうこと聞かなあかん！」
「了解しました」

「あ、そうや。名前がないんやったな。私がつけてええ？」
「はい。我が主」
「夜天の主の名において、汝に新たな名前を送る。強く支える者、幸運の追い風、祝福のエール、リィンフォース！セットアップ！！！」

＝＝＝

僕は海上を見る。そこには絶望を予感させる闇が渦巻いていた。
「あれが「闇の書の闇」。「夜天の書」を呪われた「闇の書」と言わせたプログラム・・・・」
はやてが現実を噛み締めるように重々しくつぶやいた。
そしてそうしている間に僕らにフェイト、なのはを初めとする皆が集まってきた。
「澪、これからどうするんだ？」
クロノが僕にそう聞く。
「予定は変わらない。「闇の書の闇」を殲滅する」
「だが・・・・どうするんだ？」
その時だ。オオオォォォォォン！！！！となにか生き物のうなり声のようなものが聞こえ、海上の闇の中からグロテスクなナニカが現れた。
「みんな、よく聞いてくれ」
僕はこの場にいる全員の耳に入るようにそう前置きして話し出す。
「一見あれは大きく見えるが、その本体、防衛プログラムのコアはほんの小さなもので、おそらくあの生物のような構成体の中だろう。何とかしてコアを露出させ、消滅させなければこの戦いは終わらない。そこで、皆にはあの構成体を魔法で攻撃し、コアを露出させて欲しいんだ」
「だが、「闇の書の闇」のコアは澪の見立てではかなりの強度があったはずだ。それこそアルカンシェルクラスの魔法でないと。一応アースラにもつまれているが・・・・」
クロノが言葉を詰まらせる。アルカンシェルは次元航行艦の主砲として搭載される魔法で、そのクラスの威力を人間が出すことはできない。
そして、アルカンシェルはこの地球に多大な被害をもたらすことだろう。それこそこの一帯の生命が消滅しかねない。
「それはダメだ！」
ユーノが声を張り上げる。

「アルカンシェルは強力な魔力で次元ごと対象を消滅させる魔法。こんな所で使ったらどんな被害が出ることか」
「えぇ！！？そ、そんなのダメだよ！！」
なのはが驚愕し、声を荒げた。
「もちろん、そんなことは僕にも分かっている。あるんだよ。アルカンシェル以外の方法が」
僕は「破滅の聖剣」を形成する。突然現れた黒い剣に、その存在を知らなかった者は驚いているようだ。
「この剣なら大丈夫だ。十分にコアを破壊するだけの威力を備えている」
強制転移で宇宙空間にコアを放り出してアルカンシェルを使うと言う手も考えられるが、その方法だと小回りが利きにくく、完全に消滅したかどうかも確認できない。
「まずはコアを露出させ、この剣で下から、天に目がけてコアを両断する。それなら地球にほとんど影響は出ない」
コアの自動再生の性質上、完全に、その欠片の一片まで消滅させなければならない。最初の計画では無生物の世界でアルカンシェルを使い、その後消滅を確認するつもりだった。宇宙空間では詳細な確認が取れない以上、僕は自分の魔力制限を解放するつもりだ。できるだけ隠しておきたいのは事実だが、使うべきところで使うのを躊躇う必要はない。
「その剣はアルカンシェルクラスの威力を秘めているのか？」
クロノが半信半疑と言った様子で聞いてくる。まぁ、この剣だけのものじゃない。僕の魔力と合わさって初めて実現するものだ。
「あぁ。少しベクトル違いの力だが、コアを破壊するのに十分な威力があるのは間違いない」
「そうか。僕は澪を信じる。皆はどうだ？」
クロノは全員を見渡し、確認を取った。それにフェイトをはじめ、その場にいた全員がうなずく。
だが、問題はある。完全に消滅させなければならないと言う都合

上、威力をめいっぱい上げて使う必要がある。アルカンシェルを大きく上回る威力を出すとなると、闇の書の闇の構成体に剣を振り下ろすことはできない。僕個人の魂の大きさはだいたい五十万人分で、黄金の破壊公の軍団（レギオン）約半分だ。しかし流出位階に至っていないため、発揮できる力は天と地ほども隔たっている。まぁ、習得したとしても流出位階を使うわけにはいかない。あれは世界を壊してしまうから。

その都合上、十分な威力を確保するために魔力の大部分を消費してしまうことになる。チャンスは二回といったところか。

「できるなら一撃で決めたい。だから、コアを露出させるところまでは皆にやってもらわなければならない」

僕の言葉に全員が首肯した。そして僕らは静かに「闇の書の闇」の防衛プログラムに向き直った。

第十五話A，s　闇の書の終焉　＜前＞（後書き）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8163n/

破滅の剣がリリカルに・・・・

2010年12月13日17時39分発行